



## 北海道大学大学院農学院

Graduate School of Agriculture, Hokkaido University

### 包括的先進農学フロンティア育成のための 国際教育プログラム

Global Education Program for AgriScience Frontiers

2022.4 - 2025.3

## 自己点検評価報告書

Self-Evaluation Report



2026年1月

January 2026

## 目 次

はじめに	1
I 特別プログラムの教育目的と特徴	2
I-1 目的・教育理念	2
I-2 特徴	2
1. 沿革	2
2. 募集対象	2
II 各分析項目および講評	3
II-1 実施体制	3
1. 教育面	3
2. 運営面	4
3. 自己評価／点検評価	4
II-2 実施内容	5
1. 入試	5
2. 教育	5
3. 生活面	6
4. 自己評価／点検評価	8
II-3 成果	10
1. 入学者数・国別内訳・在籍者数	10
2. 学業	10
3. 研究	10
4. 修了生の進路・キャリアパス支援体制・修了生ネットワークの整備	11
5. 修了者による評価	11
6. 自己評価／点検評価	12
III 今後の課題	15
資料編目次	17



## はじめに

「包括的先進農学フロンティア育成のための国際教育プログラム」は、文部科学省「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」として 2021 年度に採択され、2024 年度入学者まで実施された（第六期）。本プログラムの最終年度（2024 年度）に渡日した修士課程学生が博士後期課程を修了するのは 2029 年 9 月を予定しているが、本報告書では申請書の計画に基づき、前プログラム終了からの 3 年間における運営の総括および自己点検評価を実施した。

本特別プログラムの起源は、1997 年 10 月に北海道大学として最初に設置された英語コース「農芸化学特別コース」（第一期・10 研究室）にある。その後、第二期を経て、規模を拡充した「共生基盤科学のための英語による特別プログラム」（第三期・17 研究室）、さらに「生物圏に立脚した生存基盤確立のための英語による特別プログラム」（第四期・43 研究室）へと発展的改組を重ねてきた。現在の第七期に至るまで、通算 28 年にわたり実績を積み上げてきた本プログラムは、300 名以上の修了生を世に送り出してきた。その多くは母国の教育・研究機関において、高度な専門性を有する人材として活躍している。また、本プログラムは農学研究院・農学院のみならず、大学全体の国際化にも大きく貢献してきた。本学院においては、本プログラムの存在が教員・学生・事務部を含む組織全体に国際化の必要性を強く認識させる契機となり、留学生数の増加をはじめ、大学院講義の英語化率向上、留学生受入事務組織の体制改革などを牽引する役割を果たしてきた。

なお、本プログラムは 2024 年度に、新たな優先配置枠プログラムとして再び採択された。新プログラムでは、北海道大学農学分野が誇る高い教育・研究実績、およびこれまでの特別プログラムで培われた教育研究体制や国際ネットワークを継承・発展させ、多角的な視点で農業・食品・環境分野の課題解決を先導できる「包括的先進農学フロンティア」を育成することを使命としている。今回の自己点検評価では、新たに学内および他大学の特別プログラム担当教員、ならびに既設プログラム OB 教員等による外部評価を導入した。これにより PDCA サイクルを一層活性化させ、現在進行中の第七期以降のプログラム運営に貢献することが期待される。

最後に、第一期「農芸化学特別コース」を立ち上げられた北海道大学名誉教授・富田房男先生、本プログラムの専任事務担当職員として第二期（2005 年 4 月）から第三期までご尽力いただいた原田和子様、ならびに農学・食資源学事務部の歴代担当職員の方々に心より感謝申し上げます。また、本報告書の取りまとめにご協力いただいた本学大学院農学研究院の園山慶教授、歴代コース長（浅野行蔵名誉教授、波多野隆介名誉教授、生方信名誉教授、岩渕和則教授、平野高司教授、園山慶教授、信濃卓郎教授、森春英教授）、歴代アドバイザー（川端潤名誉教授、森春英教授、波多野隆介名誉教授、岩渕和則教授、園山慶教授）、さらに本プログラムを統括していただいた歴代研究院長（諏訪正明名誉教授、故・服部昭仁名誉教授、松井博和名誉教授、丸谷知巳名誉教授、横田篤副学長、西邑隆徳副学長）に厚く御礼申し上げます。

2026 年 1 月

北海道大学大学院農学研究院  
研究院長 野口 伸

北海道大学大学院農学院英語特別コース  
コース長  
北海道大学大学院農学研究院  
奥山 正幸

## I 特別プログラムの教育目的と特徴

### I-1 目的・教育理念

本プログラム「包括的先進農学フロンティア育成のための国際教育プログラム」の目的は、北大農学のミッション「恵まれた自然環境の下、生物生産の基盤となる基礎生物科学、持続的生産管理システム、食品の生体調節機能、多様な環境における生体系機能やその保全などに関する世界トップクラスの教育研究リソースを活用し、人類の生存基盤の確立に寄与する国際的人材を育成する」（2014年4月文部科学省）を具現化することである。これまで五期24年にわたって実施してきたプログラムでは、北大の教育研究の基本理念「フロンティア精神、国際性の涵養、全人教育、実学の重視」と北大農学の理念「生物圏に立脚した生存基盤の確立を通して人類の持続的繁栄に貢献する」とを融合したカリキュラムにより、主に東南アジア（ASEAN）地域の途上・中進国における留学生の教育に努めてきた。第六期となる本プログラムでは、これらの取り組みを継承しつつ、第五期プログラムの自己点検評価（2023年3月実施）の結果を踏まえ、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に貢献する人材の育成、入学候補者の獲得に向けた協働拠点との連携強化を重点化し、優秀な人材確保・育成体制を一層強化することを目指した。

### I-2 特徴

#### 1. 沿革

1997年10月に北海道大学として最初に設置され、二期10年にわたって実施された英語コース「農芸化学特別コース」（10研究室）が英語特別コースの前身である。その後、大学院農学院英語特別コースへと発展し、以下のプログラムを実施した。

- ・ 第三期（2007～2012年度）「共生基盤科学のための英語による特別プログラム」（17研究室）
- ・ 第四期（2013～2018年度）「生物圏に立脚した生存基盤確立のための英語による特別プログラム」（43研究室）
- ・ 第五期（2019～2021年度）「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」（42研究室）

2021年度に「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に採択され、2022年10月より3年間実施した（第六期、42研究室）。なお、4月入学を設定しているため、農学院内の運営は2022年4月から開始した。本プログラムは文部科学省の事業であり、新たに海外から我が国の大学に留学する優秀な留学生を獲得する仕組みの構築を促すことを目的としている。

#### 2. 募集対象

本プログラムは修士2年+博士後期3年の形態をとり、プログラムの趣旨・教育理念に基づき、各年、修士課程・博士後期課程にそれぞれ4名、合計8名を国費優先配置留学生（国費留学生）として配置した。さらに、私費留学生（16名）の受け入れを目指した。東南アジア諸国からの留学生を主な対象とした。入学時期は、国費留学生の場合は10月、私費留学生については10月の他に4月、の年2回とした。本プログラムでは国費留学生以外を全て私費留学生として区分し、ここには大使館推薦枠、政府派遣留学生および純然たる私費留学生が含まれる。また、日本人の博士後期課程学生（4名）の受け入れも目指した。

## II 各分析項目および講評

### II-1 実施体制

#### 1. 教育面

大学院農学院は、農学専攻3コース「生産フロンティアコース」、「生命フロンティアコース」、「環境フロンティアコース」から構成される。本プログラム所属留学生は、研究分野に応じていずれかのコースに所属する。担当教員は、農学研究院の「基盤研究部門」（7分野）と「連携研究部門」（2分野）のいずれかに所属し、各コースに所属する留学生を指導した。

本プログラムには、農学研究院全61研究室の約70%にあたる42研究室が参画している（表1）。このように本プログラムは、農学院・農学研究院全体が連携する横断的なプログラムである。

表1 英語特別コース参加の研究室および教員一覧（2025年11月現在）

グループ	領域	研究室名	教授	准教授	講師	助教	オブザーバー
1	食料生産 11研究室	作物学		柏木純一		中島大賢	
		動物機能栄養学	◎小池 聰			三浦広卓	
		ビークルロボティクス	野口 伸	楊 亮亮		Ricardo Ospina Alarcon	
		循環農業システム工学	岩渕和則	清水直人		伊藤貴則	
		生物生産応用工学					石井一暢
		作物栄養学	信濃卓郎	渡部敏裕		丸山隼人	
		開発経済学	近藤 巧	合崎英男			
		環境生命地球化学					内田義崇
		農資源経済学					齋藤陽子
		植物育種学	貴島祐治	小出陽平		徳山芳樹	
		植物ゲノム科学					Maria Stefanie Dwiyanti
2	環境保全 11研究室	土壤学	当真 要	中原 治	倉持寛太		
		農業土木学		山本忠男			
		生態環境物理学	平野高司		岡田啓嗣 山田浩之		
		土壤保全学	濱本昌一郎			辰野宇大	柏木淳一
		造林学	宮本敏澄		齋藤秀之		
		流域砂防学	山田 孝 笠井美青			桂 真也	
		陸域生態系モデリング					加藤知道
		生態系管理学	森本淳子	◎石山信雄			
		森林政策学	庄子 康			尾分達也 豆野皓太	
		花卉・緑地計画学	愛甲哲也		松島 肇		
		林産製造学	玉井 裕	幸田圭一			
3	食品科学 9研究室	食品栄養学	石塚 敏	比良 徹			
		食品機能化学	●園山 慶	加藤英介		逢坂文那	
		食品加工工学	小関成樹	小山健斗			
		分子酵素学	※奥山正幸	田上貴祥			
		生物化学	森 春英	佐分利宣		太田智也	
		微生物生理学	吹谷 智	前田智也			
		応用分子微生物学					曾根輝雄
		応用食品科学	玖村朗人			早川 徹	
4	生命科学 11研究室	細胞組織生物学	◎若松純一	小林 謙			
		生物有機化学	松浦英幸	北岡直樹			
		生態化学生物学	橋本 誠 ◎崎浜靖子	村井勇太			
		木材化学	浦木康光		重富顕吾	鈴木 萁	
		分子生物学	尾之内均			平郡雄太	
		応用分子昆虫学	浅野眞一郎	佐藤昌直			
		植物病原学			中原健二		
		根圈制御学		江澤辰広			

	基礎環境微生物学 田村具博 鎌形洋一	森田直樹 北川 航 菊池義智			
	動物生態学 荒木仁志			坂田雅之	
	ゲノム生化学				高須賀太一
	昆虫体系学 ◎大原昌宏 吉澤和徳				

※コース長 ●アドバイザー ◎副コース長

## 2. 運営面

本プログラムは、英語特別コース会議の意思決定に基づき運営されている。同会議で審議・議決された事項は、農学院教授会に付議され、最終決定される体制である。学位審査については、留学生の研究内容が複数コースに跨るなど、通常のコース教授会のみでの対応が困難な場合があるため、内規を整備し、英語特別コース会議において審査可能な体制を構築している。

英語特別コース会議は、農学院等の教授会と同程度の頻度（年6～8回）で開催され、全参加研究室の担当教員が出席することで、密接な情報共有と意思疎通を図っている。議題の一例は囲みに、2022年度から2024年度の議事録を資料編（資料1(p. 18)）に収録した。

本プログラムは、生命科学、食料生産、環境保全、食品科学を含む農学全体を対象とするため、参加研究室を4つの研究領域に区分して運営している（表1）。運営責任者であるコース長（任期2年）はこれら4領域の教授から選任され、2022・2023年度は信濃卓郎教授、2024年度は森春英教授が担当した。また、各領域から選出された1名ずつの副コース長と、国際連携担当教員1名（2025年現在は崎浜靖子教授）の計5名が、コース長を補佐し運営を支えている。さらに、本コースの運営に精通した教授をアドバイザー（任期2年）として配置し、助言を得る体制を整えている。2022～2024年度のアドバイザーは、岩渕和則教授、森春英教授、園山慶教授である。事務面においては、長年にわたる本プログラムの運営実績を基盤として、農学・食資源学事務部農学院教務担当による組織的な支援体制が確立されている。

### 英語特別コース会議の議題一例（2024年11月7日（木））

1. 2025年4月入学者合否判定（私費）
2. 2025年10月入学の国費採用決定
3. 副コース長の選出
4. 日本人学生の英語特別コース参加について
5. 2025年3月修了予定者（DC）のスケジュール

## 3. 自己評価／点検評価

教育においては、農学研究院の研究室の3分の2以上が参加する体制を構築し、研究院が一体となって協力することで、留学生に対し幅広い科目選択を提供する充実した教育プログラムを実現した。

運営においては、コース長、副コース長、アドバイザーからなる執行体制を強化し、意思決定の迅速化を図った。また、事務部による組織的な支援体制の整備を進めた結果、その経験とノウハウが特別コースのみならず一般コースの留学生受入事務にも活かされ、農学・食資源学事務部全体の留学生支援体制の強化に繋がった。

## II-2 実施内容

### 1. 入試

候補者の選考では、書面選考と3名以上の教員による直接面接を基本としつつ、オンライン面接およびメールインタビューも利用し、専門知識、英語能力（会話ならびに文章読解および記述）、人間性、意欲、および研究計画について評価した。オンライン面接およびメールインタビューの場合には、各教員あたり3回以上の試問を実施した。留学生の出願要件には、GPA（最大値3）が2.30以上であること、CEFR B2相当以上の英語能力を有することが含まれる。英語能力の評価基準を、以前よりも厳格化した。

農学院のウェブサイト内に専用ページを設置し、教育・研究や入試に関する情報を公開した。また、2015年度に作成した英文リーフレットを留学生の獲得に活用している。本プログラムの募集要項および入学願書（英語版）については、専用ページにて公開されており、本報告書の資料編（資料2（p. 43）、3（p. 70）、4（p. 81））に博士後期課程の募集要項（英語版・日本語版）および出願・入学スケジュールを収録した。なお出願枠により以下のように流れが異なっている。

#### （1）国費留学生の場合（10月入学のみ）

本プログラム修了生等の人的ネットワークを活用し、農学研究院の教員は関係大学の大学長、教員に成績優秀者の推薦を依頼した。各教員はその候補者の成績や人物の事前評価を行い、国費留学生候補として英語特別コース会議に推薦した。なお、国費留学生は毎年度修士課程・博士後期課程各4名という人数の制約があるため、上記の4研究領域に各1名ずつを割り当てた。領域内での受入れ研究室（教員）の決定については、各領域内で協議し、特定の研究室に留学生の配置が偏ることのないよう配慮した。受入れ国については、東南アジア（ASEAN）諸国を主な対象とした。

#### （2）国費枠外（大使館推薦等）留学生・私費留学生の場合（10月、4月入学）

入学希望者は募集要項を入手のうえ、関心のある研究分野の教員に受入を打診し、該当教員の受入内諾を得た上で本プログラムに出願する形式をとった。

英語特別コース会議は、（1）（2）の手順により候補者から提出された出願書類および受入れ予定教員によるメールインタビューの経過説明を基に審査を行い、合否を判定した後、農学院教授会に付議し、最終決定を得た。以上の流れは資料編募集要項内にもフローチャートとして示した（資料2（p. 54）、3（p. 80））。

なお、修士課程から継続して博士後期課程へ進学するものについては、修士課程における学業成績をもとに、博士後期課程進学に足りる研究能力を有することを英語特別コース会議にて審議した。

### 2. 教育

#### （1）指導体制

研究指導、論文作成指導については、2019年に農学院に導入されたメンター制度にもとづき、日本人学生と同様に学生ごとに主指導教員1名の他に副指導教員3名以上を配置した。なお、農学院では、専門的でありながらも総合的視野を持った学生の育成を目指し、広い視点からの教育を行うことを念頭に、留学生が所属するコース以外を担当する教員を副指導教員のメンバーに含めている。また主指導教員の博士後期課程学生に対する論文指導の意識をより高めることを目的に、標準修業年限の1年半前から学位論文授与までのあいだの5回の英語特別コース会議において、指導学生の論文進捗状況を口頭および文書で報告することを義務づけている。

## (2) カリキュラム

本プログラムのカリキュラムは農学院の課程に準じ、研究（論文）、演習（ゼミ）、講義（座学）により構成される。留学生は専門領域の科目に加え、農学分野の広範な科目や、全学対象の「大学院共通授業科目」も選択可能である（教育課程表：資料5 p. 82）。

プログラム独自の履修ガイダンスを開催し、カリキュラムの周知を図った。また、メンターおよび留学生個々に配置した学生チーフターによる多層的な相談・支援体制を整備した。

教育研究レベルの維持・向上を図るため、進級要件として各年度の学業成績係数2.3以上（満点3.0）を設定した。なお、修了に必要な取得単位数は日本人学生と同様、修士課程30単位、博士後期課程12単位である。

## (3) 使用言語

本プログラムでは、使用言語を英語としている。講義に関しては、33科目を完全英語対応の講義とし、その他の講義に関しても、留学生が理解できるよう配慮した講義資料を用いることとしている。なお完全英語対応の講義のみで必要単位を取得することが可能である。完全英語対応の講義については資料編（資料5（p. 82））の実行教育課程表の言語欄にEを記した。修士課程では、77科目中33科目が完全英語対応の講義である。例えば、農学院必修科目6科目のうちの4科目（「人口・食料・環境学総論」・「温暖化影響学総論」・「実践農学総論」・「農学フロンティア総論」）が完全英語対応で実施される。3フロンティアコースそれぞれに特徴的な授業科目で構成される選択科目では、「農業植物科学特論」、「食品科学特論」、「生態進化学特論」、「国際農学特論」などの講義科目といくつかの「演習」科目が完全英語対応である。博士後期課程では、17科目中9科目（53%）が完全英語対応である。

研究室における研究指導、論文作成指導、事務連絡は英語で行われ、各研究室には、英語版実験資料や実験機器マニュアルの整備を促している。また、2015年に英語特別コースが出版した農学全般をカバーした英文テキスト「Frontiers of Agricultural Science（松香堂、277ページ）」が作成されており、講義の教科書あるいは副読本として利用されている。

## (4) 日本人学生の参加

本プログラムは、各年度4名の日本人博士後期課程学生の受け入れを目標としている。採用された学生は、学位論文の英語作成および英語による学位審査の公開発表を行うこととし、修了時には修了証（Certificate）が授与される。農学院においては、必修科目の3分の2、および選択科目の約半数が英語で開講されているため、日本人学生も英語で講義を履修することになる。加えて、本プログラム参加研究室では演習ならびに研究討論も英語で実施される。したがって、当該研究室に所属する日本人学生は、本プログラムの準参加者と位置づけられる。

## 3. 生活面

### (1) 全学的な取り組み

本学では、渡日時の諸手続きや生活基盤の立ち上げ、その後のフォローアップを行う日本人学生の「留学生サポーター」による個別支援を実施している。加えて、寮・宿舎の提供、保険制度や各種奨学金の情報提供を行うとともに、学生相談、修学支援、ハラスメント相談等の各種窓口を整備し、多面的な支援体制を構築している。

### (2) 農学院独自の取り組み

農学院として、独自に以下の留学生サポートを提供している。

(A) 国際連携教員によるサポート

受入れ教員やコース長に加え、2名の国際連携教員を配置し、留学生のメンタルヘルスや生活上の相談にきめ細かく対応できる体制を整えている。

(B) チューターの配置

新規渡日留学生1名に対し日本人学生チューターを1名配置し、1年間にわたり修学および研究活動の支援を行っている。(2022年度まで)

(C) メーリングリストによる英語での情報提供

講義・行事の連絡や、助成・奨学金などの重要情報は、大学院生向けメーリングリスト及び情報配信アプリ（Unire）を通じて随時日英併記で発信している。

(D) フィールドツアー

留学生相互の交流と、日本・北海道農業への理解深化を目的とした日帰りバスツアーを、札幌農学同窓会の支援を受け30年間にわたり毎年開催している。

(3) 本プログラム独自の取り組み

5期24年間にわたる本プログラムの運営経験を踏まえ、以下の取組みを行った。

(A) 新入生オリエンテーション（10月・4月）

コース長が中心となり、プログラム構成研究室の紹介、新入生の自己紹介、履修ガイダンス、学生生活上の注意点などを英語で説明する新入生オリエンテーションを入学時期に合わせ年2回実施した。

(B) 新入生歓迎会（10月中旬）

新入生の歓迎および留学生間の親睦を図るため、本プログラムに所属する全留学生と関連教職員が参加して開催した。

(C) 修了式（9月下旬）

9月修了者に対しては大学全体の博士コース修了生を対象とした学位記授与式に加え、本プログラム独自の修了式を実施し、修了を祝した。

(D) 送別会（8月中旬）

9月修了予定者の学位論文公開発表会終了後、修了後の交流維持を目的とした送別会を開催した。

(E) 留学生学生委員会の設置

プログラムへの帰属意識の醸成と責任感を養うため、博士後期課程1年次の学生を中心に「留学生学生委員会」を組織し、上記行事の運営補助を行った。

(F) 英語特別コースディレクトリ（名簿）の配布（2月）

本プログラム所属の全留学生、教員、事務職員を研究室・部署ごとにまとめた顔写真付きディレクトリ冊子を毎年作成・配布し、相互理解に役立てた。

#### 4. 自己評価／点検評価

##### (1) 入試

1. 優秀な学生の戦略的獲得。本プログラムでは、修了生および海外共同研究先との人的ネットワークを活用し、修士・博士後期課程における優秀な学生の獲得に努めた。「農芸化学特別コース」を含む過去5期24年の博士後期課程修了者のうち、約150名が母国で教員や研究者として活躍しており、彼らが適格な学生を推薦するスカウト網として機能している。加えて、出願要件の厳格化も学生の質向上に奏功した。この選抜システムは極めて有効に機能しており、今後も継続する方針である。

2. 私費留学生獲得に向けた広報強化。プログラムの更なる発展に不可欠な私費留学生獲得のため、広報活動を以下の通り強化した。

- ・ 専用ウェブサイトでの継続的な募集要項・関連情報の発信
- ・ Facebook や X 等の SNS を活用したイベント情報の周知
- ・ リーフレット配布による積極的な広報展開

これらの施策はプログラムの認知度向上と候補者層の拡大をもたらし、事業の発展に寄与している。

3. 短期留学制度との連携。本学の短期留学プログラム (HUSTEP) や日本学生支援機構の交流支援制度 (SS/SV) を活用し、短期留学生に対して本プログラムの英語講義や実験実習を体験させる機会を設けた。これにより、本人の出願意欲向上に加え、帰国後の所属大学における口コミ効果も得られた。実際、2022年度には SS/SV 経験者が本プログラムへ入学しており、リクルート活動として一定の成果を上げている。

##### (2) 教育

1. 教育カリキュラムと指導体制。本プログラムには、農学研究院全体の69%に相当する42研究室が参画しており、食料生産、環境保全、食品科学、生命科学といった農学領域を幅広くカバーしている。これにより、専門分野にとらわれない幅広い教養を習得可能なカリキュラムを構築した。また、25年にわたる英語特別コースの実績を基盤として、英語による講義・演習および研究指導が定着しており、留学生による多様な研究成果の創出に結びついている。

2. 学生の質の確保と修了支援。進級要件として学業成績係数の下限を設定した結果、本プログラム修了者は農学院の他の留学生と比較して高い学業成績を維持した。また、複数教員によるメンター制度の導入や、論文進捗状況の定期的な報告を義務付けたことにより、留学生の標準修業年限内での修了を実現している。

3. 日本人学生への波及効果と課題。日本人博士後期課程学生の受け入れは、年間目標4名に対し実績は計2名（2023年度1名、2024年度1名）にとどまり、リクルート面で課題を残した。一方で、プログラム参加研究室では日本人学生が留学生と共に英語で指導を受けているほか、非参加研究室の学生も本プログラムの英語講義を受講している。このように、本プログラムは対象者のみならず、日本人学生全体の国際性の涵養に大きく寄与しているといえる。

4. 教育の質保証。教員および留学生を対象に英語講義に関するアンケートを実施した。これにより、英語教育に対する教員の意識向上を図るとともに、講義内容の改善へつなげるPDCAサイクルを確立した。

##### (3) 生活面

1. 生活・研究環境の整備。全学的な支援、農学院独自の取り組み、および本プログラム独自の活動を有機的に組み合わせることで、留学生に生活面での多層的なサポートを提供した。これにより、留学生が来日直後から生活面の不安を感じることなく、安心して研究活動に専念できる環境を確立している。

2. 学生委員会によるネットワーク形成。博士後期課程1年生の留学生を中心とした「学生委員会」を組織し、留学生全員参加型イベントの企画・運営を一任した。自主的な活動を通じて学生間の一体感が醸成され、これが修了後も続く強固な人的ネットワークの基盤となっている。

3. コミュニケーションツールの活用。第1期から継続して「英語特別コースディレクトリ」を作成・配布している。これは留学生間および教員・学生間の円滑なコミュニケーションを促進するツールとして定着しており、その印刷費は農学院予算から充当されるなど、組織的な支援体制も整っている。

## II-3 成果

### 1. 入学者数・国別内訳・在籍者数

入学者数の推移は資料編（図1および図2、p.113）の通りである。2022年度から2024年度までの3年間における修士課程への入学者数（図1）は、順に8名、8名、10名で、総数は26名であった。また、博士後期課程（図2）の入学者数は、順に11名、16名、9名で、総数は36名であった。

入学者を学生区分別に見ると、本プログラム優先配置枠による国費留学生の総数は22名（修士12名、博士10名）であった。これに対し、私費留学生（個人私費、政府派遣、および特別枠外国費留学生を含む）の総数は40名（修士14名、博士26名）に上り、国費留学生に対する比率は修士課程で約1.2倍、博士後期課程で約2.6倍に達した。なお、同期間における日本人学生の参加は、2023年度の1名、2024年度の1名にとどまった。

プログラム第一期から第六期までの年平均入学者数を比較すると、修士課程では順に6.0名、6.0名、7.6名、11.0名、13.0名、8.6名、博士後期課程では5.2名、7.2名、8.2名、12.0名、15.3名、12.0名であった。第五期と比較すると、第六期（当期間）では特に修士課程において入学者数の若干の減少が見られる。

2022年度から2024年度に入学した留学生（実人数59名）の国別内訳を図3（p.114）に示す。なお、修士課程のみ在籍する学生や、同期間に修士から博士後期課程へ進学した学生が含まれるため、前述の課程別入学者数の合計とは一致しない。国別ではインドネシア共和国が18名と最多で、次いで中華人民共和国（14名）、バングラデシュ人民共和国（7名）、タイ王国（4名）と続く。第五期では中国からの留学生が37名と全体の41%を占めていたが、第六期では14名となり23名の減少となった。一方で、本プログラムが主要対象国とするASEAN諸国からの入学者は計26名（内訳：インドネシア18名、タイ4名、ベトナム社会主義共和国2名、マレーシア1名、ミャンマー連邦共和国1名）となり、全体の44%を占めた。また、全留学生59名のうち国費留学生は28名であり、そのうちASEAN諸国からの入学者は18名（64%）であった。

2022年度から2024年度のプログラム在籍者数は60名台で推移した（図4、p.114）。国別在籍者数（図5、p.115）では、中国からの留学生数が減少した一方、インドネシアおよびバングラデシュからの留学生数は増加傾向にある。他国については、同3年間で大きな変化は見られなかった。

### 2. 学業

2020年度～2023年度入学者（20、21年度は第五期入学）の修了状況を資料編表1（p.116）に示した。修士課程については、入学者40名のうち36名（90%）が標準修業年限内で修了した。なお、疾病等による休学者が3名、疾病や家庭の事情による退学者が2名生じている。博士課程については、入学者35名のうち28名（80%）が標準修業年限内で修了し、2名が単位取得退学となった。なお、国費留学生については、全員が課程博士の学位を取得している。年度別の修士・博士論文の著者および題目については、資料編 資料6（p.86）を参照されたい。

2022年度～2024年度の本プログラム修士課程修了者の学業成績（GPA：4.0満点）は、平均3.0、かつ3.0以上の学生の割合が70%に達した。農学院一般コース所属の留学生（平均2.9、3.0以上の割合40%）と比較すると、本プログラム修了生は相対的に高い学業成果を上げていると言える。

### 3. 研究

2022年4月から2025年9月までの期間における原著論文、総説、著書、特許、学会発表、および受賞について、本コース所属の指導教員へ調査を依頼し、「研究業績一覧」として研究室別に資料編（p.117）にまとめた。また、種別ごとの件数は資料編表2（p.116）の通りである。博士

後期課程在学生一人あたりの原著論文数は、2022年度が0.76編、2023年度が1.2編、2024年度が0.49編となった。また、2022年度から2024年度における国内外での学会発表総数は、各年度およそ40件で推移した。これらの実績は、過去の数値と比較しておおむね同等の水準である。なお、本プログラムでは博士後期課程の修了要件として、第1期開始時より学術論文1本以上の出版を課している。さらに第6期プログラムにおいて、修士課程から博士後期課程まで5年間継続して在籍する学生に対しては、可能な限り2本以上の出版を目指すよう求めた。また、本特別プログラムでは従前より、学位論文の公開発表時に、学術論文、国内外の学会発表、受賞等の活動状況について報告することを義務づけており、学生の研究成果を確実に把握する体制をとっている。

#### 4. 修了生の進路・キャリアパス支援体制・修了生ネットワークの整備

2022年4月から2025年3月までの修了生の進路状況を資料編表3(p.116)にまとめた。修士課程修了者30名のうち、20名が博士後期課程に進学し、各自の研究をさらに深化させた。残り6名が日本国外の民間企業に就職している。博士後期課程修了者の進路は、修了者24名の内訳は、大学教員(国内外)が7名(29%)、大学・国立研究所等の研究員が10名(42%)、民間企業の社員が6名(25%)であった。このうち、日本国内の大学・研究機関等に就職した者は8名、日本国内の民間企業に就職した者は4名となっている。

本プログラムでは、社会を俯瞰し将来像を描く能力の涵養を目指し、専門分野にとらわれず幅広い教養を習得可能なカリキュラム(必修科目「農学フロンティア総論」「実践農学総論」「リーダーシップ学総論」など)を設定している。これに加え、本学の大学院共通授業科目である「国際インターンシップ(短期海外就業体験)」の活用も推奨している。また、国内外の学術会議への参加および成果発表を、研究者ネットワークへのアピール、すなわち就職活動の一環と位置づけ、積極的な参加を奨励した。これに関連し、札幌農学同窓会による資金援助制度を通じた支援も行われている。さらに2024年には、活躍する修了生を招へいしたキャリアパス講演会「Alumni国際セミナー」を開催し、ロールモデルの提示を通じて学生が具体的な将来像を構築できるよう支援した。

本プログラムでは卒業・修了生とのネットワーク維持を重視しており、正規課程修了者に対して大学同窓会および札幌農学同窓会への入会を推奨し、本学とのつながりの継続を図っている。修了生との関係維持のため、指導教員には担当した修了者との連絡(年2回)を義務付け、進路や近況の把握に努めた。また、これまでの修了生の中から、各国で教授職等に就いている者を本プログラムの「プログラムフェロー」に任命し、広報、リクルート、就職支援、研究教育協働に至るまで、現地パートナーとして連携できる体制を整備した。このほか、550を超える本学ならびに農学院の協定校をはじめ、インドネシアやタイの北大フロントオフィス、海外オフィスやリエゾンオフィスを通じた人的ネットワークも構築されている。運営体制としては、農学研究院の国際協働連携室の教員1名を英語特別コース副コース長に配置し、海外拠点大学と連携した留学生リクルートや国際共同研究の推進を強化した。

#### 5. 修了者による評価

本自己点検評価報告書の作成にあたり、2025年8月に本プログラム修了生121名(2022年9月～2025年3月修了者)ならびに在学生を対象としたアンケート調査を実施し、41名から回答を得た。調査項目は「北海道大学の評価」、「本プログラムの評価」、「就職」および「北海道大学への希望」に関するものである。集計結果を資料編(資料7(p.90))に示す。北海道大学の評価(印象、教育や生活に対する満足度など)については、多くの設問において90%以上の回答者より「満足」との評価が得られた。一方で、大学院の授業内容、日本語教育に関しては満足度が約75%にとどまった。入学時に期待していたこととして、多くの回答者が質の高い教育・

研究や国際交流をあげており、ほとんどの回答者がそれらの期待をかなえられたと回答した。一方、人的ネットワークの形成および維持については、いずれも 40%程度の修了生が「できない」と回答しており、今後の課題が浮き彫りになった。本プログラムのコンセプトについては、85%が良い印象を持ち、およそ 80%の回答者が入学にメリットを感じたと回答した。入学したことのデメリットとして挙げられたのは、日常生活に必要な日本語を学ぶ機会が少ない、一般コースと比べて講義等の選択肢が限られている、との回答があった。就職に関しては、およそ 80%の修了生が「北海道大学で研究したことが現在の職業で生かせている」と回答した。本プログラムのコンセプトや内容はおおむね留学生のニーズに合致しているといえる。また、北海道大学での教育に期待することについては、「高度な専門知識」が 26%、「語学力」および「国際感覚」がいずれも 20%であった。さらに、母国において本プログラムの発展への協力意向をしめした修了生はおよそ 90%であった。

## 6. 自己評価／点検評価

### (1) 入学者数・在籍者数・国別内訳

本プログラム優先配置枠による国費留学生の総数 22 名に対し、私費留学生（個人私費、政府派遣、および大使館推薦を含む）の総数は 40 名であった。これにより、本プログラムが掲げる「年度ごとに国費留学生 8 名に対し私費留学生 16 名を獲得する」という目標はおおむね達成されたと言える。私費留学生の増加については、農学分野の多様な研究領域をカバーする本プログラムの実施体制が、留学希望者の多岐にわたるニーズに対応できたこと、ならびに修了生ネットワークの強化やウェブサイト・SNS による情報発信を通じて本コースの知名度が向上したことが要因と考えられる。また、本プログラムが主要対象国と位置づける ASEAN 諸国からの入学者は全入学者 59 名中 26 名を占めており、地域別の獲得目標についても達成することができた。これは、インドネシアおよびタイに設置された北大フロントオフィスの活用が功を奏した結果であると分析している。一方で、日本人学生の参加数は伸び悩んでいる。今後は、日本人学生およびその指導教員に対し、本プログラムに参加する意義やメリットをより丁寧に周知・説明していく必要があると考えている。

### (2) 学業

対象期間における標準修業年限内修了率は、修士課程で 90%、博士課程で 80% であった。特に国費留学生については、全員が標準修業年限内で修了し学位を取得している。これは、文部科学省が修業年限内での修了を求めていることを背景に、留年を原則認めない方針を徹底した成果であると考えられる。具体的には、学生に対しては出願時や新入生オリエンテーションにおいて、指導教員に対しては英語特別コース会議において、ルールの周知・徹底を図ってきた。

一方で、疾病や家庭の事情による休学者や退学者が毎年生じていることも事実である。今後は、出願段階で学習計画や健康状態をより慎重に確認することに加え、入学後も定期的な研究進捗の確認やメンタルサポートを実施するなど、学生の問題を早期に把握・対処できる体制の整備が求められる。

本プログラムでは設置当初より、標準修業年限内での博士学位取得を目標に掲げてきた。文部科学省の中央教育審議会答申においても「標準修業年限内の学位授与を促進する体制整備が必要」と明記されている通り、今後は教員の意識改革や学生の進捗管理を強化し、私費留学生についても標準修業年限内での学位取得率を向上させていく必要がある。

対象期間における本プログラム修士課程修了者の学業成績を分析した結果、農学院一般コース所属の留学生と比較して、相対的に高い学業成果を上げていることが確認された。これは、「人材育成・還流システム」（後述）が定着し、優秀な留学生の獲得に成功していることの証左と言える。

### (3) 研究

研究業績数は、第6期においても過去の水準をほぼ維持できている。これは学生自身の努力はもとより、各指導教員による適切な指導の成果であると考えられる。また同時に、本プログラムが構築・維持してきた人的ネットワークを活用した、質の高い学生リクルートが有効に機能していることの証左ともいえる。特筆すべき点として、2023年度の原著論文数が他年度と比較して突出していることが挙げられる。この要因を特定することは今後の留学生による論文発表数の更なる増加に資すると考えられるため、今後、詳細な調査・分析が求められる。

国際学会での発表件数については、第五期にはコロナ禍の影響で大きく減少したが（2020年7件）、2022年にはコロナ禍以前の水準まで回復した。しかし、2023年および2024年は再び減少傾向にある。これには円安や物価高による渡航費用の高騰が影響している可能性が示唆される。今後は札幌農学同窓会の補助金制度を積極的に活用するなどし、学生の国際学会発表を強く促進していく方針である。留学生の研究実績の維持・向上は、修了生の質保証のみならず、本プログラム自体の質保証に直結するものである。これは、現在進行中の第七期以降におけるプログラムの継続・発展において欠かせない要素である。

### (4) 修了生の進路・キャリアパス支援体制・修了生ネットワークの整備

2022年4月から2025年3月までの修了者54名の進路については、その9割にあたる49名の状況を把握できている。この高い把握率は、本プログラムのキャリアパス支援体制ならびに修了後のネットワーク整備が有効に機能していることの証左である。一方で、修了生の1割については進路未詳となっており、本学および英語特別コースと修了生とのつながりを継続・維持するためのシステムや就職支援システムを今後さらに強化する必要がある。

本プログラムでは、優秀な留学生を継続的に受け入れる体制を確立するため、「母国の農学研究・教育を牽引する人材の育成」→「その人材との連携による優秀な留学生の確保」→「次世代人材の育成」という「人材育成・還流システム」の構築を掲げてきた。実績として、当該期間（2022～2024年度）の博士後期課程修了者の8割以上が国内外で研究者として活躍しており、そのうち約3分の1は大学教員である。第1期から第5期までの修了生を含めた通算実績では、およそ4割が大学教員として教育・研究に貢献している。こうした修了生が母国の教員として指導した優秀な学生を本プログラムに送り込む、いわば「本プログラムの第2世代」の入学も見られるようになった。このことは、掲げられた循環システムが順調に発展・定着していることを示している。

### (5) 修了者による評価

本プログラム修了生を対象としたアンケート調査において、大学の印象、教育・生活への満足度、プログラムのコンセプト、期待達成度等に関し多くの好意的な回答が得られ、本プログラムの有効性が確認された。

他方、授業内容や科目選択の制限、日本語学習機会の不足を指摘する声も一定数存在した。加えて、自由記述欄より教員の質に対する懸念も一部で明らかとなり、これらに対する改善策の検討、環境整備、および教員の意識改革が急務である。

人的ネットワークの形成・維持については、約4割が「不十分」と回答した。これを受け、今年度より開始した新プログラム（第7期）では、在学時よりネットワーク構築を企図した教育を推進すべく、学生間の研究発表交流会等の施策を導入する予定である。

なお、多くの修了生が母国での本プログラム発展に協力する意向を示しており、優秀な人材の循環システムを構築・維持・発展させる上で心強い結果となった。アンケート結果に基づく

改善策を新プログラムへ着実に反映し、留学生のニーズに一層応え得る体制整備を進める必要がある。

### III 今後の課題

本特別プログラムは、1997年10月の設置以来、六期27年間にわたり本学の国際教育を牽引してきた実績を持つ。参加研究室は開設時の10から42へと拡大し、農学院が一体となって取り組む分野横断的な教育プログラムとして確立されている。この実績が評価され、2024年度には文部科学省の「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に選定された。これに伴い、2025年10月より「包括的先進農学フロンティア育成のための国際教育プログラム」として、修士・博士後期課程計8名の優先配置枠が配分される。新プログラムの理念は、既設プログラムで培われた「農学分野横断的な教育研究体制」および「東南アジア地域を中心とした国際連携」等の成果を継承・発展させることにある。これにより、持続可能な社会の実現に向け、多角的な視点で農業・食品・環境分野の課題解決を先導するパイオニア人材（包括的先進農学フロンティア）を育成する。運営にあたっては、これまでの自己点検評価の結果に基づき、具体的に以下の改善を推進する。

#### 1. 優秀な留学生獲得体制の強化

留学生の獲得に関しては、ASEAN諸国を中心とした「人材育成・還流システム」が奏功し、定員および多様性の確保に寄与している。今後は、タイおよびインドネシアの北大海外オフィスを拠点に、現地協働パートナーとの連携を深め、本プログラムに適性の高い留学生を戦略的に獲得する。その際、GPA 2.30以上（3.00満点）かつCEFR B2相当以上という高い出願要件を堅持し、質の確保を前提とする。また、特定国への依存に伴う変動リスクを回避するため、デジタル広報（Web・SNS）を強化し、修了生ネットワーク外からの私費留学生獲得も推進する。

他方、日本人博士後期課程学生の確保は喫緊の課題である。英語による研究指導や国際共修の意義が十分に浸透していない現状を鑑み、今後は広報戦略を見直す。具体的には、学生および指導教員に対し、国際的研究環境での経験や学位論文の英語化がもたらすキャリア上の優位性を明確に提示し、参加意欲の喚起を図る。

#### 2. 修学研究指導体制の強化

修学指導においては、高い修了率を維持しているものの、疾病等による学修困難なケースが散見されるため、入学前の健康状態や学習計画の確認を徹底するとともに、メンタルヘルスを含めた早期サポート体制をさらに強化する必要がある。研究面では、円安等の経済的要因により国際学会発表数が減少傾向にあることが懸念される。研究成果の国際発信はプログラムの質保証に直結するため、同窓会の補助金制度の積極活用を促すなど、学生が経済的負担を理由に発表を断念することのないよう、継続的な支援策を講じるべきである。また、修了生アンケートで指摘された「日本語学習機会の不足」や「講義選択肢の限定」については、留学生の日本での生活適応と幅広い学識の習得という観点から、カリキュラムの柔軟な運用や全学的な日本語教育プログラムとの連携強化を検討すべきである。

#### 3. キャリア教育と修了後のフォローアップ体制の強化

修了生の進路把握率は約9割と高い水準にあるが、残り1割の未詳者を減らし、本学との繋がりを維持・継続させるシステムの強化が不可欠である。特に、修了生アンケートにおいて約4割が「人的ネットワークの形成・維持が不十分」と回答している点は重く受け止める必要がある。今後は、在学中から学生・教員・修了生間の交流を促進するプログラムを意図的に組み込むとともに、「プログラムフェロー」や海外拠点（フロントオフィス）を核とした同窓会活動の活性化を図るべきである。これにより、修了後も互いにキャリアを支え合い、かつ次世代の優秀な留学生を送り出す強固な「人材育成・還流システム」へのエンゲージメントを高めていくことが求めら

れる。

#### 4. プログラムの評価体制の強化

本プログラムの評価体制は、自己点検に加え外部評価を導入することで客観性を担保している。今後は、蓄積データの分析を深化させ、運営改善へダイレクトに接続させることが求められる。例えば、2023年度における原著論文数の著しい増加等の好事例について要因を特定し、普遍的な指導ノウハウとして体系化・共有を図るべきである。同時に、修了生アンケート等で顕在化したカリキュラムやネットワーク形成等の課題については、第七期プログラムにおいて改善策を講じ、次回の点検・評価でその効果を検証するという、実効性あるPDCAサイクルを確立する必要がある。なお、外部評価については3年に1回の頻度とし、評価委員には学内外の特別プログラム担当教員や既設プログラムのOB教員等、本プログラムの趣旨に精通した有識者を委嘱する。

## 資料編目次

資料1. 会議議事録（2022～2024年度）	18
資料2. 2026年度募集要項（英文）	43
資料3. 2026年度募集要項（和文）	70
資料4. 出願・入学スケジュール	81
資料5. 2025年度実行教育課程表	82
資料6. 修了者論文題目一覧	86
資料7. 修了者および在学生を対象としたアンケート調査	90
資料8. 2021年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」審査結果	112
図1. 英語特別プログラム入学者数の推移（修士課程・経費別）	113
図2. 英語特別プログラム入学者数の推移（博士後期課程・経費別）	113
図3. 英語特別プログラム入学者数（出身地域別）	114
図4. 英語特別プログラム在籍者数の推移（経費別）	114
図5. 英語特別プログラム在籍者数の推移（出身地別）	115
表1. 英語特別プログラム修了状況（2020～2023年度入学者）	116
表2. 英語特別プログラム留学生の研究業績数（2022年4月～2025年9月）	116
表3. 英語特別プログラム修了者の進路（2022～2024年度修了者）	116
英語特別プログラム留学生の研究業績一覧（2022年4月～2025年9月）	117

## 資料1 会議議事録（2022～2024年度）

### 英語特別コース会議議事録

2022年6月8日

日時：2022年5月12日（木）15:00～15:36

場所：農学部大講堂

出席者：信濃、愛甲、松島、荒木、大原、貴島、小出、増田、中原（健）、浅野、

佐藤、尾之内、奥山、田上、峰浜、渡部、森、石塚、園山、加藤（英）、

斎藤（秀）、浦木、鈴木（栄）、玉井、森本（英）、小池、山本、

平野、鮫島、石黒、野口、オスピーナ、岩瀬、清水、近藤（巧）、江澤、

加藤（創）、福士

欠席者：柏木（純）、中島、吉澤、山下、橋本、丸山、当真、中原（治）、倉持、

松浦、北岡、佐分利、吹谷、前田、比良、逢坂、涉谷、宮本、重富、幸田、

中村、山田（孝）、笠井、桂、柿澤、庄子、川原、唄、上田、三谷、秋村、

岡田、山田（浩）、岡本、小関、小山、合崎、マリア、田村、湯本、鎌形、

森田、北川、菊池

陪席：高橋、山田、対馬、熊谷、金橋（以上敬称略）

#### 議題：

##### 1. 10月入学者の出願予定について（資料1, 2）

新規専攻後期課程6名：国費・大使館推薦1（ガーナ）、国費・一般枠申請中  
1（ハンガリーデジュ）、私費（ハンガリーデジュ政府奨学金）1、純粋私費3（中國2、カナダ1）、M→D持ち上がり1名（国費SG枠→純粋私費・インドネシア）  
新規修士課程4名：国費・大使館推薦2（ミャンマー、エルサルバドル各1）、  
純粋私費2（インドネシア、中国各1）  
＊国費・大使館推薦（エルサルバドル）については、博士後期課程ではなく修士課程出願予定である旨訂正された。

新規入学申請者について、受入予定教員（または代理）より説明がなされた。

修士課程から持ち上がりの学生については、6月英語特別コース会議の議題と

なる合否判定の際に指導教員から説明を行う。

出願書類ならびにメールインシタビューエ等の審査結果報告書について、期限まで  
に提出するよう周知された。

入学願書提出期限：5月31日（火）

##### 2. 年間行事予定（資料3）

出願スケジュールとコース会議等の予定が記載されているため、確認願う。  
特に合否判定や学位論文の審査が行われるコース会議にはなるべく出席する  
よう、コース長より注意喚起がなされた。

#### 報告事項：

##### 1. 2021年度3月修了者の学位論文審議の結果について（資料6）

審査対象の8名の学位論文審議の結果について「可」と判定されたとの報告。  
未投票は当日欠席。

なお、次回は、6月9日（木）15:00より開催予定。

##### 5. その他 特になし。

### 3. 2022年度学位記受与式までのスケジュール（資料4）

公開審査は、博士後期課程は7月28日（木）、修士課程は7月29日（金）、  
学位論文審査は8月10日（水）15:00から開催。  
修士学位記受与式は、9月26日（月）11:00から農学部大講堂で開催予定。大  
学全体で開催される博士学位記受与式の終了を待って開催するため、博士後期  
課程修了者にも出欠を確認する。

### 4. 公開審査・学位授与審議委員会の開催方法について（資料5）

英語特別コース9月修了生の公開審査ならびに学位授与審議委員会の開催方法  
について、副コース長を中心におこなうとめを依頼した結果を（資料  
5）に示した。  
事前意向調査の中では領域ごとの開催を希望する意見も見受けられたが、研究  
分野を横断して広く農学院の教員と学生が公開審査に参加し、活発に質疑応答  
することが英語特別コースの特長であり、その特長をいかすために現行どおり  
英語コース全体で開催することについてご理解、ご協力願いたい旨コース長よ  
り依頼があつた。  
構成員からは、口頭試問や学位授与審議委員会については3月修了者のように  
クローズドで行われた方がより専門的な議論ができるため、形式を統一した方  
がよいのではないかとの意見があり、それに対しアドバイザーから、3月修了了  
者は大多数の日本人学生の中に留学生を紛れ込ませているのが現状であり、9  
月修了者も同様に行うとなると調整が煩雑で物理的に難しい旨回答があつた。  
また、自身が委員であることを認識しておらず、学位授与審議委員会の出席率  
が低いこと、コロナ禍のためか公開審査自体に参加を控えるような傾向が昨年、  
一昨年と見受けられたが、先生方には研究室の学生に参加を勧めていただきよ  
う構成員より意見がなされた。コース長ならびにアドバイザーからは、会場を  
従来のW109より大講堂に変更してから活発な質問や議論がやりとりしなかつた  
感は否めないが、事前意向調査の中でも指摘されたように、学位論文の研究は  
高度に専門的で卓越したものだが、専門外でも理解・評価できるように発表す  
る能力も求められるため、指導教員には発表の仕方も学生に指導いただきたい  
旨依頼があつた。

## 特別コース会議議事録

日時：2022年6月9日（木）15:00～16:03  
会場：農学部大講堂

出席者：信濃、中島、大原、吉澤、貴島、小出、中原（健）、浅野、尾之内、山下、奥山、田上、橋本、渡部、倉持、松浦、泰、佐分利、吹谷、斎藤（秀）、宮本、浦木、鈴木（栄）、玉井、幸田、森本、山田（孝）、吳、小池、玖村、鈴島、石黒、岡本、才スピナ、岩渕、清水、近藤（巧）、合崎、菊池、加藤（創）、福士（当真、中原（治）、北岡、前田、石塚、比良、園山、加藤（英）、蓬坂、澁谷、重富、中村、笠井、桂、柿澤、庄子、川原、唄、上田、三谷、鈴木（裕）、山本、平野、岡田、山田（浩）、野口、小閑、小山、江澤、マリア、田村、湯本、鎌形、森田、北川

議題：

- 合否判定（国費定員枠外・私費）（資料1）（別紙）  
新規DC6名：国費・大使館推薦1名（ガーナ）、国費・一般枠申請中1名（ベンガラデシュ）、私費1名（バンガラデシュ政府奨学金）、純費3名（中国2、カナダ1）、新規MC4名：国費・大使館推薦2名（エルサルバドル、ミャンマー各1）、純費私費2名（中国）につき、審査過程の説明後、合格とした。  
構成員より、今後、会議資料にGPAや英語スコアについて記載した方が説明も省けわかりやすいのではないかという指摘があった。
- 合否判定（MC→DC）（資料2）（別紙）  
MC→DC1名（国費・SG枠より純費私費）につき、指導教員により、これまでの研究内容および面談結果等の説明がなされた後、合格とした。
- 学位論文の受理について（資料3、4）  
博士後期課程修了予定者14名中13名が第一著者として論文を投稿・受理されており、学位論文提出の要件を満たしている。  
revise中の1名については、学位論文審査のコース会議前日（8月9日）の17時までに受理されることが学位論文提出の要件となる旨、コース長より補足説明がなされた。

## 4. 公開審査のプログラム（案）（資料5）

- 7月28日（木）29日（金）の2日間でDC14名、MC3名を予定している。  
今年度はDCの人数が多いため、DCの審査を2日間に分けること、また事前意向調査により、口頭試問・学位授与審議委員会は領域ごとに開催した方がより専門性の高い審査ができるとの意見を踏まえ、各領域の審査が終わったら後に、口頭試問・学位授与審議委員会を開催することがコース長より提案され、了承された。時間の変更等がある場合は、6月18日（木）までに教務・学生担当に連絡することとした。今回より口頭試問と学位授与審議委員会を領域ごとの開催とするため、所属教員には積極的に参加いただきたい旨、コース長より重ねての依頼があった。
- （資料6）に基づき、2023年3月修了予定者の学術論文公表の進捗状況が確認された。

## 5. 2023年3月修了予定者の論文進捗状況（資料6）

- 各領域に修士1名の枠を配分するので、副コース長を中心に関域内で候補者選考を開始するよう依頼がなされた。次回のコース会議で進捗状況を報告し、最終的な候補者決定期限は10月30日（火）とする。選考の際には、東南アジア（ASEAN）から受け入れを優先すること、次年度修士課程に入学する国費留学生については、現時点で博士後期課程進学時に奨学金が保障されないことを必ず説明するよう注意喚起がなされた。また、博士後期課程については現修士課程1年生の進学枠としており、現時点では4名全員が進学を希望している。

## 6. 次年度の国費採用予定の調整（資料7）

- （資料6）に基づき、2023年3月修了予定者の学術論文公表の進捗状況が確認された。
- 昨年度からの変更点として、2022年度の暫定条件としていた英語能力要件「本プログラムにおいて修学及び研究を行う英語能力を有していると受入教員が判断できる者」を削除すること、また、中国政府派遣（高水準・CSC）留学生の出願時期を私費留学生と同時にに戻したこと、ならびに今後のスケジュールについて、コース長より説明がなされた。コース会議後に募集要項（案）が教務・学生担当から送信されたため、所属教員は入試委員会やユニット長会議に先立つて、必ず期間内に確認をするよう依頼がなされた。ユニット長会議で承認後、募集要項は次年度4月入学出願にあわせ、9月上旬にウェブサイトに掲載予定。

## 8. その他 特になし。

**報告事項 :**

コース長より、副コース長の運営への参加について、国費優先配置枠の各領域での候補者の調整や意向調査の取りまとめ等で運営に参加いただいたが、今まで「運営委員会」として会議等は開催されていなかった経緯の説明があった。構成員より、農学院のウェブサイトに掲載されている平成25年時点の英語コースの組織図や「運営則」という用語の定義が不明確であるという指摘がなされ、コース長ならびにアドバイザーからは、本プログラムは25年もの間継続しながら運営方法や組織が変遷してきたこと、今後は運営委員会と事前打合せのそれぞれの役割を整理し、用語の使い方も含めて検討を開始し、場合によっては改変していく旨回答があった。なお、次回のコース会議は、8月10日(水)15:00より開催予定であるが、学位論文の審査があるため、できるだけ出席いただくなようコース長より依頼があつた。

**英語特別コース会議議事録**

2022年9月7日

日時：2022年8月10日(水) 15:00～16:30

場所：農学部大講堂

出席者：信濃、松島、荒木、大原、吉澤、中原(健)、浅野、山下、奥山、田上、橋本、崎浜、渡部、当真、松浦、北岡、森、佐分利、吹谷、前田、比良、園山、加藤(英)、逢坂、斎藤(秀)、浦木、玉井、幸田、中村、森本、川原、唄、上田、吳、小池、鈴木(裕)、玖村、山本、平野、鮫島、石黒、野口、岡本、オスピナ、岩瀬、清水、近藤(巧)、合崎、江澤、森田、北川、加藤(創)、福士(純)、中島、愛甲、坂田、松村、貴島、小出、増田、佐藤、尾之内、丸山、中原(治)、倉持、石塚、浜谷、宮本、重富、鈴木(栄)、山田(孝)、笠井、桂、柿澤、庄子、三谷、岡田、山田(浩)、小関、小山、マリア、田村、湯本、鎌形、菊池

陪席：高橋、内田、伊藤、熊谷、金橋(以上敬称略)

**議題 :****1. 学位論文の審査について(資料1、2)**

議題1に先立ち、6月コース会議時点で1名の投稿論文がacceptに至つていなかつたが、期限である論文審査のコース会議前日17時までに論文がacceptされた旨、コース長より報告された。その結果、14名全員に学位論文審査の資格があることが確認された。

博士後期課程修了予定者(14名)

Md. Mahmudul Islam(岩瀬教授)  
Chidozie Johnson Oraegebunam(渡部准教授)  
Teranart Udomsopagit(園山教授)  
Kodithuwakklu Arachchilage Heshan Taraka  
Kodithuwakklu(小池教授)  
Weihong Fan(唄助教)  
Huang Yan(加藤客員准教授)  
Masimbula Vidanalage Rishni Samindika Masimbula(松浦教授)  
Wijitrapha Ruangaram(加藤准教授)  
Alyssa Lee Suzumura(大原教授)  
Cheng Zixin(吉澤准教授)  
Flavio Furukawa(森本准教授)  
Md. Imam Hossain(石黒教授)  
Lauretta Andrew Laneng(中村教授)  
Yan Lyu(浦木教授)

主査あるいは副査が審査結果について報告後、委任状を含む出席者の投票により 14 名全員「可」と決定した。

コース長より、今年度は公開審査の会場を総合研究棟多目的室(W109)に戻し、まだ口頭試問、学位授与審議委員会を領域ごとにまとめて開催するようにしたところ、活発で専門的な議論が行われた旨報告があった。

## 2. その他 特になし。

### 報告事項：

#### 1. Farewell Party の中止について

公開審査後に開催している学生委員会主催の送別会について、今年度は開催を予定し学生委員会も準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染急拡大の状況を受け開催を断念することになつた旨、コース長より報告があり、英語コース所属教員には一口 500 円の品を贈りたいとの希望があり、英語コース長より依頼があった。

#### 2. その他

DC1 日本人学生の英語コースへの参加について、9 月 30 日を期限としているが現在のところまだ申し込みはない旨、コース長より報告があった。 Alumni 国際セミナー（キャリアアバスト講演会）について、開催を企画したもののは、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて中止したが、今後はオンライン開催も見据えながら継続的に企画することとしている。修了生の来学やオンラインセミナー開催の機会があれば Alumni 国際セミナーとして在学生への講演の場を設けることができないか検討・協力願いたい旨、コース長より依頼があった。

なお、次回の英語コース会議は、9 月 8 日（木）15:00～開催予定。

### 英語特別コース会議事録

2022 年 9 月 27 日

日時：2022 年 9 月 8 日（木）15:00～15:22

場所：農学部大講堂

出席者：信濃、荒木、坂田、大原、増田、中原（健）、浅野、尾之内、奥山、

田上、橋本、嶺浜、渡部、当真、北畠、佐分利、吹谷、石冢、加藤（英）、

蓬坂、浦木、鈴木（葉）、玉井、幸田、森本、小池、鈴木（裕）、秋村、

山本、鮫島、石黒、オスピナ、岩瀬、合崎、マリア、福士

欠席者：柏木（純）、中島、愛甲、吉澤、松村、貴島、小出、佐藤、山下、丸山、

中原（治）、倉持、松浦、森、前田、比良、園山、涉谷、斎藤（秀）、宮本、

重富、中村、山田（孝）、笠井、桂、柿澤、庄子、川原、唄、上田、三谷、

吳、平野、園田、山田（浩）、野口、山田（浩）、岡本、小関、小山、清水、近藤（巧）、

江澤、田村、湯本、鎌形、森田、北川、菊池、加藤（角）

### 報告事項：

#### 議題：

#### 1. 2023 年 3 月修了予定者の論文進捗状況報告（資料 1-1）

指導教員より博士後期課程修了予定者（コース参加日本人学生を含む）の論文進捗状況報告がなされ、3 名中 2 名が受理済、1 名が major revision 中であつた。3 月修了予定者の学位論文受理の件について、12 月コース会議付議時点で第一著者として論文が公表されていること、また、12 月コース会議付議時点で第一著者として投稿しており、投稿誌より何らかの指示(minor/major revision 等)を受けており、ユニット長会議 3 日前の 17:00 までに投稿論文の公表が決定する見込みがある場合であることが確認された。

#### 2023 年 9 月修了予定者の論文進捗状況報告（資料 1-2）

博士後期課程修了予定者 7 名について論文進捗状況一覧を示した。

#### 2024 年 3 月修了予定者の論文進捗状況報告（資料 1-3）

博士後期課程修了予定者 5 名（うちコース参加日本人学生 2 名）の論文進捗状況一覧を示した。

#### 2. 4 月入学者の出願予定について（資料 2）

現在のところ、新規修士課程 1 名（私費 総長奨励金）出願予定。今後受け入れ予定がある場合、農学院教務担当に連絡すること。出願書類提出期限は 10 月 31 日（月）。

3. 修士学位記授与式（9/26）について（資料3）  
修士課程修了予定者3名、博士後期課程修了予定者14名。昨年に引き続き、英語コースとしてDC、MC合同で、9月26日（月）11時から農学部大講堂で学位記授与式を開催することとなつた。式にふさわしい服装で参加するよう注意喚起がなされた。博士後期課程修了予定者は、大学全体の授与式（10時～学術交流会館）終了後、農学部大講堂へすみやかに移動すること。授与式について、指導教員及びその他の教員の参加も呼びかけられた。今年度は式終了後に、カデミックガウンを着用しての写真撮影を行う。

4. オリエンテーション（9/28）について（資料4）  
オリエンテーションについては、10月入学DC10名・MC8名が対象。新入生及び指導教員は必ず出席するよう周知された。指導教員が出席できない場合には代理の教員が出席すること。渡日時期の都合から、新入生が欠席の場合には、指導教員が参加することが望まれる。

5. 次年度の国費採用予定の調整（資料5）

次年度の採用予定について、副コース長（またはコース長）から各領域での採用調整に関する状況報告があつた。DCについてはすべてMCからの持ち上がり。食料生産領域はDCが植物育種学（インドネシア）、MCが植物ゲノム科学（スリランカ）、食品科学領域はDCが食品加工工学（インドネシア）、MCが応用食品科学（タイ）、生命科学領域はDCが生態化学生物学（中国）、MCが応用分子昆虫学（インドネシア）。環境保全領域はDCが土壤学（ネバール）、MCについては当初インドネシアの学生を推薦予定であったが、事前のインシタビューワーにより英語でのコミュニケーション能力に不安があることから推薦を取り下げ、同領域内に候補者もいなかったため、コース全体に候補者を募ることとなつた旨、コース長より報告があった。候補者がいる場合は、9月末日までに農学院教務担当に連絡するよう依頼がなされた。

6. その他

出願の際に提出する英語能力証明書について、英語が公用語である国籍の出願者については、英語のスコアや教育課程を英語で修了した証明書の提出を不要にしてはどうかという提案が構成員よりなされた。それにに対し、公用語が英語でも必ずしも英語能力が高いとはいえない例が過去にあつたこと、また英語の他に複数の公用語がある国の取扱いやネイティブの定義も難しいことから、公平な取扱いについて今後検討する必要がある旨、コース長より言及があつた。

報告事項：

1. 2022年9月修了者の学位論文審議の結果について（資料6）  
14名全員が「可」となつた。

出願書類到着期限は12月末日で、教員による審査も同期限であることが補足された。

2022年12月13日

日時：2022年11月10日（木）15:00～15:45  
場所：農学部大講堂

出席者：信濃、中原（健）、浅野、尾之内、橋本、崎浜、当真、松浦、森、吹谷、比良、園山、加藤（英）、斎藤（秀）、三谷、吳、小池、鈴木（裕）、玖村、石黒、岡本、岩渕、清水、江澤、マリア、菊池、福士  
欠席者：柏木（純）、中島、荒木、坂田、大原、吉澤、松村、貴島、小出、増田、佐藤、奥山、田上、渡部、丸山、中原（治）、倉持、北岡、佐分利、前田、石塚、逢坂、渋谷、宮本、浦木、重富、鈴木（茉）、玉井、幸田、中村、森本、山田（孝）、笠井、桂、柿澤、庄子、川原、唄、上田、山本、平野、鮫島、岡田、山田（浩）、野口、オスピナ、小閑、小山、近藤（巧）、合崎、田村、湯本、鎌形、森田、北川、加藤（創）  
陪席：加藤（知）、伊藤、熊谷、金橋（以上敬称略）

## 議題：

## 1. 合否判定（私費）（資料 1）（別紙）

次年度4入学予定者DC2名：純粹私費（カナダ・バングラデシュ各1）、MC1名：私費・総長奨励金（ナジエリア）につき、審査過程の説明後、合格とした。なお、DC（カナダ）については、6月コース会議で10月入学者として合格が承認されていたが、論文審査の遅れから修士修了が間に合わず、10月入学は辞退し、あらためて4月入学に出願した旨、受入教員より説明があった。

## 2. 合否判定（MC→DC）（資料 2）（別紙）

MC→DC7名（純粹私費）につき、指導教員またはその代理により、これまでの研究内容および面談結果等の説明がなされた後、合格とした。なお、このうち3名が国費（特別枠）から私費になった経緯が説明され、あわせてDC入学時よりDX博士人材フェローシップに採択されたことが補足された。

## 3. 次年度の国費採用予定（資料 3）

MC候補者4名（インドネシア2、スリランカ・タイ各1）について、受入予定教員より説明がなされ、候補者として最終決定した。候補者及び候補者の推薦者とも密に連絡をとり、辞退等が発生しないよう注意喚起がなされた。なお、辞退となつた経緯の報告があつた。

## 報告事項：

## 1. 2023年度秋入学 JICA研修員受入プログラムについて（資料 6）

JICAによるAgri-Netプログラム受入の意向調査について、農学院は「受入の可能性あり」と回答しているため、JICAより個別に受入打診があつた場合は対応願いたい旨、コース長より説明があつた。受入に際しては、英語コース出願資格を確認すること、また標準修業年限内に修了する見込みを厳格に判断することが補足説明された。

## 2. 10月DC入学者の辞退について（資料 7）

6月コース会議で合宿が承認された10月入学者について、受入予定教員より辞退となつた経緯の報告があつた。

3. 学生の異動について  
体調を崩して一時帰国していたMC（インドネシア）より、コロナ禍で家計が悪化し、健康上の理由と経済的問題より退学の申し出があつたこと、また、休学中のMC（インドネシア）について、インドネシア教育基金（IPDP）の英語能力要件を満たすことができず、休学期間を延長することとなつた旨、コース長より報告があつた。本件については、9月16日（金）開催のユニット長会議で報告済みであることが補足された。

#### 4. その他 特になし

最後に、コース長より、自己点検評価報告書作成のために前コース長の園山教授をリーダーにタスクフォースを結成すること、メンバーは副コース長と各領域より選出された1名とし、業績・アンケートのとりまとめ等へご協力いただきよう依頼があつた。選出については、農学院教務担当から依頼メールが送信されるので、現副コース長は領域内で調整をし、決定のうえ11月18日（金）までに連絡することになつた。

なお、次回のコース会議は、12月15日（木）15時～開催予定。

#### 英語特別コース会議議事録

2022年12月21日

日時：2022年12月15日（木）15:00～15:25

場所：農学部大講堂

出席者：信濃、中島、松島、坂田、大原、貴島、増田、浅野、尾之内、奥山、橋本、崎浜、渡部、松浦、森、佐分利、吹谷、比良、浦木、鈴木（茉）、玉井、幸田、桂、吳、小池、鈴木（裕）、秋村、山本、鮫島、野口、岡本、オスピナ、岩渕、清水、近藤（巧）、合崎、江澤

欠席者：柏木（純）、愛甲、荒木、吉澤、松村、小出、中原（健）、佐藤、田上、丸山、中原（治）、当真、倉持、北原、前田、石冢、園山、加藤（英）、逢坂、渋谷、斎藤（秀）、官本、重富、中村、森本、山田（孝）、笠井、柿澤、庄子、川原、唄、上田、三谷、平野、岡田、山田（浩）、石黒、小関、小山、マリア、田村、湯本、鎌形、森田、北川、菊池、加藤（創）、福士  
陪 席：高須賀、伊藤、熊谷、金橋（以上敬称略）

#### 議題：

##### 1. 学位論文の受理について（資料 1, 2）

コース参加日本人学生1名を含む、博士修了予定者3名について、学術論文の進捗状況報告が主査または副査からなされた。  
筆頭著者として原著論文を3名全員が有し、学位論文受理の条件を満たしているが、日本入学生についてはアクセプトされた論文は主に修士時代の研究業績をまとめたものであり、博士課程としての業績が追求したいといふ本懇意の意向により3月修了を見送りたい旨、代理人より報告があつた。構成員からは、修士時代の業績をまとめたといふことであれば、学位論文にかかる原著論文のアクセプトとは認められないかといふ指摘があること、日本入学生といえどもコースに参加しては標準修業年限で修了する必要があること、留年により文科省への報告や次期プログラム申請への影響を懸念する声が挙がつた。コース長より、指導教員とも話をしたが、学生の意志を尊重したいという思いが強く修了を遅らせるというういう決意が補足された。ただし、今後は特別な事情がない限り、英語特別コースでは標準修業年限内の修了を徹底することが再確認された。他の2名の学位論文の受理については承認された。

##### 2. 2023年度9月修了予定者の論文進捗状況報告（資料 3）

###### 修了予定者

Cao Tianzhi (岡本准教授)

Nur Azlimatul Quidsyah Haji Maidin (比良准教授)

Yuan Yongheng (清水准教授)

Li Fadiwei (清水准教授)

Xie Ruoyun (加藤真一郎准教授)

Banko Petra Zsuzsanna (高須賀准教授)

博士修了予定者7名の学術論文公表の進捗状況報告が、指導教員または代理人からなされた。アクセセフト济2名、投稿中1名、準備中4名。  
準備中4名のうち1名については、体調不良のため研究が進捗しておらず2023年9月の修士1が困難な旨、指導教員より報告があった。

### 3. 2023年度国費 (MC4名) 出願状況について (資料 4)

各候補者と指導予定教員の対応状況について説明がなされた。候補者から指導教員への書類提出期限は12月31日(土)。指導教員から農学院教務担当への書類提出期限は1月20日(金)。  
メールインタビューについては、受入教員を含む3名の農学院専任教員がそれぞれ3回以上、計9回以上を行い、そのうち1回はカメラ付きSkypeやZoom等で本人確認をしながらインタビューを行うよう注意喚起がなされた。

### 4. 次年度アドバイザー・副コース長の選出について (資料 5)

現アドバイザーである岩瀬教授の任期が今年度3月までとなるため、次期アドバイザーの選出が必要となる。コース長より森教授からアドバイザー就任の内諾を得た旨紹介があり、承認された。

また、環境保全領域と食品科学領域は副コース長の任期満了に伴い、それぞれ笠井准教授、吹合教授が次期副コース長に選出された。

### 5. その他

特になし。

報告事項：なし。

次回コース会議は2023年2月2日(木)15時より開催されるが、論文審査があるため可能な限りご出席願う。

日時：2023年2月2日(木)15:00～15:35

場所：農学部大講堂

出席者：信濃、中島、松島、吉澤、貴島、小出、浅野、尾之内、奥山、田上、

橋本、崎岳、渡部、当真、松浦、北畠、森、吹合、前田、石塚、比良、

園山、加藤(英)、逢坂、宮本、浦木、鈴木(栄)、玉井、幸田、桂、

吳、小池、鈴木(裕)、玖村、平野、鷲島、岡本、小閑、小山、岩瀬、

伊藤、近藤(巧)、合崎、マリア、北川、富士

欠席者：柏木(純)、愛甲、荒木、坂田、大原、松村、増田、中原(健)、佐藤、

丸山、中原(治)、倉持、佐分利、鶴谷、斎藤(秀)、重富、中村、

森本、山田(孝)、笠井、柘澤、庄子、川原、唄、山本、上田、三谷、

岡田、山田(浩)、石黒、野口、オスピナ、清水、江澤、田村、湯本、

鎌形、森田、菊池、加藤(創)

陪 席：高須賀、伊藤、熊谷、金橋(以上敬称略)

議題：

1. 学位論文の審査について (資料 1, 2)  
DC修了・学位授与予定者  
Hongxia Liu (石塚教授)  
Dalikhsuren Davaajav (岩瀬教授)  
学位論文審査要旨について、主査からの説明後、委任状を含む出席者の投票により2名とも「可」と決定した。
2. 合否判定 (2023年10月入学国費特別枠) (資料 3, 別紙)  
10月入学国費特別枠MC4名について、受け入れ予定教員による説明がなされ、全員「合」と承認された。3月2日の学院教授会にて承認された後、合格通知を発送する。なお、入学申請書中のPresent statusには、出身大学ではなく、現職を記載することが再確認された。
3. 今後の出願予定 (2023年10月入学の国費定員枠外・私費) (資料 4)  
DCに私費(インドネシア教育基金(LPDP))1名、純粋私費1名(中国)、MCに大使館推薦1名(エクアドル)が出来た。今後、出願予定者が出来た場合は、農学院教務担当まで連絡すること、また、出願期間については、農学院教務担当から4月初旬にメールで案内がある旨周知された。出願書類の提出期限は、5月末日予定。
4. 2023年9月修了予定者の論文進捗状況報告 (資料 5-1)  
2024年3月修了予定者の論文進捗状況報告 (資料 5-2)  
2024年9月修了予定者の論文進捗状況報告 (資料 5-3)

(資料5-1)に基づき、2023年9月修了予定者のうち、投稿論文がacceptに至っていない学生について、学術論文公表の進捗状況が指導教員または代理人から報告された。

5. 2023年9月の学位記授与までのスケジュール（資料6）
- 次年度の公開審査については、修了予定者がDC6名、MC7名となるため、2日に分けて行うことになりました。DCの公開審査日は7月27日（木）、MCは7月28日（金）。また、学位論文審査の8月コース会議を8月3日（木）に行う。なお、9月修了予定者の学位論文受理の条件は「学位論文審査のユース会議前日の17時まで」であることが確認された。

9月修了予定者 全13名  
DC:修了予定者（6名） Cao Tianzhi, Yuan Yongheng, Li Faqinwei, Xie Ruoyun, Banro Petra Zsuzsanna, Xu Menglin  
MC:修了予定者（7名） Gong Pengxuan, Berlinasari Tovika, Lubba Kayyis Muayadah, Lembono Yoan Felanny, Wang Zeping, Subedi Bishal, Zhang Zijie

## 6. その他

- 報告事項：
- 2023年度大学推薦による国費外国人留学生（スーパーパーチャル大学創成支援事業枠）の採用枠の配分及び募集について  
農学院に2023年4月から2024年3月までの1年間の枠の配分（新規誕生日1枠）があり、候補者の検討の結果、すでに入学が許可されている4月新規誕生日入学予定者2名のうち、重点地域であるバンダラデシュの学生を推薦することとした旨、コース長より報告があった。
  - 英語能力要件について  
英語を母国語あるいは公用語とする国籍からの出願者について、英語能力要件の証明書の提出を免除してもよいかどうか今後検討することとしていたが、文科省の国費留学生の語学要件に関するQ&Aに、英語を母語としていることのみを根拠とせず、他の手段によって語学能力を判定するよう記載があつたことから、従来どおり2年以内に取得したCEFR B2相当以上の英語スコアか、最終学歴において英語を主要言語とした課程を修了した証明書の提出を必須とする旨、コース長より報告があった。
  - 学生の転コースについて  
M2学生が本人の希望により、生命フロンティアコースから環境フロンティアコースへ転コースすることになった旨、コース長より報告があつた。本件については、2月16日のユニット長会議で報告予定。
  - その他

最後にアドバイザーより退任の挨拶として謝意が述べられた。

## 英語特別コース会議事録

2023年6月1日

日時：2023年5月17日（水）15:00～15:30

出席者：農学部大講堂

出席者：信濃、愛甲、松島、貴島、小出、増田、中原（健）、尾之内、奥山、田上、

橋本、村井、崎浜、渡部、丸山、当真、松浦、森、吹谷、比良、加藤（英）、  
逢坂、斎藤（秀）、鈴木（茉）、玉井、森本、山田（孝）、吳、小池、  
鈴木（裕）、政村、山本、オスピナ、小山、岩瀬、清水、合崎、江澤、

マリア、福士

欠席者：柏木（純）、中島、荒木、坂田、大原、吉澤、松村、浅野、佐藤、中原（治）、  
倉持、北岡、佐分利、前田、石塚、園山、渋谷、宮本、浦木、重富、幸田、  
中村、笠井、桂、庄子、川原、唄、上田、三谷、平野、岡田、山田（浩）、  
野口、岡本、小関、伊藤、近藤（巧）、田村、湯本、鎌形、森田、北川、  
菊池、加藤（創）

陪 席：伊藤、熊谷、金橋（以上敬称略）

### 議題

- 10月入学者の出願予定について（資料1、2）  
新規博士後期課程4名：国費・一般枠申請中1（バンガラデシュ）、国費・SG枠申請中1（バンガラデシュ）、私費（インドネシア教育基金）1、私費（政府奨学金）1（台湾）、M→D持ち上がり4名：国費・特別枠（インドネシア2、ネパール1、中国1）  
新規修士課程3名：国費・大使館推薦1（エクアドル）、国費・SG枠申請中1（中国）、私費（総長奨励金）1（インドネシア）

新規入学申請者について受入予定教員（または代理）より説明がなされた。  
修士課程から持ち上がりの学生については、6月英語特別コース会議の議題となる合否判定の際に、指導教員から説明を行った。

なお、SG枠の選定についてはコース長に一任されているが、農学院に2枠（6か月）の配分があり、純粋税費で出願予定であった2名の学生を推薦することした旨、コース長より報告があった。  
出願書類ならびにメールインタビューやの審査結果報告書について、期限である5月31日（水）までに提出するよう周知された。

### 2. 次年度の国費採用予定の調整（資料3、4）

各領域に修士1名の枠を配分するので、副コース長を中心とした候補者選考を開始するよう依頼がなされた。次回のコース会議で進捗状況を報告し最終的な候補者決定期限は10月31日（火）とする。選考の際には、東南アジア（ASEAN）からの受け入れを優先すること、次年度修士課程に入学する国費

留学生については、現時点で博士後期課程進学時に奨学金が保障されていないことを必ず説明するよう注意喚起がなされた。  
また、博士後期課程については現修士課程1年生の進学枠としているため、指導教員には学生の進学意向確認をするよう依頼があった。

### 3. 年間行事予定（資料5）

出願スケジュールとコース会議等の予定が記載されているため、確認願う。  
特に合否判定や学位論文審査が行われるコース会議にはなるべく出席するよう、コース長より注意喚起がなされた。

### 4. 2023年度学位記授与式までのスケジュール（資料6）

公開審査は、博士後期課程は7月27日（木）、修士課程は7月28日（金）  
学位論文審査のためのコース会議は8月3日（木）15:00から開催。  
修士学位記授与式は、9月25日（月）11:00から農学部大講堂で開催予定。  
大学全体で開催される、9月25日（月）11:00から農学部大講堂で開催するため、博士後期課程修了者にも出欠を確認する。

### 5. 広報WGについて

海外にいる留学生に、英語特別コースを入学先の選択肢として選んでもらえるよう、SNS等を通して継続して発信できる仕組み作りを考えてもらうことを目的に広報WGの設置が提案され、承認された。WGには、2020年に任命された43名のプログラムフェローを有効に活用するための仕組み作りについてもあわせて検討いただくよう、コース長より依頼があった。  
副コース長を中心とした各領域より着手の教員1名を選出してもらい、7月21日（金）までに農学院教務担当へ連絡願う。8月コース会議でWGのメンバーを紹介し、3月末までに広報活動の仕組み作りについて立案願うこととする。

### 6. その他

特になし。

### 報告事項：3月修了者の学位論文審議の結果について（資料7）

1. 2022年度3月修了者の学位論文審議の結果について「可」と判定されたとの報告  
審査対象の2名の学位論文審議の結果について「可」と判定されたとの報告。  
未投票は当日欠席。

### 2. 4月DC入学者の辞退について（資料8）

- 2月コース会議で合格が承認された4月入学者（MC→DC持ち上がり）について、指導教員より辞退となった経緯の報告があった。

### 3. Alumni国際セミナーについて（資料9）

- 6月17日（土）に農学院を会場として開催される、第18回北海道大学インドネシア同窓会会長シニア留学生協会主催セミナーにおいて、北海道大学インドネシア同窓会会長

でボゴール農業大学 Hanny Wiijaya 教授の Graduate Forum を、英語特別コース Alumni 国際セミナーの共催とすることとなった旨、コース長より報告があった。ついでには、自身の指導するコース所属学生にも案内し、参加を呼びかけさせていただきたいこと、また、今後英語特別コース修了生が北大に来学したり、オンラインでセミナー等を行う機会があれば、Alumni 国際セミナーと一緒に開催することができないか、ご協力いただきたい旨、コース長より依頼があった。

4. 日本人学生の英語特別コース参加について  
例年 4 月入学 DC 学生を対象に英語特別コースへの参加を呼びかけているが、現行プログラムでは本コース参加研究室の日本人大学院生をすべてプログラムの准参加者として位置づけており、限られた数の日本人学生をすべてプログラムに参加する制度は発展的に解消したいと考えている。その一環として、コースに参加する制度は発展的に解消したいと考えている。その一環として、プログラム参加研究室の日本人学生の英語による学位論文作成の恒常化を目指しているため、コース教員は研究室に所属する日本入学生が英語で学位論文を作成するよう指導願いたい旨、コース長より依頼があった。

## 5. その他

なお、次回は、6 月 7 日（水）15:00 より開催予定。

特になし。

## 特別コース会議議事録

日時：2023 年 6 月 7 日（木）15:00～15:37

2023 年 6 月 8 日

場所：農学部大講堂  
出席者：信濃、中島、松島、荒木、大原、貴島、小出、中原（健）、佐藤、奥山、田上、橋本、村井、崎浜、北岡、森、佐分利、吹谷、前田、

比良、園山、幸田、笠井、庄子、吳、小池、山本、濱本、野口、岡本、オスピーナ、小山、岩瀬、清水、合崎、江澤、マリア、加藤（創）、福士

欠席者：柏木（純）、愛甲、坂田、吉澤、松村、増田、浅野、尾之内、渡部、丸山、当真、中原（治）、倉持、松浦、石塚、加藤（英）、逢坂、渋谷、斎藤（秀）、宮本、浦木、重富、鈴木（美）、玉井、中村、森本、山田（孝）、桂、川原、唄、上田、三谷、鈴木（裕）、玖村、平野、岡田、山田（浩）、小閑、伊藤、近藤（巧）、田村、湯本、鍊形、森田、北川、菊池

陪 席：高須賀、伊藤、熊谷、金橋（以上敬称略）

### 議題：

1. 合否判定（国費定員枠外・私費）（資料 1）（別紙）  
新規 DC4 名：国費・一般枠申請中 1 名（ハンガラデシュ）、私費（インドネシア教育基金）1 名、私費（政府奨学金）1 名（台湾）、私費（ダブノディグリープログラム）1 名（インドネシア）、新規 MC3 名：国費・大使館推薦 1 名（エクアドル）、国費・SG 枠申請中 1 名（中国）、私費（総長奨励金）1 名（インドネシア）につき、受入予定教員（または代理）より審査過程の説明後、合格とした。
2. 合否判定（MC→DC）（資料 2）（別紙）  
MC→DC4 名（国費・特別枠）につき、指導教員（または代理）により、これまでの研究内容および面談結果等の説明がなされた後、合格とした。
3. 学位論文の受理について（資料 3, 4）  
博士後期課程予定者 5 名中 3 名が第一著者として論文を投稿・受理されており、学位論文提出の要件を満たしている。  
1 名が revised 中、1 名は投稿中（revise 等に至っていない）であった。  
コース長より、学位論文審査のコース会議前日（8 月 2 日）の 17 時までに受理されることが学位論文提出の要件となる旨補足された。また、学位論文受理にあたっては「会議付議時点と、第一著者として投稿しており、

投稿誌より何らかの指示(minor/major revision等)を受けていることを条件としているが、今回に限り条件を緩和することが提案され、審議の結果、承認された。5名の学位論文の受理が承認された。なお、9月修了できなくなつた1名について、指導教員より現在の状況と今後の見通しについて説明がなされた。

4. 公開審査のプログラム（案）（資料 5）  
7月 27 日（木）28 日（金）の 2 日間で DC5 名、MC7 名を予定している。今年度も昨年度と同様、参考を頒載ごとにまとめ、発表が終わつた後に、口頭試問・学位授与審議委員会を開催することとする。時間の変更等がある場合は、6月 14 日（水）までに農学院教務担当に連絡することとされた。
5. 2024 年 3 月修了予定者の論文進捗状況（資料 6）  
(資料 6)に基づき、2024 年 3 月修了予定者の学術論文公表の進捗状況が確認された。

6. 次年度の国費採用予定の調整（資料 7）  
次年度の採用予定について、副コース長（または代理）から各領域での採用調整に関する状況報告があつた。DC についてはすべて MC からの持ち上がり。食料生産領域は DC が循環農業システム工学（インドネシア）、MC が調整中、環境保全領域は DC が生態環境物理学（ベトナム）、MC が調整中、食品科学領域は DC が食品栄養学（タイ）、MC が生物化学（タイ）、生命科学領域は DC が生態化学生物学（中国）、MC が生態化学生物学（インドネシア）。

#### 7. 募集要項（案）について（資料 8）

昨年度からの主な変更点として、国費留学生の優れた学業成績の証明書については受賞歴等なければ提出不要となつたこと、最初の奨学金受給までに 2,000 米ドル相当程度を用意するよう明記すること、ならびに今後のスケジュールについて、コース長より説明がなされた。コース会議後に募集要項（案）が農学院教務担当から送信された。所属教員は入試委員会やユニット長会議に先立つて、必ず期間内に確認をするよう依頼がなされた。ユニット長会議で承認後、募集要項は次年度 4 月入学出願にあわせ、9 月上旬にウェブサイトに掲載予定。

#### 8. その他

特になし。

#### 報告事項：

6月 17 日(土)14:30より、インドネシア ポゴール農業大学の Hanny Wi jaya 教授の Graduate Forum を英語コースの Alumni 国際セミナーとして共催するので、コース所属学生に周知するよう再度コースより依頼があつた。なお、次回のコース会議は、8月 3 日(木)15:00より開催予定であるが、学位論文の審査があるため、できるだけ出席いただくようコース長より依頼があつた。

## 令和5年度 8月英語特別コース会議 議事録（案）

日 時：令和5年8月3日（木）15：00～15：25  
場 所：農学部大講堂  
出席者：別紙のとおり 出席者 73名（内、委任状26名、オブザーバー1名）  
欠席者 13名

### 議題1. 学位論文の審査について

コース長から、9月修了予定者の学位論文受理の条件について説明があつた後、資料1－1に基づき、6月のコース会議時点で、投稿論文が公表見込みの状態で学位論文を受理した2名について、現時点で論文が公表に至っていないこと、公開審査及び学位授与審議委員会は実施済みである旨説明があつた。この2名の扱いについて、本日のコース会議においては投票を行わず、8月中に論文が公表された場合に、特例措置として、メール審議によりコース会議（投票）を開催し、9月学位授与とした旨提案があつた。当該2名の指導教員から、現状と今後の見込みについて説明があつた後、コース長から今回の特例措置について、審議願いたい旨発言があり、審議の結果了承された。

次いで、資料1－1及び1－2に基づき、学位授与審査の資格がある3名について、主査より審査結果の報告があつた後、出席者（委任状含む）の投票により、3名全員の学位授与が「可」と了承された。

（主な意見等）

- ・メール審議により投票を行うことについて、今後の対応を議論する必要がある。
- 明文化するかどうか等含めて、今後対応を検討したい。

（参考）

### 9月修了予定者の学位論文受理の条件

- 1) 会議付議時点で、第一著者として論文が既に公表されている場合
- 2) 会議付議時点で、第一著者として投稿しており、投稿誌より明らかの指示（minor/major revision等）を受けており、学位論文審査のコース会議前日の17時までに投稿論文の公表が決定する見込みがある場合

以上

### 報告事項1. 広報WGについて

コース長から、資料2に基づき、各領域から選出されたメンバーの紹介があつた後、当該WGメンバーには、今年度中に有効な広報の仕組み作りについて検討いたすこと、実際の運用を担当いただくWGは別途設置して、任期を2年とする予定である旨、報告があつた。

### 報告事項2. Farewell Partyについて

コース長から、4年間実施できなかつた学生委員会主催の送別会を8月25日（金）17時より、屋外のバーベキュー形式で行う旨報告があつた。参加及びカンバの協力依頼があり、雨天時には大講堂に場所を変更予定である旨、説明があつた。

### 報告事項3. その他

- ・日本人学生の英語特別コースへの参加申し込みは9月29日（金）まで。現時点で申し込んだ学生はない。
- ・次年度の国費採用予定候補者については、9月のコース会議で、各領域の副コース長に候補者の研究室名及び国名について報告いただき、11月のコース会議で最終決定予定。
- ・6月18日（日）に開催された Harry Wijaya 先生の Graduate Forum を Alumni 国際セミナー（キャリアパス講演会）として共催し、80名ほどの参加者があつた。
- ・次回コース会議は、9月7日（木）15：00から。

### 議題2. その他

特になし

## 令和5年度 9月英語特別コース会議 議事録

日 時：令和5年9月7日（木）15：00～15：22  
場 所：農学部大講堂  
出席者：別紙のとおり 出席者 35名（内、オブザーバー1名）  
欠席者 51名

### 議題1. 博士後期課程学生の論文進捗状況報告について

コース長から、論文進捗状況報告の意義及び方法について説明があつた後、資料1～1にについて報告がなされた。（欠席者分は、コース長より代理報告）各教員からの報告の後、コース長より、3月修了の場合の学位論文受理の条件について、2月のコース会議（1月31日）の前日17時までに投稿論文の公表が決定する旨説明があつた。

次いで、コース長より、資料1～2～1～3については、詳細の説明は行わないが、今後の進捗状況報告の方法について、これまで、修了時期の半年前からコース会議において指導教員が進捗状況を報告することとしていたが、標準修業年限内の課程修了の意識を高めるため、1年前から報告することとした旨、提案があつた。

意見交換の後、審議の結果、一度、投稿論文の公表が確認できれば、それ以後の報告は不要としたうえで、修了時期の1年前からコース会議において指導教員が進捗状況を報告することが了承された。

### 議題2. 4月入学者の出願予定について

コース長より、資料2に基づき、現時点での私費外国人留学生出願予定者について説明があつた後、受入予定がある場合は、学業成績係数や英語能力要件を確認するので、出願前に教務担当に連絡すること、出願書類の提出は10月31日（火）までに教務担当に提出することが周知された。

### 議題3. 学位記授与式（9/25）について

コース長より、資料3に基づき、2023年9月修了予定者の学位記授与式の举行について説明があつた後、授与式後は、会場内でアカデミックガウンの貸し出し及び写真撮影が可能である旨周知された。

### 議題4. オリエンテーション及び歓迎会について

コース長より、資料4に基づき、2023年10月入学者のオリエンテーション及び歓迎会について説明があつた後、歓迎会については、コース全体で新入生を迎えるという意図のもと、各研究室に会費の負担をいたなくことについて説られ、審議の結果、了承された。なお、国際食資源学院専任教員の研究室については、英語コースの留学生が在籍する場合のみ会費を負担していただくこととした。

### 議題5. 次年度の国費採用予定の調整

コース長の発議の後、資料5に基づき、各領域の副コース長から2024年10月入学の国費大学推薦特別枠の修士課程入学候補者について報告があり、11月のコース会議で最終決定となる旨確認がなされた。（欠席者分は、コース長より代理報告）なお、食料生産領域の枠については、コース全体で募集することとし、申請を希望する場合は、9月29日（金）までに教務担当に必要書類を提出することとなつた。

### 報告事項1. 2023年9月修了者の学位論文審議の結果について

コース長より、資料6に基づき、該当3名の開票結果について報告があつた。また、8月のコース会議において投票保留とした2名については、12月学位授与予定であること、この2名の取扱いにおいてメール審議の方法を取り入れたが、あくまでも特例措置だったので、学位論文受理の要件においては明文化しないこととする旨、報告があつた。

### 報告事項2. その他

・次回コース会議は、11月9日（木）15：00から。

以上

## 令和5年度 11月英語特別コース会議 議事録

日 時：令和5年11月9日（木）15：00～15：40  
場 所：農学部大講堂  
出席者：別紙のとおり 出席者 66名（内、委任状38名、オブザーバー1名）  
欠席者 20名

### 議題1. 2023年12月修了者の学位論文審査について

コース長から、学位論文受理の条件について説明があった後、8月のコース会議で投票を保留にしていた2名のうちの学位授与審査の資格を満たした1名について、資料1-1、1-2に基づき、主査より審査結果の報告があった。次いで、出席者（委任状含む）の投票を行い、3分の2以上の賛成を得て、学位授与「可」と承認された。

### 議題2. 2024年4月入学者合否判定（私費）

修士課程への出願者2名の受入予定教員から、資料2-1、2-2に基づき、GPA、英語能力、面接の結果等の審査結果について説明があった後、出席者の合否について審議の結果、「合格」と承認された。  
（主な意見等）  
・英語による教育課程を修了していれば英語能力有りと判断するのは問題ないのか。  
→募集要項において、「CEFRのB2相当以上の資格・検定試験のスコアを有する」及び「大学院入学資格を満たす教育課程を英語を主要言語として修了」のいずれかの条件を満たすこととしており、問題はない。昨年議論となつたのは、英語を母国語とする国からの出席者は、上記の英語能力の証明書提出を省略してはどうかというところで、いずれにしても英語能力の証明書は必要ということとしている。今後、英語による教育課程修了では足りず、必ず何らかのスコアを提出することにすることである。議論の余地はある。

### 議題3. 2024年4月入学者合否判定（MC→DC）

コース長より、資料3-1、3-2に基づき、博士後期課程の内部進学者1名の審査結果について説明があった後、当該学生の合否について審査の結果、「合格」と承認された。次いで、コース長より、議題2及び3について、11月14日開催予定の大学院入試委員会、11月21日開催予定のユニット長会議、12月1日開催予定の学院教授会にて了承された後、合格者となる旨、説明があった。

### 議題4. 2024年10月入学の国費採用予定

コース長より、資料4に基づき、来年度の修士課程国費特別枠の選出について、食料生産領域の枠には、生命科学領域からの候補者を選出した旨、説明があった。次いで、博士後期課程の3名については、修士課程から内部進学者予定であるが、生命科学領域の1名については、当該修士課程学生が進学しないため、11月中旬を目処に当該領域内で候補者を選出予定である旨説明があった。

また、修士課程国費特別枠の候補者4名の受入予定教員より、受入に至った経緯、成績や英語能力、研究内容等の説明があつた後、候補者の選定について説明がされた。審議の結果、承認された。おつて、コース長より、出願書類及び国費留学生の推薦書類の期限内提出への協力依頼、及び、辞退等のないよう候補者と密に連絡をとるよう注意喚起があつた。

（主な意見等）

・日本在住の外国人は推薦できないのではないか。

→令和4年度受入から、推薦者全数体の25%以下であれば推薦できることとなつた。

### 議題5. コース長・副コース長の選出

コース長より、資料5-1に基づき、コース長の候補者及び業務について説明があつた。後、立候補を募つたが、立候補者がいなかつたため、予め立候補のあつた、森春英教授（食品科学領域）をコース長とすることについて説明がされた。審議の結果、承認された。次いで、立候補者がいなかつた場合の選出ローテーションについて、本来の順番どおり、生命科学領域からの選出とすることについて説明がされた。

また、コース長より、現ドバイザーがコース長となつたので、次期ドバイザーの選出も必要となるが、人選について、現コース長及びドバイザーに一任願いたい旨発言があつた。

次いで、コース長より、資料5-2に基づき、食料生産領域と生命科学領域の副コース長の選出について説明があり、本会議後は教務担当から詳細をメールで送付するので、11月30日までに領域内で決定ただくこと、及び、福士先生退職後の副コース長の選出については検討中である旨、発言があつた。

### 議題6. 2024年3月修士予定者（DC）のスケジュール

コース長より、資料6に基づき、3月学位授与までのスケジュールについて説明があつた。次いで、3月修了者については、英語特別コース独自での公開審査及び学位記授与式は行わないこと、及び論文審査・投票のためのコース会議は、1月31日に開催予定である旨、発言があつた。

## 令和5年度 12月英語特別コース会議 議事録

### 報告事項1. 日本人学生の英語特別コース参加について

コース長より、令和6年度の日本人学生の参加申請がなかつた旨、報告があつた。

### 報告事項2. 学生の異動について

コース長より、9月30日付で修士課程1名の学生が退学した旨、報告があつた。

### 報告事項3. その他

次回コース会議は、12月22日（金）15:00から開催予定。

以上

#### 議題1. 学位論文の受理について

コース長から、参考資料1に基づき、学位論文受理の条件について説明があつた後、この条件を満たす見込みがない学生1名について、指導教員より、3月の学位授与を見送る旨の説明があつた。

次いで、博士後期課程修了予定者6名の指導教員より、資料1-1及び1-2に基づき、学位論文の内容、審査委員及び進捗状況等について説明があつた後、学位論文の受理について諮詢され、審議の結果、承認された。

なお、6名のうち現時点で受理の条件を満たしていない1名については、現在、論文1報が査読中であり1月中には投稿論文が受理される見込みがあるということで、学位論文の受理が承認された。

#### 議題2. 2024年9月修了予定者の論文進捗状況報告

該当学生12名の指導教員（うち、当日欠席の2名についてはコース長）より、資料2に基づき、論文進捗状況について報告があつた。

次いで、コース長より、今回の説明において、学位論文受理の条件を満たしていることが確認できた場合は、以後、3ヶ月毎のコース会議における指導教員からの報告は不要となる旨、発言があつた。本件については、9月のコース会議で了承されており、参考資料1の「具体的な手続き」の1を更新している旨併せて説明があつた。

#### 議題3. 2024年10月入学の国費出願状況について

出願予定者の博士後期課程1名、修士課程4名の受入予定教員（うち、当日欠席の1名についてはコース長）より、資料3に基づき、出願予定者の学業成績、英語能力、面接の実施状況について説明があり、審議の結果、出願予定者とすることが承認された。

次いで、コース長より、出願書類及び指導教員作成の書類は12月28日（木）までに農学院教務担当に提出すること、メールオンラインでは、1回はオンライン等で直接本人を確認すること、今年度から英語能力をスコアで判定する場合は4技能においてCEFR B2相

当以上のスコアを有すること、特別枠で推薦できなかつた学生がいる場合は一般枠での推薦も検討することについて説明があった。

#### 議題4. 次年度アドバイザー・副コース長の選出について

コース長より、資料4に基づき、次年度のアドバイザー及び食料生産領域と生命科学領域の副コース長の候補者の報告があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

#### 報告事項1. その他

次回コース会議は、1月31日(水) 15:00から開催予定。

以上

#### 令和5年度 2月英語特別コース会議 議事録

日 時：令和6年1月31日(水) 15:00～16:00  
場 所：農学部大講堂  
出席者：別紙のとおり 出席者 70名(内、委任状2名、オブザーバー1名)  
欠席者 16名

#### 議題1. 2024年3月参了者の学位論文審査について

コース長から、3月修了予定者の学位論文受理の条件について説明があつた後、資料1-1及び1-2に基づき、学位授与審査の資格がある7名について、主査より審査結果の報告があつた後、出席者(委任状含む)の投票により、7名全員の学位授与が「可」と了承された。

(主な意見等)

- これまで委任状の提出はWord形式でメールに添付して提出していたので、手元に残りわかりやすかったが、現状はどうなっているのか。
- 現在、コース会議の出欠確認はGoogleフォームで行っており、委任状の提出もその中で行っている。
- 農学院のフロンティアコースのコース教授会で行う学位審査の投票は、講師以上で行っているが、英語コースにおいては助教も含めているのか。
- 英語特別コースにおいては、コース会議の構成員は全教員としており、論文審査における有権者も全教員として、長年行っている。

#### 議題2. 2024年10月入学者合否判定(国費特別枠)

博士後期課程への出願者1名及び修士課程への出願者4名の受入予定教員から、資料2及び各出願者の申請書に基づき、GPA、英語能力、面接の結果等の審査結果について説明があつた後、出願者の合否について諮詢され、審議の結果、「合格」と承認された。

また、コース長から、本件については、3月1日開催の学院教授会了承後、正式に合格者となること、文科省の国費採用決定通知は、6月中旬頃の見込みである旨、発言があつた。

#### 議題3. 2024年10月入学者出願予定について(国費定員枠外・私費)

コース長から、資料3に基づき、博士後期課程に国費(大使館推薦)1名、修士課程に私費1名が出願予定である旨説明があつた。次いで、出願予定者が出了した場合は、農学院教務担当まで連絡すること、出願手続きについては4月初旬にお知らせし、出願書類の提出期限は5月末となる旨、発言があつた。

#### 論題4. 博士後期課程学生の論文進捗状況報告について

コース長から、論文進捗状況報告の意義及び方法について説明があつた後、資料4-1に基づき、2024年9月修了予定者13名のうち、まだ学位論文受理条件を満たしていない4名の指導教員から投稿論文誌の情報や進捗状況の詳細について報告がなされた。

次いで、資料4-2に基づき、2025年3月修了予定者2名の指導教員から、同様に報告がなされた。

最後に、コース長より、2025年9月修了予定者9名の論文進捗状況については、資料4-3を確認いただくこと、英語コースでは、標準就業年限内に課程修了することを原則としている旨、発言があつた。

#### 論題5. 2024年9月の学位授与式までのスケジュール

コース長から、資料5に基づき、次年度の9月修了予定者の公開審査については、例年どおり2日に分けて実施することが提案され、博士後期課程は7月25日(木)、修士課程は7月26日(金)に実施し、博士後期課程の登録は論文ごとにまとめて行うこと、学位論文審査を行う8月コース会議は8月1日(木)に開催することが了承された。

また、2024年9月修了予定者の学位論文受理の条件は、学位論文審査のコース会議前日(7月31日(水)の17時まで)であることが確認された。

#### 論題6. 副コース長の選出について

コース長から、資料6に基づき、福士先生の後任に当たる副コース長に食料生産領域のMARIA STEFANIE DWIYANTI先生を候補者と旨、報告があり、審議の結果、了承された。

#### 論題7. その他

なし

#### 報告事項1. その他

なし

以上

## 令和6年度 5月英語特別コース会議 議事録（案）

日 時：令和6年5月15日（水）15：00～15：32  
場 所：農学部大講堂  
出席者：別紙のとおり 出席者 37名（内、オブザーバー1名）  
欠席者 45名

### 議題1. 2024年10月入学者の出願予定について

コース長から、資料1-1に基づき、国費定員枠及び私費留学生の入学予定者3名について、  
出席者：別紙のとおり 出席者 37名（内、オブザーバー1名）  
欠席者 45名

コース長より、これまで、5月コース会議時点で、受入予定教員より出願者について説  
明いただいたが、6月コース会議の合否判定の際の説明のみとした旨提案があり、了承され  
た。また、出願者の出願書類及び審査結果報告書は、5月31日（金）までに農学院教務担当に提出  
すること、例年に比べて出願者が少ないで留学生の受入に積極的にご協力いただきごとにについ  
て依頼があつた。

### 議題2. 2025年度の国費採用予定の調整について

コース長より、資料2-1に基づき、現行プログラムの国費留学生（特別枠）の採用状況を確認  
したうえで、2025年度以降のプログラムは今年度の申請結果によるため、奨学金受給が確約されて  
いないこと、2025年度以降のプログラムににおいても同規模の入歟数とし、受入優先地域をASEAN  
とする予定であることにについて説明があつた。

次いで、コース長より、資料2-2に基づき、2025年10月入学の国費留学生（特別枠）採用予  
定者については、例年どおり、修士課程枠の受入を各領域から1名ずつ選出すること、博士後期  
課程枠の受入については、国費留学生（特別枠）で2023年10月に入学した修士課程学生の博士後期  
課程進学枠とすることについて説明があり、副コース長を中心に各領域内で調整していただく依頼  
があつた。

（主な意見等）

（主な意見等）  
・2025年度以降のプログラムについては、今年度に継続申請する必要があるが、継続申請をする  
大学は少なく、一度プログラムを終わらせて新規のプログラムを選択することが多いのが現状  
である。次年度、この枠で候補者を選出する場合は、プログラムが採択されないと奨学金が当  
たらない可能性があるということを十分学生に説明する必要がある。

### 議題3. 年間行事予定

コース長より、資料3に基づき、今年度の出願スケジュール、コース会議、成績報告及び論文提  
出期限について説明があり、合否判定や学位論文審査が行われるコース会議については可能な限り  
出席していただき、プログラムについてご理解いただいたうえで留学生受入にご協力いただきたい。

### 議題4. 2024年度の学位記授与式までのスケジュール

コース長より、資料4に基づき、9月修了予定者の公開審査、学位論文審査に関するコース会  
議、学位記授与式の日程について説明があつた。

### 報告事項1. 2024年3月修了者の学位論文審査の結果について

コース長より、資料5に基づき、該当7名の開票結果について報告があつた。

### 報告事項2. 広報WGについて

コース長より、資料6に基づき、昨年度設置した広報WGが、メンバーを選出したのみで実際の  
活動を行えなかつたので、今年度も引き続きWGを担当していただくこととした旨報告があつた。な  
お、WGの座長には、食料生産領域の信濃教授に引き受けさせていただくこととなつてある。

### 報告事項3. Alumni国際セミナーについて

コース長より、資料7に基づき、Alumni国際セミナーの開催に協力いただきたい旨依頼があつ  
た。

### 報告事項4. 日本人学生の英語特別コース参加について

コース長より、資料8に基づき、日本人学生の特別コース参加について、及び英語コース参加研  
究室に所属する日本人学生の英語による学位論文作成向上について、協力依頼があつた。

### 報告事項5. その他

・次回コース会議は、6月5日（木）15：00から。

以 上

## 令和6年度 6月英語特別コース会議 議事録

日 時：令和6年6月5日（水）15：00～16：12  
場 所：農学部大講堂  
出席者：別紙のとおり 出席者 37名（内、オブザーバー1名）  
欠席者 45名

### 議題1. 2024年10月入学者合否判定（国費定員枠外・私費）

コース長より発議の後、資料1-1、1-2（会議限り）に基づき、博士後期課程2名、修士課程4名の出席者について、受入予定教員より学業成績、英語能力、審査結果報告について説明があった。

次いで、コース長より、修士課程出席者の1名が出席資格（3）「外国において学校教育における16年の課程を修了した者」に当てはまらないが、出席者がから提出のあった証明書等を確認し、出席資格（10）「入学前に22歳に達しており、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者」に該当することについて補足説明がなされた。該当者の出願資格も含め、出席者の合否について諮られ、審議の結果、6名全員「合格」と承認された。

### 議題2. 2024年10月入学者合否判定（MC→DC）

コース長より発議の後、資料2-1、2-2（会議限り）に基づき、博士後期課程の内部進学者5名の就学状況及び審査結果について、指導教員より説明があつた後、当該学生の合否について諮られ、審議の結果、「合格」と承認された。

次いで、コース長より、議題1及び2については、6月下旬開催予定の大学院入試委員会及びネット長会議了承後、7月5日開催予定の学院教授会にて了承された後、合格者となる旨、説明があつた。

### 議題3. 2024年9月修了者の学位論文受理について

コース長から、参考資料1に基づき、学位論文受理の条件について説明があつた後、博士後期課程修了予定者11名の指導教員より、資料3-1及び3-2に基づき、学位論文の内

容、審査委員及び進捗状況等について説明があつた。1名について、は、原著論文の受理がされていない状況であるが、6月末頃までは受理の予定であるとの説明があつた。

次いで、2月のコース会議で2024年9月修了予定として進捗状況報告をしていたが、9月修了が見込めない2名について、指導教員より、9月末付で退学予定である旨説明があつた。

おつて、博士後期課程11名の学位論文題目の受理について諮られ、審議の結果、承認された。

### 議題4. 2024年度公開審査のプログラム（案）について

コース長より、資料4に基づき、9月修了予定者の公開審査のプログラム案について説明があり、博士後期課程においては、昨年と同様に、発表を領域毎にまとめ、学生の発表後に口頭試問及び学位授与審議委員会を開催する旨提案があり、審議の結果、承認された。

### 議題5. 2025年3月修了予定者の論文進捗状況

コース長より、資料5に基づき、該当学生2名の論文進捗状況が確認された。

### 議題6. 2025年度の国費採用予定の調整について

コース長より発議の後、資料6に基づき、各領域の副コース長から、現時点での国費特別枠修士課程採用候補者の調整状況について説明があつた。未定の領域については、引き続き調整を行っていくことが確認された。

次いで、コース長より、博士後期課程の進学意向について、現在修士課程1年の4名のうち、1名が進学を希望しないため、現在該当領域内で調整中であること、進学意向に変更がある場合は教務担当に申し出ることについて説明があつた。

### 議題7. 2025年度募集要項（案）について

コース長より、資料7に基づき、主な変更点及び今後のスケジュールについて説明があつた。本会議終了後、教務担当から募集要項案の電子ファイルを送付するので、内容を確認いただき、加除修正等があればお知らせいただきよう依頼がなされた。

### 報告事項1. 広報WGについて

コース長より、広報WGの座長は信濃先生である旨説明があつた後、資料6に基づき、英語コースの広報活動についてWGからの提言が示され、運営側で検討を行い、今後、事務レベルで対応が可能なものは適宜更新することが報告された。また、農学部HPのトピックスの記事を提出の際には、併せて英語版も作成・提出するよう協力の依頼がされた。提出された英語記事は、農学部HPの英語サイトへの掲載に加え、英語コースHPのnewsやfacebookに掲載し、積極的な更新をしていく意向であると説明があつた。

### 報告事項2. その他

次回のコース会議は、8月1日（水）15：00から開催予定であり、論文審査があるのでは可能な限り出席するよう依頼がされた。

以上

## 令和6年度 8月英語特別コース会議 議事録

日 時：令和6年8月1日（木）15：00～16：10  
場 所：農学部大講堂  
出席者：別紙のとおり 出席者 64名（内、委任状21名）  
欠席者 20名

### 議題1. 学位論文の審査について

コース長から、9月修了予定者の学位論文受理の条件について説明があった後、資料1－1に基づき、6月のコース会議点で、投稿論文が公表見込みの状態で学位論文を受理した1名について、公開発表及び学位授与審議委員会は実施済みあること、現在、投稿論文について軽微な修正を提出し、編集者から修正後の受理を確認してもらっている状態であることについて説明があった。この1名の扱いについて、本日のコース会議において投票を行う旨提案があり、審議の結果了承された。

次いで、令和6年9月の学位授与予定者11名について、資料1－1及び1－2に基づき、主査より審査結果の報告があった後、出席者（委任状含む）の投票により、11名全員の学位授与が「可」と了承された。

（主な意見等）

・一つの論文に筆頭著者が2名いて、その2名が学位申請に同じ論文を参考論文と取り扱うことが可能なのか。  
→農学院として規程等で定められているものはないので、現時点では可能である。（懸念事項として検討の余地はある。）

（参考）

9月修了予定者の学位論文受理の条件

- 1) 会議付議時点で、第一著者として論文が既に公表されている場合
- 2) 会議付議時点で、第一著者として投稿しており、投稿誌より何らかの指示（minor/major revision等）を受けており、学位論文審査のコース会議前日の17時までに投稿論文の公表が決定する見込みがある場合

### 議題2. その他 特になし

### 報告事項1. 研究室の新規参加について

コース長から、資料2に基づき、食品科学領域に「細胞組織生物学研究室（若松教授）」が英語特別コースに参加したことになった旨、報告があつた。

### 報告事項2. Alumni 国際セミナーの開催について

コース長から、以前、各教員照会していたセミナーへの協力者について、教名から手が挙がつており、10月以降にオンラインで開催予定である旨、報告があつた。

### 報告事項3. Farewell Partyについて

9月修了者の送別会を、8月23日（金）17時より学生委員会主催で行う旨報告があつた。予算に余裕があることから、学生からの会費収取はせず、参加教員及び修了者の指導教員等のカンパにより開催すること、既に周知しているGoogleフォームから出席入力することについて協力依頼があつた。

### 報告事項4. その他

- ・2024年度国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの申請に関して、当プログラムが文科省に推薦することが決定し、本日学内ヒアリングをおこなつた旨、報告があつた。
- ・英語特別コースのHPについて、少しずつ新しい情報に更新しており、トップページのFacebookについては、教務担当により近況を掲載している旨、報告があつた。
- ・次回コース会議は、9月12日（木）15：00から。

以 上

## 令和6年度 9月英語特別コース会議 議事録

日 時：令和6年9月12日（木）15：00～15：35	出席者：別紙のとおり	出席者 35名（内、オブザーバー1名）
場 所：農学部大講堂	欠席者 48名	

### 議題1. 博士後期課程学生の論文進捗状況報告について

コース長から、論文進捗状況報告の意義及び方法について説明があつた後、資料1-1に基づき、2025年3月修了予定者2名の投稿論文誌の情報や進捗状況の詳細について確認がなされた。

次いで、資料1-2に基づき、2025年9月修了予定者9名の投稿論文誌の情報や進捗状況の詳細について指導教員から報告がなされた（欠席者分は、代理教員またはコース長より報告）。次いで、資料1-3に基づき、2026年3月修了予定者8名の論文進捗状況について、コース長より報告及び確認がなされた。

（主な意見等）

・一覧表の進捗状況欄において、「準備中→○報」と記載しているが、「執筆中→○報」と記載した方が良いのではないか。  
→次回から「執筆中」という記載にすることが了承された。

### 議題2. 4月入学者の出願予定について

コース長より、現時点で、私費外国人留学生出願予定者の報告がない旨説明があつた後、受入予定がある場合は、学業成績係数や英語能力要件を確認するので、出願前に教務担当に連絡すること、出願書類の提出は10月31日（木）までに教務担当に提出することが周知された。また、コース長より、私費外国人留学生の受け入れの必要性について説明があり、積極的な受け入れへの協力依頼があつた。

### 議題3. 9月学位記授与式について

コース長より、資料2に基づき、2024年9月修了予定者の学位記授与式の挙行について説明があつた後、授与式後は、会場内でアカデミックガウンの貸し出し及び写真撮影が可能である旨周知された。

### 議題4. 新入生オリエンテーション及び歓迎会について

コース長より、資料3に基づき、2024年10月入学者のオリエンテーション及び歓迎会の開催日時・場所について説明があつた後、歓迎会については、コース全体で新入生を迎

えるという意図のもと、各研究室に会費の負担をいただくことについて諮詢され、審議の結果、了承された。

なお、国際食資源学院専任教員の研究室については、英語コースの留学生が在籍する場合のみ会費を負担いただくこととした。

### 議題5. 次年度の国費採用予定の調整

各領域の副コース長代理としてコース長より、資料4に基づき、2025年10月入学の国費大学推薦特別枠の採用予定状況について報告があつた。次いで、採用未定の食品科学領域の博士後期課程幹については、コース全体で募集することとし、申請を希望する場合は、9月30日（月）までに教務担当に必要書類を提出することとなつた。なお、11月のコース会議で入学候補者が最終決定される旨説明された。

### 議題6. 副コース長の選出について

コース長より、資料5に基づき、領域外の副コース長を担当中のマリア助教が、10月1日付けで国際食資源学院に配置換えとなることに伴い、副コース長後任候補として崎浜教授が提案され、審議の結果、了承された。

### 報告事項1. 2024年9月修了者の学位論文審議の結果について

コース長より、資料6に基づき、該当11名の開票結果について報告があつた。  
(主な意見等)  
・全ての投票結果に「白」がある、未投票の教員（委任状未提出の欠席者）が多いのはいかがなものか。  
→「否」や「白」で投票する場合は、疑義等について議論したうえで投票してほしい。また、欠席者の委任状提出について、英語コース参加教員全員に今一度認識してもらいう嘱知する。

### 報告事項2. その他

・次回コース会議は、11月7日（木）15：00から。なお、2月4日（火）のコース会議は、臨時教授会開催の関係から10：00開始に変更予定。  
・英語コースのHPに掲載している、Application Timeline”の国費留学生の”Preliminary contact”の期間が実際の期間より長く表示されているため、6～7月の期間に修正してほしい。  
→確認し、正しい期間に修正する。

以 上

## 令和6年度 11月英語特別コース会議 議事録

日 時：令和6年11月7日（木）15：00～15：30  
場 所：農学部大講堂  
出席者：別紙のとおり 出席者 30名（内、オブザーバー1名）  
欠席者 53名

### 議題1. 2025年4月入学者合否判定（私費）

コース長より、資料1-1に基づき出席者3名（修士課程1名、修士課程2名）について説明があり、綿密に、受入予定教員より、資料1-2に基づき、GPA、英語能力、面接結果等の審査結果について説明があつた後、出席者の合否について諮られ、審議の結果、「合格」と承認された。次いで、2025年3月修士課程修了予定者が1名いるが、博士後期課程には進学しない予定である旨説明があつた。また、私費外国人留学生の定員（年16人）の周知および積極的採用の要請がなされた。

### 議題2. 2025年10月入学の国費採用予定

コース長より、資料2に基づき、来年度の博士後期課程国費特別枠の選出について、前回の会議までに未定だった食品科学領域の枠に、環境保全領域からの候補者を選出した旨説明があつた。  
次いで、国費特別枠の候補者8名のうち5名（修士課程4名、博士後期課程1名、博士後期課程3名は修士課程から内部進学予定のため省略）について、受入予定教員より、受入に至った経緯、成績や英語能力、研究内容等の説明があつた後、候補者の選定について諮られ、審議の結果、承認された。おつて、コース長より、出願書類及び国費留学生の推薦書類の期限内提出への協力依頼、及び、辞退等のないよう候補者と密に連絡をとるよう注意喚起があつた。

また、コース長より、今年度申請していた2025年度以降入学者対象の「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」の審査結果について、採択された旨報告があつた。

### 議題3. 副コース長の選出

コース長より、資料3に基づき、環境保全領域と食品科学領域の副コース長の選出について説明があり、本会議後に教務担当から詳細をメールで送付するので、11月29日までに領域内で決定いただく旨、発言があつた。

### 議題4. 日本人学生の英語特別コース参加について

資料4-1～4-3に基づき、参加希望のあつた2名の指導教員より、当該学生について説明があつた後、参加の可否について諮られ、審議の結果、2名とも博士後期課程入学時に遡つて英語特別コースに参加していたものとすることが承認された。  
また、コース長より、日本入学生の定員（年4人）の周知および積極的採用の要請がなされた。

### 議題5. 2025年3月修了予定者（DC）のスケジュール

コース長より、資料5に基づき、3月学位授与までのスケジュールについて説明があつた後、3月修了者に關しては、英語特別コース独自での公開審査及び学位記録与式は行わないこと、論文審査・投票のためのコース会議は2月4日に開催予定である旨、発言があつた。

### 報告事項1. 学生の異動について

コース長より、令和6年度にあつた英語コース学生の異動について、修士課程学生1名の休学、博士後期課程学生2名の退学、博士後期課程学生1名の単位修得退学の報告があつた。

### 報告事項2. Alumni国際セミナーの開催について

コース長より、資料6に基づき、11月27日（水）15：00～英語コース卒業生によるセミナーをオンラインで開催する予定である旨、報告があつた。

### 報告事項3. その他

次回コース会議は、12月18日（水）15：00から開催予定。

以上

## 令和6年度 12月英語特別コース会議 議事録（案）

日 時：令和6年12月18日（水）15：00～15：30  
場 所：農学部大講堂  
出席者：別紙のとおり 出席者 32名（内、オブザーバー1名）  
欠席者 52名

### 議題1. 学位論文の受理について

コース長から、参考資料1に基づき、学位論文受理の条件について説明があつた後、博士後期課程修了予定者2名の指導教員より、資料1-1及び1-2に基づき、学位論文の内容、審査委員及び進捗状況等について説明があつた。次いで、学位論文の受理について語ら  
れ、審議の結果、承認された。

また、コース長より、本件は、1月24日開催のユニット長会議で論文受理について付議  
予定である旨説明があつた。

### 議題2. 論文進捗状況報告（2025年9月～2026年9月修了予定者）

コース長から、英語コースにおける論文進捗状況報告の要領について説明があつた後、資料2-1に基づき、2025年9月修了予定者9名の指導教員から、投稿論文誌の情報や進  
捗状況の詳細について報告があつた（次席教員分は、代理教員より報告）。

次いで、資料2-2に基づき、2026年3月修了予定者8名の論文進捗状況について、  
コース長より報告及び確認がなされた。

### 議題3. 2025年10月入学の国費出願状況について

コース長から、資料3に基づき、修士課程4名のうち、食料生産領域の出願者予定者1名  
から辞退の申し出があり、この一例について、コース全体に候補者選出の募集をしたところ  
5名の応募があつたこと、GPA及び英語能力等により運営側教員で候補者1名を選定し、一  
覧表に反映させていることについて説明があつた。また、当該出願予定者の学業成績、英語  
能力、研究予定内容等について、コース長（受入予定教員が欠席のため）から説明があり、  
審議の結果、出願予定者とすることが承認された。

次いで、コース長より、出願書類及び指導教員作成の書類は12月27日（金）までに農  
学院教務担当に提出すること、メールオンラインビュードは、1回はオンライン等で直接本人を  
確認すること、特別枠で推薦できなかつた学生がいる場合は一般枠での推薦も検討すること  
について説明があつた。

（主な意見等）

- ・一般枠の推薦の際の重点地域というのは、特別枠と同じなのかな。
- 特別枠とは別に重点地域が設定されており、特別枠の ASEAN 地域以外も重点地域にな  
つていてる。詳細は教務担当に照会いただきたい。

### 議題4. 次年度コース長の選出について

コース長より、資料4に基づき、次年度の環境保全領域と食品科学領域の副コース長候補  
者の報告があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

#### 報告事項

##### 1. その他

- ・11月のコース会議で合否判定をし、教授会を経て合格通知をした修士課程出願者から辞  
退の申し出があつた。2025年4月の英語コース入学予定者は博士後期課程1名、修士  
課程1名となつたことが報告された。
- ・11月27日（水）にAlumni国際セミナーを開催したこと、今後も年に一度以上はセミ  
ナーを開催したいので、英語コース卒業生に講師を依頼することについて協力依頼がなさ  
れた。
- ・次回コース会議は、2月10日（月）15：00から開催予定。

以上

## 令和6年度 2月英語特別コース会議 議事録

日 時：令和7年2月10日（月）15：00～15：30  
場 所：農学部大講堂  
出席者：別紙のとおり 出席者 70名（内、委任状23名、オブザーバー1名）  
欠席者 14名

### 議題1. 2025年3月修了者の学位論文審査について

コース長から、3月修了予定者の学位論文受理の条件について説明があつた後、資料1－1及び1－2に基づき、学位受与審査の資格がある2名について、主査より審査結果の報告があつた後、出席者（委任状含む）の投票により、2名の学位授与が「可」と了承された。

### 議題2. 2025年10月入学者合否判定（国費特別枠）

博士後期課程への出願者1名及び修士課程への出願者4名の受入予定教員から、資料2及び各出願者の申請書に基づき、GPA、英語能力、面接の結果等の審査結果について説明があつた後、出願者の合否について諮詢られ、審議の結果、「合格」と承認された。  
また、コース長から、本件については、3月4日開催の学院教受会了承後、正式に合格者となること、文科省の国費採用決定通知は、6月中旬頃の見込みである旨、発言があつた。

### 議題3. 2025年10月入学者出願予定について（国費員枠外・私費）

コース長から、資料3に基づき、博士後期課程に国費（大使館推薦）1名、修士課程に私費1名が出願予定である旨説明があつた。次いで、出願予定者が出了した場合は、農学院教務担当まで連絡すること、出願手続きについては4月初旬にお知らせし、出願書類の提出期限は5月末日となる旨、発言があつた。

### 議題4. 博士後期課程学生の論文進捗状況報告について

コース長から、論文進捗状況報告の意義及び方法について説明があつた後、資料4－1に基づき、2025年9月修了予定者9名のうち、まだ学位論文受理条件を満たしていない7名の指導教員から投稿論文誌の情報や進捗状況の詳細について報告がなされた。  
次いで、資料4－2に基づき、2026年3月修了予定者8名の指導教員から、同様に報告がなされた。

最後に、コース長より、2026年9月修了予定者7名の論文進捗状況については、資料4－3を確認いただく旨、発言があつた。

### 議題5. 2025年9月の学位記授与式までのスケジュール

コース長から、資料5に基づき、次年度の9月修了予定者の公開審査については、例年どおり2日に分けて実施することが提案され、博士後期課程は7月24日（木）、修士課程は7月25日（金）に実施し、博士後期課程の発表は領域ごとにまとめて行うこと、学位論文審査を行う8月コース会議は8月1日（金）に開催することが了承された。  
また、2025年9月修了予定者の学位論文受理の条件は、学位論文審査のコース会議前日（7月31日（木）の17時まで）であることが確認された。

## PREFACE

Hokkaido University was founded in 1876 as Sapporo Agricultural College, the first higher educational institution for agricultural sciences in Japan. The university consists of twelve undergraduate faculties, twenty-one graduate schools, and twenty-six research institutes and centers, with 4,000 faculty members and administrative and technical staff, 11,500 undergraduate students, 6,600 graduate students as well as 2,100 international students from 99 countries (all approximate numbers for personnel and students).

Of all the Faculties and Graduate Schools, the School of Agriculture is the oldest in the university's nearly 150-year history. It was first established to meet the needs of opening the island of Hokkaido as a new frontier. Since then, it has been the leading university in agricultural sciences and has produced many eminent persons.

Today, the School of Agriculture at Hokkaido University is one of the most prestigious Agricultural Faculties among the National University Corporations\* in Japan, attracting more than 70% of its students from areas other than Hokkaido. The same applies to the Graduate School of Agriculture, which is staffed with highly qualified professors and staff. In 2000, it transformed itself into a "Graduate Research University" that places greater emphasis than ever upon graduate education and research activities, and that aims to maintain the highest standards as one of the top universities in Japan in the twenty-first century.

The Global Education Program for AgriScience Frontiers started in April 2018 as an evolved form of the previous Special Postgraduate Program in Special Postgraduate Program in Biosphere Sustainability Science. This program provides a unique combination of such study fields as food, health, and environment to meet urgent needs in research and development of preservation and sustainable utilization of our limited resources on earth to ensure our quality of life in the future. Due to the nature of the program, the language to be used in all educational and research activities will be English. We invite you to take advantage of this opportunity.

September 1, 2025

NOGUCHI Noboru, Ph. D.  
Dean and Professor  
Graduate School of Agriculture

OKUYAMA Masayuki, Ph. D.  
Head and Professor  
The Global Education Program  
for AgriScience Frontiers

\*All the national universities in Japan have been reorganized under the system of National University Corporation since April 2004.

# GUIDELINES FOR APPLICATION (Doctoral Course)

## Feature of the Doctoral Course

- (1) All the lectures, research work, and thesis work will be conducted in English. Students will be expected to learn the Japanese language gradually during their stay.
- (2) Students will be expected to write a thesis in English based on research conducted during the course and submit this thesis to examiners in the Global Education Program for AgriScience Frontiers, Graduate School of Agriculture, Hokkaido University for evaluation. A student will be awarded a Ph.,D. if he/she has completed the course with satisfactory academic performance. A thesis has to be submitted to the examiners for their approval and an oral defense is also required.
- (3) Students are required to complete this program for a Doctoral degree within three years.

## I. Study Areas and Number of International Students for Admission

### 1-1. Study area

- (1) Applicants for any field related to the subjects for the program (refer to pp.13-21) will be accepted.
- (2) Applicants must consult with the expected academic advisors before submitting their application. The application will not be considered, if the application is not approved by the expected academic advisor.

### 1-2. Number of students to be admitted

Several students will be selected for admission. This program will recommend 4 students as candidates for the Scholarship by the Japanese Government (MONBUKAGAKUSHO, MEXT) – hereinafter “Scholarship”.

Apart from the above 4 Scholarship students, students supported by other Japanese Government Scholarship (Embassy Recommendation, etc.) will be selected – hereinafter “Embassy Recommendation Scholarship”.

Additional students will be selected from those who are on other sort of financial supports – hereinafter “Personal Funds”.

## 2. Qualification Requirements

### 2-1. Nationality:

For “Scholarship” applicants: Non-Japanese citizens residing outside of Japan in countries to which the Scholarship by MEXT is offered, are entitled to apply. Students studying in the Master’s Course of the Global Education Program for AgriScience Frontiers are included.

For “Embassy Recommendation Scholarship” applicants: The same as “Scholarship” applicants.

For “Personal funds” applicants: Any nationality except Japanese is entitled to apply.

### 2-2. Age Limit:

For “Scholarship” applicants: those who were born after April 2, 1991.

For “Embassy Recommendation Scholarship” applicants: The same as “Scholarship” applicants.

For “Personal Funds” applicants: No restriction.

### 2-3. Academic Background:

#### For “Scholarship” applicants :

- (1) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a master’s degree or professional degree in September 2026.

- (2) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or a professional degree from a foreign university by September 2026.
  - (3) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or professional degree by taking correspondence courses in Japan offered by a foreign school by September 2026.
  - (4) Individuals who have completed a foreign university's graduate school coursework at an educational institution in Japan and have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or professional degree by September 2026. The institution needs to be positioned within the school education system of that foreign country as an educational body with a graduate school course and is required to be designated by the Japanese Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology.
  - (5) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree by September 2026 from a United Nations University as prescribed in Article 1(2) of the Act on Special Measures Incidental of Enforcement of the Agreement between the United Nations and Japan regarding the Headquarters of the United Nations University (Act No.72 of 1976), which was established under the December 11, 1972 resolution of the General assembly of the United Nations.
  - (6) Individuals who have completed their formal education by taking a correspondence course through a non-Japanese university, an educational institution which received the designation by (5), or the United Nations University, who have passed an examination or a screening equivalent to the regulations by Article 16.2 in Standards for the Establishment of Graduate Schools, and who are recognized to have an academic ability equivalent to Master's degree holders by the Graduate School, or who will obtain it by September 2026.  
(Hereinafter referred to as "individuals from a foreign university who have passed a Qualifying Examination").
  - (7) Individuals designated by the minister of education, culture, sports, science and technology (1989 Notice No. 118, Ministry of Education, Science and Culture; 2001 Notice No. 55, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology).
    - (a)Those who have graduated from a university, have worked for two years or longer at a university or research institution, and have earned a master's degree or are recognized by the Hokkaido University Graduate School of Agriculture as possessing equivalent or greater academic capabilities based on its research findings.
    - (b)Those who have completed 16 years of school education in a foreign country or 16 years of school education of a foreign country by taking a correspondence course in Japan offered by a school of that foreign country, have worked for two years or longer at a university or research institution, and have earned a master's degree or are recognized by the Hokkaido University Graduate School of Agriculture as possessing equivalent or greater academic capabilities based on its research findings
  - (8) Individuals who are recognized by this graduate school as possessing the equivalent or greater academic skills as those of a person who has a master's degree or professional degree based on an individual admission qualification screening and who will be 24 years of age as of September 30, 2026\*.
- \* This qualification applies to those who do not possess the qualifications of a university graduate, such as graduates of a national college of technology, junior college, specialized training college, or other types of schools, as well as graduates of Japanese branch schools of foreign universities or foreign schools.

**For "Embassy Recommendation Scholarship" and "Personal Funds" applicants:**

*April Entrant*

- (1) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a master's degree or professional degree in March 2026.

- (2) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or a professional degree from a foreign university by March 2026.
- (3) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or professional degree by taking correspondence courses in Japan offered by a foreign school by March 2026.
- (4) Individuals who have completed a foreign university's graduate school coursework at an educational institution in Japan and have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or professional degree by March 2026. The institution needs to be positioned within the school education system of that foreign country as an educational body with a graduate school course and is required to be designated by the Japanese Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology.
- (5) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree by March 2026 from a United Nations University as prescribed in Article 1(2) of the Act on Special Measures Incidental of Enforcement of the Agreement between the United Nations and Japan regarding the Headquarters of the United Nations University (Act No.72 of 1976), which was established under the December 11, 1972 resolution of the General Assembly of the United Nations.
- (6) Individuals who have completed their formal education by taking a correspondence course through a non-Japanese university, an educational institution which received the designation by (5), or the United Nations University, who have passed an examination or a screening equivalent to the regulations by Article 16.2 in Standards for the Establishment of Graduate Schools, and who are recognized to have an academic ability equivalent to Master's degree holders by the Graduate School, or who will obtain it by March 2026.  
(Hereinafter referred to as "individuals from a foreign university who have been passed a Qualifying Examination".)
- (7) Individuals designated by the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology (1989 Notice No. 118, Ministry of Education, Science and Culture; 2001 Notice No. 55, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology).
  - (a)Those who have graduated from a university, have worked for two years or longer at a university or research institution, and have earned a master's degree or are recognized by the Hokkaido University Graduate School of Agriculture as possessing equivalent or greater academic capabilities based on its research findings.
  - (b)Those who have completed 16years of school education in a foreign country or 16 years of school education of a foreign country by taking a correspondence course in Japan offered by a school of that foreign country, have worked for two years or longer at a university or research institution, and have earned a master's degree or are recognized by the Hokkaido University Graduate School of Agriculture as possessing equivalent or greater academic capabilities based on its research findings
- (8) Individuals who are recognized by this graduate school as possessing the equivalent or greater academic skills as those of a person who has a master's degree or professional degree based on an individual admission qualification screening and who will be 24 years of age as of March 31, 2026\*.

\* This qualification applies to those who do not possess the qualifications of a university graduate, such as graduates of a national college of technology, junior college, specialized training college, or other types of schools, as well as graduates of Japanese branch schools of foreign universities or foreign schools.

*October Entrant:* the same as "April Entrant" applicants except that March 31, 2026 should read September 30,2026.

2-4. Grades: Applicants are required to have obtained a GPA of 2.30 (3.00 as the full score) during the applicant's most recently graduated/expected to graduate program. Applicants are requested to follow the advice from their expected academic advisors.

2-5. Health: Those who are certified as both physically and mentally healthy by a qualified and recognized physician.

2-6. Language level/ability: Applicants must be fluent in English. Those who satisfy at least one of the following conditions of English proficiency.

- (1) Those who have a score of at least B2 equivalent of the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) in each of the four skills (listening, reading, speaking, and writing) on a qualification or certification test. In addition, the score must have been obtained within two years of the start of the application.
- (2) Those who have completed a course of study, mainly in English, to fulfil the curriculum required to be admitted to universities in Japan.

2-7. Remarks:

- (1) Military personnel and civilian employees of the armed forces are not eligible for this course if they remain on active duty.
- (2) Individuals applying based on qualifications (6), (7), or (8) are required to submit other necessary documents, so be sure to contact us at least 3 months before the listed deadlines.

2-8. Inquiry

If you have any questions about this program, please contact the Administrative Office of Agriculture and Global Food Science by email ([kyomu@agr.hokudai.ac.jp](mailto:kyomu@agr.hokudai.ac.jp)). In your email, please include the name of your expected academic advisors and your desired research field.

### **3. Privacy Policy**

Names, addresses, and other personal information provided to the university on application documents will be used solely for enrollee selection, the announcement of exam results, and admission procedures. The personal information of those who are accepted for admission shall also be used for administrative purposes after enrollment (student registration, academic counseling, etc.), student support services (health management, scholarship applications, etc.), and administrative tasks related to tuition, etc.

Only the names and addresses of applicants will be used to facilitate communications from the Hokkaido University Frontier Foundation and an organization associated with the university: the Hokkaido University Athletic Union.

### **4. Application: for “Scholarship” students**

4-1. Important notice for application

- (1) Applicants should contact and discuss well with their expected academic advisor in advance. Applications without such pre-discussion are not accepted.
- (2) The following documents must be submitted to the expected academic advisor, before the deadline of December 26, 2025(all of these documents MUST ARRIVE by this deadline).
- (3) After the application, any cancellation is NOT permitted.
- (4) The procedure is illustrated on p.12.
- (5) Those who are recipients of scholarships or fellowships from any other sources are not eligible for the Scholarship.

- (6) The payment of Scholarship to an enrolled student may be terminated if any of the information supplied with an application is later found to be false. Admission can be canceled any time after enrollment.
- (7) Non-eligibility: Those who meet any one of the following conditions are ineligible. If identified ineligible after being selected as a scholarship student, he/she must withdraw from the scholarship.
- ① Those who are military personnel or military civilian employees at the time of their arrival in Japan or during the period of the payment of the scholarship.
  - ② Those who cannot arrive in Japan by the date of the period specified by MEXT or the accepting university.
  - ③ Those who are previous grantees of the Japanese Government (MEXT) scholarship programs (including those who withdraw from the scholarship program after arriving in Japan). This does not apply to: those who have educational or work experience exceeding more than three years from the following month of the period of the previous scholarship to the estimated first month of the payment of this scholarship; and the past grantees of Japanese Studies Students program who have graduated or are going to graduate from universities in their home countries, Japan-Korea Joint Government Scholarship Program for the Students in Science and Engineering Departments and Young Leaders' Program. The MEXT Honors Scholarship is not included in the Japanese Government (MEXT) scholarship programs.
  - ④ Those who are currently also applying to another program under the Japanese Government (MEXT) Scholarship system.
  - ⑤ Those who are already enrolled in a Japanese university or other institution with a residence status of "Student," or who are going to be enrolled, or plan to enroll, in a Japanese university or other institution as a privately-financed international student from the time of application to the MEXT scholarship program in the applicant's country until the commencement of the period for payment of the MEXT scholarship. However, this stipulation does not apply to privately-financed international students who, even though they are enrolled, or are planning to enroll, in a Japanese university or other institution, verifiably complete their studies before the start of the scholarship payment period, return to their home country at the time of the scholarship application, and newly acquire the "Student" residence status and come to Japan.
  - ⑥ Those who are planning to receive scholarship money from an organization other than MEXT (including a government organization of the applicant's country) on top of the scholarship money provided by MEXT after the start of the scholarship payment period.
  - ⑦ Those who are expected to graduate at the time of application and cannot satisfy the condition of academic background by the deadline given.
  - ⑧ Holders of dual nationality at the time of application who cannot verify that they will give up Japanese nationality by the time of their arrival in Japan.
  - ⑨ Those who plan to, from the time of application for the MEXT scholarship program, engage in long-term research (such as fieldwork or internship) outside Japan or plan to take a long-term leave of absence from the university.
  - ⑩ Those who have completed a doctoral course and have no intention to obtain a degree.

#### 4-2. Evaluation of Applicants

The applicants will be evaluated based on his/her application documents and the interview including online and e-mail interviews.

\*The online and e-mail interviews, nine times or more in total, will be scheduled by your expected academic advisor.

#### 4-3. What to submit

All of the following documents must be sent by registered airmail.

- (1) A completed application form for the Global Education Program for AgriScience Frontiers. Use the attached format, print on both sides, and paste your photograph as

- specified. You have to be instructed how to write the study plan section (6. i & ii) by your expected academic advisor.
- (2) A completed application form for the Japanese Government Scholarship. Use the format provided by MEXT, print on both sides, and paste your photograph as specified.
  - (3) A medical certificate issued by a public hospital within the last six months. Use the attached format.
  - (4) Photocopies of certificates of a Bachelor's degree and a Master's degree or certificates of graduation. If the applicant has not yet graduated from the Master's Course, a certified letter from your university stating the expected finishing date of the Master's Course is required.
  - (5) Official academic transcript of all undergraduate course work and Master's Course work from the university.  
 \*Note: Applicants are required to have obtained a GPA of 2.30 (3.00 as full score) during the applicant's most recently graduated/expected to graduate program. Official academic transcripts should include the information about when you acquired the credits (at least year/semester).
  - (6) Record of high academic achievements earned at the most recent university from which the applicant is a graduate. Please submit the awards you received, if any. If not, no need to submit.
  - (7) A certificate of English language proficiency: Submit objective evidence of eligibility for language proficiency as described in "2-6 Language level/ability" (incl. TOEFL/IELTS certificates).
  - (8) A certificate of citizenship or proof of residence in the applicant's home country. A photocopy of your passport is preferable.
  - (9) A letter of recommendation to the President of Hokkaido University, Dr. HOUKIN Kiyohiro from the Dean or Head of the applicant's most recently graduated/expected to graduate program.
  - (10) Summary of Bachelor's thesis and Master's thesis (each one page of A4 or letter size format).
  - (11) Entrance examination fee: exempted.

**REMARKS:**

- (1) The above documents should be typed in English using a word processor and printed on both sides of a uniform size, typically A4 or letter size.
- (2) Applications will not be accepted if any of the above documents are incomplete, incorrect or lacking supporting evidence. No material will not be accepted after the deadline.
- (3) All documents once submitted will not be returned.
- (4) Applicants who are not awarded a master's degree by the application deadline must submit a photocopy of the certificate of the degree once they receive it.

**4-4. Notification of the results of selection**

The successful applicants will be approved as candidates at the professor meeting of this program and the final decision for admission will be made at the faculty meeting of the Graduate School of Agriculture, Hokkaido University. The final results for granting the Scholarship made from MEXT will be notified to the applicants around the beginning of July 2026. Successful applicants will be enrolled as full-time graduate students.

**4-5. Supplementary explanation for the Scholarship**

- (1) Time of arrival: A successful applicant must arrive in Japan by the end of September.
- (2) Fees: Admission fee and tuition fee are exempted.

- (3) Scholarship payments: Scholarship will not be paid if a student is long absent from the Graduate School of Agriculture or if his/her studies are not satisfactory. Scholarship extensions beyond the standard term of study are not permitted.  
The first scholarship will be paid in a month or more. A typical initial living expense during this period is 300,000 Japanese yen or more.
- (4) Transportation to Japan: MEXT shall provide an economy class air ticket from the international airport nearest to your residence in the country you have nationality to the designated international airport in Japan. [Note: Recipient should bear the cost of domestic travels to the nearest international airport at home and from the arriving international airport to Hokkaido University. Recipient should also bear the cost of airport tax and connecting local flights in Japan and travel insurance for his/her travels to Japan.]
- (5) Personal accident insurance for students pursuing education and research: This insurance compensates for physical casualties from which students suffer in their intra-curricular activities, both on and off campus, and extra-curricular activities on campus. All the students must be insured before starting research activities. The premium is 3,620 Yen for three years (the premium may be changed without prior notification).

## **5. Application: for “Research Students” of the Research Faculty of Agriculture in the category of “Embassy Recommendation Scholarship” etc.**

### **5-1. What to submit**

All of the following documents must be submitted to the Administrative Office of Agriculture and Global Food Science. The documents (1) should be type-written in English (use word processing software as far as you can), prepared in uniform size based on the A4 or letter size format, and printed on both sides.

- (1) A completed application form for the Global Education Program for AgriScience Frontiers. Use the attached format, print on both sides, and paste your photograph as specified. You have to be instructed how to write the study plan section (6. i & ii) from your expected academic advisor. Interview (three times or more) about your research theme and plan will be conducted.
- (2) A medical certificate issued by a public hospital within the last six months. Use the attached format.
- (3) Entrance examination fee: exempted.

### **5-2. Remarks:**

Please refer to Table 1 on p.11 for the important dates (deadline of application, notification time of the results of selection, arrival time to Japan). The process for evaluating the applicant (see 4-2), fees (4-5 (2)), and personal accident insurance (see 4-5 (5)) is the same as for the “Scholarship” applicants.

## **6. Application: for “Personal Funds” students**

### **6-1. Important notice for the application**

- (1) Applicants should contact and discuss well with their expected academic advisor, in advance. Applications without such pre-discussion are not accepted.
- (2) The following documents must be submitted to the expected academic advisor before the deadline listed in Table 1 (all of these documents MUST ARRIVE by this deadline).
- (3) The procedure is illustrated on p.12.
- (4) Admission can be canceled at any time after enrollment if any of the information supplied with an application is later found to be false.

### **6-2. Evaluation of Applicants**

The applicants will be evaluated based on his/her application documents and the interview ,including online and e-mail interviews.

\*The online and e-mail interviews, six times or more in total, will be scheduled by your expected academic advisor. Three or more in-person interviews may be conducted instead, if possible, such as with current research students.

### 6-3. What to submit

All of the following documents must be sent by registered airmail.

(1) A completed application form for the Global Education Program for AgriScience Frontiers.

Use the attached format, print on both sides, and paste your photograph as specified. You have to be instructed how to write the study plan section (6. i & ii) by your expected academic advisor.

(2) A medical certificate issued by a public hospital within the last six months. Use the attached format.

(3) Photocopies of the certificate of Bachelor's degree and Master's degree or certificates of graduation (If the applicant has not yet graduated from the Master's Course, a certified letter from your university stating the expected finishing date of the Master's Course).

\*Note: Those who graduated or will graduate from a university in China must submit the following documents in addition to a Certificate of (Expected) Graduation.

Graduates:

a. Online Verification Report of Higher Education Qualification Certificate (教育部学历证书电子注册备案表) .

b. Graduation Diploma (毕业证书) and Degree Diploma (学位证书) .

Expected Graduates:

a. Online Verification Report of Student Record (教育部学籍在线验证报告)

Obtain documents "a" above by requesting them at "中国高等教育学历证书查询":  
<http://www.chsi.com.cn/xlcx/bgys.jsp>.

Also be sure that there are 15 or more days left until the expiration date of the online verification at the time of its submission.

(4) Official academic transcript of all undergraduate course work and Master's Course work from the university.

\*Note: Applicants are required to have obtained a GPA of 2.30 (3.00 as the full score) during the applicant's most recently graduated/ expected to graduate program. The official academic transcripts should include the information about when you acquired the credits (at least year/semester).

(5) A certificate of English language proficiency: Submit objective evidence of eligibility for language proficiency as described in "2-6 Language level/ability" (incl. TOEFL/IELTS certificates).

(6) A certificate of citizenship or proof of residence in the applicant's home country: A photocopy of your passport is preferable.

(7) A letter of recommendation to the President of Hokkaido University, Dr. HOUKIN Kiyohiro from the Dean or Head of the applicant's most recently graduated/expected to graduate program.

(8) Summary of Bachelor's thesis and Master's thesis (each one page of A4 or letter size format).

(9) Entrance examination fee of 30,000 Japanese Yen\* (The method of payment should be discussed with your expected academic advisor).

\*Once application materials have been accepted, the examination fee will not be refunded for any reason.

\*Those who will enter the Doctoral Course from the Master's Course of Hokkaido University are not required to pay the entrance examination fee.

\*China Scholarship Council (CSC) supported students, Hokkaido University President's Fellowship international students, and Hokkaido University Special Grant Program international students are exempt from the examination fee.

#### REMARKS:

- (1) The above documents should be typed in English using a word processor and printed on both sides of a uniform size, typically A4 or letter size.
- (2) Applications will not be accepted if any of the above documents are incomplete, incorrect, or lacking supporting evidence. No material will be accepted after the deadline.
- (3) All documents once submitted will not be returned.
- (4) Applicants who are not awarded a bachelor's degree by the application deadline must submit a photocopy of the certificate of the degree once they receive it.

#### 6-4. Notification of results of selection

The final decision for admission will be made at the faculty meeting of the Graduate School of Agriculture, Hokkaido University. Applicants will be notified of the results of selection on the dates indicated in Table 1. Successful applicants will be enrolled as full-time graduate students.

#### 6-5. Supplementary explanations for the Personal Funds students

- (1) Time of Arrival: Applicants may choose one entrance date, out of April or October, 2026. According to the entrance date, the deadline date for the application is separately fixed. Applicants must refer to Table 1 for the important dates of application.
- (2) Admission fee: 282,000 Japanese Yen\* (as of the year 2025).
- (3) Tuition fee: 267,900 Japanese Yen for each semester (annually 535,800 Japanese Yen) \* (as of the year 2025) Tuition fee may be revised while a student is attending the Graduate School.  
\*Those who will enter the Doctoral Course from the Master's Course of Hokkaido University are not required to pay the admission fee.
- (4) Personal accident insurance for students pursuing education and research: This insurance compensates for physical casualties from which students suffer in their intra-curricular activities, both on and off campus, and extra-curricular activities on campus. All the students must be insured before starting research activities. The premium is 3,620 Japanese Yen for three years. (The premium may be changed without prior notification).

### 7. Application: for Master's Course students of the Graduate School of Agriculture, Hokkaido University

#### 7-1. What to submit

All of the following documents must be submitted to the Administrative Office of Agriculture and Global Food Science. The documents (1) should be typed in English using a word processor and printed on both sides of a uniform size, typically A4 or letter size.

- (1) A completed application form for the Global Education Program for AgriScience Frontiers Use the attached format, print on both sides, and paste your photograph as specified. You have to be instructed how to write the study plan section (6. i & ii) by your expected academic advisor. However, sections 6-i) and 6-ii) for the "Background of your study" and "Study plan in Japan in detail", respectively, of the application form can be replaced with the "Study plan or Progress of your study" in the document submitted to MEXT for the extension of your Scholarship (except "Personal Funds" students) Interviews (three times or more) will be conducted.

- (2) Medical certificate issued by the Health Care Center of Hokkaido University. Applicants must take an annual health check at Hokkaido University in April.
- (3) Entrance examination fee: exempted.

#### 7-2. Remarks:

See Table 1 for deadlines of application and notification time of the results of selection. This Section 7 includes “Scholarship” students, “Embassy Recommendation Scholarship” students (April or October entrant), and “Personal Funds” students (April or October entrant).

#### 7-3. Supplementary explanations for Master’s Course students of the Graduate School of Agriculture Hokkaido University

- (1) Admission fee: exempted
- (2) Tuition fee: 267,900 Japanese Yen for each semester (annually 535,800 Japanese Yen)  
\*(as of the year 2025) Tuition fee may be revised while a student is attending the Graduate School.  
\*\*“Scholarship” students, “Embassy Recommendation Scholarship” students, China Scholarship Council (CSC) supported students, Hokkaido University President’s Fellowship international students, and Hokkaido University Special Grant Program international students are exempt from the tuition fee.
- (3) Personal accident insurance for students pursuing education and research: This insurance compensates for physical casualties from which students suffer in their intra-curricular activities, both on and off campus, and extra-curricular activities on campus. All the students must be insured before starting research activities. The premium is 3,620 Japanese Yen for three years. (The premium may be changed without prior notification).

**Table 1. Important dates in the application procedure for “Embassy Recommendation Scholarship”, “Personal Funds”, and “Master’s Course students of this Program” categories.**

	April Entrant	October Entrant
Submission of application requirements	October 31, 2025	May 29, 2026
Notification of results of selection	Early December, 2025	Middle of July, 2026
Time of arrival	Late March, 2026	Late September, 2026

## FLOW CHART FOR THE APPLICATION PROCEDURE

Applicant must have communications with his/her expected academic advisor (pp.13-21) at Hokkaido University.

Please visit the Program's website  
<https://www.agr.hokudai.ac.jp/spgp/lab/>  
for the contact information.

You can also refer the research field of the Faculty members of the Research Faculty of Agriculture at the website below.

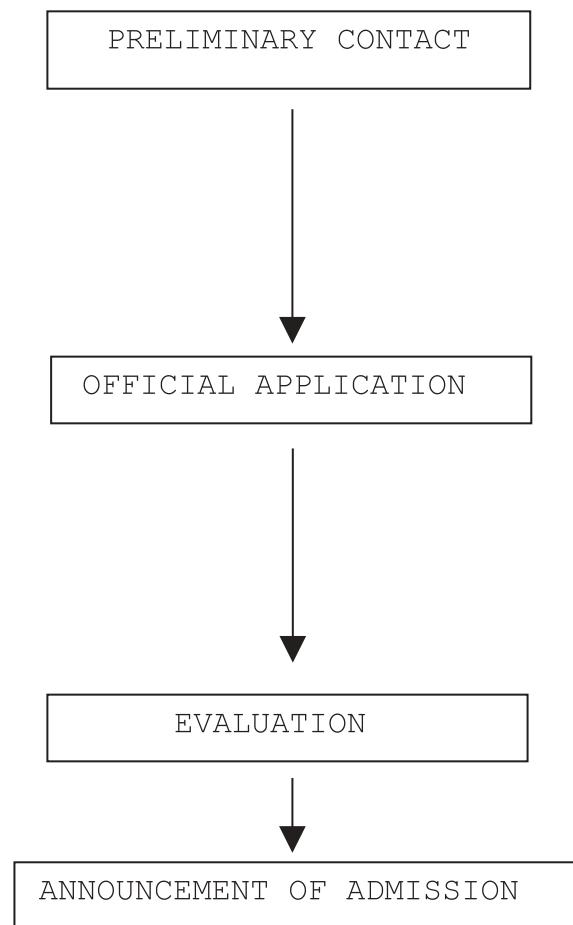
<https://www.agr.hokudai.ac.jp/en>

Applicant sends the official application form and required documents to the expected academic advisor at Hokkaido University.

Applicants must consult with the expected academic advisors before submitting his/her application. The application will not be considered for screening, if it is not endorsed by the expected academic advisor.

Applicant is evaluated based on his/her application documents and the e-mail interview (or interview).

Applicant is informed of the result of selection by Hokkaido University.



**THE GLOBAL EDUCATION PROGRAM  
FOR AGRISCIENCE FRONTIERS  
DIVISIONS, COURSES, RESEARCH FIELDS, STAFF AND SUBJECTS**

**Division of Agriculture, Frontiers in Production Sciences**

(As of September 1, 2025)

**◎PATHOGEN-PLANT INTERACTIONS**

NAKAHARA Kenji, Ph. D., Agr., Lecturer

Current research activities:

- 1) Molecular biology of plant viruses
- 2) Mechanism of the innate immunity against viruses in plants
- 3) Plant biotechnology using viruses

**◎PLANT BREEDING**

KISHIMA Yuji, Dr., Agr., Professor ☺

KOIDE Yohei, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Rice genetics underlying genome dynamism and phenotypic change
- 2) Developmental genetic study in rice
- 3) Genetic control of plant transposable elements
- 4) Genetics of rice speciation/evolution

**◎PLANT NUTRITION**

SHINANO Takuro, Ph. D., Agr., Professor

WATANABE Toshihiro, Ph. D., Agr., Associate Professor

MARUYAMA Hayato, Ph.D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Plant adaptation to adverse soil conditions: deficiencies and toxicities of mineral elements
- 2) Plant-soil interaction in the rhizosphere
- 3) Ionomics in plant and soil

**◎VEHICLE ROBOTICS**

NOGUCHI Noboru, Ph. D., Agr., Professor

OSPINA Alarcon Ricardo, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Agricultural robot
- 2) ICT for agriculture
- 3) Utilization of aerial and surface vehicles for agriculture
- 4) Biomass energy

## ◎AGRICULTURAL AND FOOD PROCESS ENGINEERING

KOSEKI Shigenobu, Ph. D., Agr., Professor

KOYAMA Kento, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Non-thermal food processing
- 2) Predictive modeling of microbial growth and/or inactivation
- 3) Development of novel technologies for shelf life extension of foods

## ◎AGRICULTURAL BIO-SYSTEM ENGINEERING

IWABUCHI Kazunori, Dr., Agr., Professor

SHIMIZU Naoto, Ph. D., Agr., Associate Professor

ITOH Takanori, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Bioresource engineering
- 2) Carbonization
- 3) Composting
- 4) Biorefinery

## ◎AGRICULTURAL AND RURAL DEVELOPMENT

KONDO Takumi, Ph. D., Agr., Professor ☺

AIZAKI Hideo, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Research on theories of economic development and agricultural development
- 2) Economic analysis of agricultural technology development and adoption of agricultural innovations
- 3) Research on population and food problem, and overseas development aid

## ◎CROP SCIENCE

KASHIWAGI Junich, Ph. D., Agr., Associate Professor

NAKASHIMA Taiken, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Drought tolerance improvements in tetraploid and hexaploid wheat
- 2) Further yield improvements on Hokkaido rice varieties developed in high latitude and cool environments
- 3) Yield improvement of maize under multiple abiotic stresses in Hokkaido

## Division of Agriculture, Frontiers in Biosciences

### ◎APPLIED MOLECULAR ENTOMOLOGY

ASANO Shin-ichiro, Ph. D., Agr., Professor  
SATO Masanao, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Analysis of interaction between insect pathogenic microbes and host insects
- 2) Genetic engineering of insect viruses, virus vectors, and insect cells
- 3) Systems biological approaches in insect microbiology research

### ◎MOLECULAR BIOLOGY

ONOUCHI Hitoshi, Ph. D., Sci., Professor  
HIRAGORI Yuta, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Regulatory mechanisms of translation and mRNA stability in plants
- 2) Molecular mechanisms of responses to environmental stresses and nutritional deficiencies in plants

### ◎MOLECULAR ENZYMOLOGY

OKUYAMA Masayuki, Ph. D., Agr., Professor  
TAGAMI Takayoshi, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Analysis of the structure-function relationship of carbohydrate-active enzymes
- 2) Investigating and functionally modifying enzymes to enhance the efficient synthesis of functional saccharides

### ◎MOLECULAR AND ECOLOGICAL CHEMISTRY

HASHIMOTO Makoto, Ph. D., Pharm., Professor  
SAKIHAMADA Yasuko, Ph. D., Sci., Professor  
MURAI Yuta, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Organic synthesis and developments of chemical tools for chemical biology studies
- 2) Synthesis and application of stable isotope labeled biologically active compounds (drugs, pesticides, etc.)
- 3) Chemical and physiological function analysis of microorganism secondary metabolites and plant pigments in animal and plant cells
- 4) Research on host recognition mechanisms of plants and microorganisms

### ◎NATURAL PRODUCT CHEMISTRY

MATSUURA Hideyuki, Ph. D., Agr., Professor  
KITAOKA Naoki, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Research on biological active compounds regulating the life cycles of plants
- 2) Research on biological active compounds from ethnobotanical medicinal plants

- 3) Research on new plant growth regulators
- 4) Research on phloem borne signals to trigger systemic acquired resistance in plants

## ◎BIOCHEMISTRY

MORI Haruhide, Ph. D., Agr., Professor  
SABURI Wataru, Ph. D., Agr., Associate Professor  
OTA Tomoya, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Bio-engineering of carbohydrates and related compounds, including  $\alpha$ -glucans,  $\beta$ -mannosides, and others, for production of functional foods and biomaterials
- 2) Exploring novel enzymatic activities and engineering of the enzymes
- 3) Carbohydrate metabolic pathways and relevant enzymes in living organisms

## ◎MICROBIAL PHYSIOLOGY

FUKIYA Satoru, Ph. D., Agr., Professor  
MAEDA Tomoya, Ph. D., Eng., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Functional analysis of bifidobacterial genes involved in the intestinal fitness
- 2) Metabolism of bile acids by intestinal bacteria
- 3) Regulatory mechanism of gut microbiota composition
- 4) Analysis of metabolic regulation in industrially important bacteria
- 5) Analysis of the evolutionary dynamics of bacterial antibiotic resistance

## ◎NUTRITIONAL BIOCHEMISTRY

ISHIZUKA Satoshi, Ph. D., Agr., Professor  
HIRA Tohru, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Studies on pre-symptomatic conditions in noncommunicable diseases
- 2) Dietary intervention to prevent and ameliorate symptoms in noncommunicable diseases
- 3) Nutrient sensing in enteroendocrine systems
- 4) Physiological functions of dietary factors

## ◎FOOD BIOCHEMISTRY

SONOYAMA Kei, Ph. D., Agr., Professor ☺  
KATO Eisuke, Ph. D., Sci., Associate Professor  
OHSAKA Fumina, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Physiological studies on the relationship between food, gut microbiota and host
- 2) Study on bitter taste receptors in extra-oral tissues
- 3) Search for various physiologically active compounds from natural sources

## ◎ANIMAL FUNCTION & NUTRITION

KOIKE Satoshi, Ph. D., Agr., Professor  
MIURA Hiroto, Ph.D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Digestive mechanisms in herbivorous animals
- 2) Exploration and evaluation of new feed and additive candidates
- 3) Functional analysis of gut microbiota and its application within and beyond animal industry
- 4) Physiology in development and function of gastrointestinal tissue

## ◎CELL & TISSUE BIOLOGY

WAKAMATSU Junichi, Ph. D., Agr., Professor  
KOBAYASHI Ken, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Research on qualities of meat and meat products
- 2) Research on biofunctionalities of meat
- 3) Mechanism of milk production in mammary epithelial cells
- 4) Cell physiological studies in domestic animals and animal products

## ◎APPLIED FOOD SCIENCE

KUMURA Haruto, Ph. D., Agr., Professor  
HAYAKAWA Toru, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

Dairy application of enzymes and metabolites from edible microorganism

## ◎RHIZOSPHERE CONTROL

EZAWA Tatsuhiro, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Molecular mechanism of nutrient acquisition in plant-fungal symbiotic associations
- 2) Role of symbiotic microorganisms in the establishment of pioneer plants in stressed soil
- 3) Ecology of plant symbiotic microorganisms in agricultural and disturbed ecosystems

## ◎MOLECULAR ENVIRONMENTAL MICROBIOLOGY

TAMURA Tomohiro, Ph. D., Med., Professor  
KAMAGATA Yoichi, Ph. D., Agr., Professor  
MORITA Naoki, Ph. D., Sci., Associate Professor  
KITAGAWA Wataru, Ph. D., Sci., Associate Professor  
KIKUCHI Yoshitomo, Ph. D., Sci., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Searching for useful genomic resources for bioprocessing applications
- 2) Development of a microbial biofactory that can be used for multiple purposes
- 3) Cultivation of uncultured microbes and functional analysis of microbial communities
- 4) Elucidation of adaptation mechanisms in extremophiles and their industrial applications

- 5) Construction of high-level expression system in microorganisms using genomic information
- 6) Development of microbial production system of functional lipids using genetic engineering
- 7) Elucidation of microbial "Dormant—Resuscitation cycle" mechanism and function
- 8) Elucidation of molecular mechanisms underpinning insect-microbe gut symbioses
- 9) Investigation of microbial anaerobic energy metabolisms and their industrial applications

## **Division of Agriculture, Frontiers in Environmental Sciences**

### **◎ORNAMENTAL PLANTS AND LANDSCAPE ARCHITECTURE**

AIKOH Tetsuya, Ph. D., Agr., Professor  
MATSUSHIMA Hajime, Ph. D., Agr., Lecturer

Current research activities:

- 1) Landscape planning & management in urban and rural areas
- 2) Monitoring and management of recreational visitors in protected areas
- 3) Landscape ecology and green infrastructure in urban and coastal areas

### **◎ANIMAL ECOLOGY**

ARAKI Hitoshi, Ph. D., Sci., Professor  
SAKATA Masayuki, Ph. D., Sci., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Understanding biodiversity in natural ecosystems
- 2) Environmental DNA (eDNA) approaches for monitoring wild organisms
- 3) Rapid genetic adaptation of living organisms to environmental changes
- 4) Influence of anthropogenic changes on animal species in the wild

### **◎SYSTEMATIC ENTOMOLOGY**

ÔHARA Masahiro, Dr., Agr., Professor  
YOSHIZAWA Kazunori, Dr., Sci., Professor

Current research activities:

- 1) Phylogenetic systematics of insects based on morphological and molecular data
- 2) Functional morphology and biomechanics
- 3) Descriptive taxonomy and Museum collection
- 4) Bio-informatics and database

### **◎SOIL SCIENCE**

TOMA Yo, Ph. D., Agr., Professor  
NAKAHARA Osamu, Ph. D., Agr., Associate Professor  
KURAMOCHI Kanta, Ph. D., Agr., Lecturer ※

Current research activities:

- 1) Biogeochemical nutrient cycling in agro-ecosystems
- 2) Quantitative land evaluation for trade-off relations between crop productivity and environmental capacity
- 3) Greenhouse gas emissions in soil ecosystems

### **◎SILVICULTURE AND FOREST ECOLOGY**

MIYAMOTO Toshizumi, Ph. D., Agr., Professor  
SAITO Hideyuki, Dr., Agr., Lecturer

Current research activities:

- 1) Ecology of forest dynamics and its application to silvicultural practice
- 2) Functional genomics and physiological ecology of forest trees for conservation and improvement of ecosystem function
- 3) Taxonomy and ecology of fungi involved in nutrient cycling and disease in the forest ecosystem
- 4) Forest restoration and rehabilitation in degraded lands

## ◎WOOD CHEMISTRY

URAKI Yasumitsu, Ph. D., Sci., Professor  
SHIGETOMI Kengo, Ph. D., Agr., Lecturer  
SUZUKI Shiori, Ph. D., Eng., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Elucidation of biosynthesis and biodegradation pathways of woody components
- 2) Biorefinery of woody biomass
- 3) Functionalization of Lignin
- 4) Isolation and functionalization of bioactive wood extractives

## ◎ECOSYSTEM MANAGEMENT

MORIMOTO Junko, Ph. D., Agr., Professor  
ISHIYAMA Nobuo, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Assessing the impacts of land use and natural and human disturbances on biodiversity and ecosystem services
- 2) Examination of mitigation and adaptation strategies considering the responses of ecosystems under climate change
- 3) Restoration of degraded ecosystems including stream, wetland and forest

## ◎EARTH SURFACE PROCESSES AND LAND MANAGEMENT

YAMADA Takashi, Dr., Agr., Professor ※KASAI Mio, Ph. D., Environmental Sciences, Professor  
KATSURA Shin'ya, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Landslide susceptibility
- 2) Hillslope hydrology
- 3) Geomorphic connectivity and catchment-scale sediment delivery

## ◎FOREST POLICY

SHOJI Yasushi, Dr., Agr., Professor  
OWAKE Tatsuya, Ph. D., Agr., Assistant Professor  
MAMENO Kota, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Economic and sociological approaches for forest
- 2) Valuing environmental goods and services derived from the forests
- 3) Strategy of forestry management entities

## ◎LAND AND WATER MANAGEMENT

YAMAMOTO Tadao, Dr., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Utilisation, management, and conservation of rural resources
- 2) Detection and evaluation of agricultural activity by using remote sensing technique
- 3) Assessment of catchment land use and water environment
- 4) Operation and management of irrigation and drainage facilities
- 5) Peatland management and conservation

## ◎ECOLOGICAL AND ENVIRONMENTAL PHYSICS

HIRANO Takashi, Ph. D., Agr., Professor

OKADA Keiji, Dr., Agr., Lecturer

YAMADA Hiroyuki, Ph. D., Agr., Lecturer

Current research activities:

- 1) Heat, water and mass transfer and their balances in various land surfaces and terrains
- 2) Response of crop growth and yield to meteorological condition
- 3) Evaluation and utilization of climatic resources on agriculture for cold region
- 4) Monitoring and assessment of terrestrial ecosystem functions and disturbance effects on the functions
- 5) Ecological and hydrological assessment for wetland conservation

## ◎SOIL CONSERVATION

HAMAMOTO Shoichiro, Dr., Eng., Professor

TATSUNO Takahiro, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Colloid transport and deposition processes in soils
- 2) Soil physicochemical properties in soil-root system
- 3) Soil mass transport in sustainable agriculture practices

## ◎FOREST BIORESOURCE TECHNOLOGY

TAMAI Yutaka, Dr., Agr., Professor

KODA Keiichi, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Development of novel materials/useful substances from unused agroforest biomass resources
- 2) Clarification of the significance of the occurrence of lignin in higher plants
- 3) Cultivation, breeding, and molecular phylogenetic analysis of basidiomycetes
- 4) Elucidation of symbiotic mechanism between forest plants and fungi for restoration of forest vegetation
- 5) Clarification of ecological characteristics of forest microorganisms for exploration of their function

Those with ≈ will be resigned (retired) as of March 31, 2026.

**APPLICATION FORM FOR THE GLOBAL EDUCATION  
PROGRAM FOR AGRISCIENCE FRONTIERS,  
GRADUATE SCHOOL OF AGRICULTURE,  
HOKKAIDO UNIVERSITY**  
 北海道大学大学院農学院  
 先進農学フロンティア特別コース入学申請書  
**Academic Year 2026**  
**2026 年度**  
**Doctoral Course (博士後期課程)**

Paste your photograph  
taken within the past 6  
months. Write your  
name and nationality in  
block letters on the back  
of the photo.

(photo 4.5×3.5cm)

**INSTRUCTIONS (記入上の注意)**

- A. Application should be typewritten or written in Roman block letters.  
(記入は楷書又はローマ字活字体を用いること)
- B. Numbers should be in Arabic figures. (数字は算用数字を用いること)
- C. Year should be written in the Anno Domini system. (年号はすべて西暦とすること)
- D. Proper nouns should be written in full, and not abbreviated. (固有名詞はすべて正式な名称とし、一切省略しないこと)
- E. Application should be printed on both sides. (両面印刷とすること)

Financial support (Check one box) 経費支弁者 (いずれかをチェックすること)

- |                                                                                                |                                                                |
|------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> Monbukagakusho scholarship 国費・国費定員枠外                       | <input checked="" type="checkbox"/> Personal Funds 私費          |
| <input type="checkbox"/> Special program recommendation 国費 (特別コース枠)                            | <input type="checkbox"/> Supported by myself/ my family 自費     |
| <input type="checkbox"/> Embassy recommendation 国費定員枠外 (大使館推薦)                                 | <input type="checkbox"/> Sponsored by my home government 政府奨学金 |
| <input type="checkbox"/> Others 国費定員枠外 (一般枠・国内採用等) <input type="checkbox"/> Other funds その他奨学金 |                                                                |

\*Please state the name of scholarship/ sponsorship. (Personal Funds only) 奨学金団体名を記入すること。

**I. Name in full ; in native language (姓名 (自国語))**

\_\_\_\_\_, \_\_\_\_\_, \_\_\_\_\_  
 (Family name)      (First name)      (Middle name)

(Sex)

- |                                       |  |
|---------------------------------------|--|
| <input type="checkbox"/> Male (男)     |  |
| <input type="checkbox"/> Female (女)   |  |
| (Marital Status)                      |  |
| <input type="checkbox"/> Single (未婚)  |  |
| <input type="checkbox"/> Married (既婚) |  |

Alphabets (英語表記)

\_\_\_\_\_, \_\_\_\_\_, \_\_\_\_\_  
 (Family name)      (First name)      (Middle name)

**2. Nationality**

(国籍) \_\_\_\_\_

**3. Date of birth (生年月日)**

19

Age

(As of April 1, 2026)

Year (年)

Month (月)

Day (日)

(年齢)

(2026 年 4 月 1 日現在)

**4. Present status (name of the university attend, or the employer)**

(現職 (在学大学名又は勤務先名まで記入すること。))

**5. Present address, telephone number, facsimile number and E-mail address.**

(現住所及び電話番号、ファックス番号または電子メールアドレス)

現住所 (Present Address):

電話番号/FAX 番号 (Telephone/Facsimile number):

E-mail address:

6. Proposed study plan in Japan; State, in more than 600 words, the background of your study and study plan. This item will be used as one of the most important references for selection. Statement must be typewritten in block letters. Additional sheets of paper may be attached, when necessary.

日本での研究計画（この研究計画は、選考の重要な参考となるので、研究の背景、研究計画を 600 語以上で詳細に記入すること。記入は、タイプ又は楷書によるものとし、必要な場合は別紙を追加してもよい。）

i) Background of your study (研究の背景)

ii) Study plan in Japan in detail (研究計画; 詳細に記入すること。)

iii) Name of the desired supervisor (指導を希望する主指導教員名を必ず記入すること。)

7. Educational background: (学歴)

	Name and address of school (学校名及び所在地)	Year and month of entrance and completion (入学及び卒業年月)	Period of schooling you have attended (修業年数)	Diploma or Degree awarded, major subject (学位・資格, 専攻科 目)
Elementary Education (初等教育)	Name (学校名)	From (入学) y(年) m(月)	yrs (年)	
Elementary School (小学校)	Location (所在地)	to (卒業) y(年) m(月)	mons (月)	
Secondary Education (中等教育)	Name (学校名)	From (入学) y(年) m(月)	yrs (年)	
Lower Secondary School (中学)	Location (所在地)	to (卒業) y(年) m(月)	mons (月)	
Secondary Education (中等教育)	Name (学校名)	From (入学) y(年) m(月)	yrs (年)	*
Upper Secondary School (高校)	Location (所在地)	to (卒業) y(年) m(月)	mons (月)	
Higher Education (高等教育)	Name (学校名)	From (入学) y(年) m(月)	yrs (年)	
Undergraduate Level (大学)	Location (所在地)	to (卒業) y(年) m(月)	mons (月)	
Graduate Level (大学院)	Name (学校名)	From (入学) y(年) m(月)	yrs (年)	
	Location (所在地)	to (卒業) y(年) m(月)	mons (月)	
Total of the years of schooling mentioned above (以上を通算した全学校教育修学年数)			yrs (年) mons (月)	
I agree to handle personal data in countries outside EEA. (私は EEA 域外の国で個人情報を取り扱うことに同意します。)				<input type="checkbox"/>

Note: In the case that the applicant has passed the qualifying examination for admission to a university, indicate so in the blank marked \*. (「大学入学資格試験」に合格している場合には、その旨＊欄に記入すること。)

If the blank spaces above are not sufficient for information required, please attach a separate sheet.

(上欄に書ききれない場合には、適当な別紙に記入して添付すること。)

8. Employment record; Begin with the most recent employment, if applicable. (職歴)

Name and address of organization (勤務先及び所在地)	Period of employment (勤務期間)	Position (役職名)	Type of work (職務内容)
	From To		
	From To		
	From To		

9. Person to be notified in applicant's home country, in case of emergency:

(緊急の際の母国の連絡先)

i) Name in full:

(氏名)

---

ii) Address; with telephone number, facsimile number or E-mail address:

(住所：電話番号及びファクシミリ番号又は電子メールアドレス)

現住所(Present Address):

---

電話番号/FAX 番号 (Telephone/Facsimile number):

---

E-mail address:

---

iii) Occupation:

(職業)

---

iv) Relationship:

(本人との関係)

---

10. Pledge (Read the following sentences well. If you agree with it, sign below.)

誓約 (以下を良く読み、承諾する場合は署名)

Here I apply for the Global Education Program for AgriScience Frontiers, Graduate School of Agriculture, Hokkaido University with required documents. I will never cancel the application after this moment.

(私はここに必要な書類と共に北海道大学大学院農学院先進農学フロンティア特別コースに申請致します。今後この申請の取り消しはいたしません。)

Date of application:

(申請年月日) \_\_\_\_\_

Applicant's signature:

(申請者署名) \_\_\_\_\_

Applicant's name in

Roman block capitals:

(申請者氏名) \_\_\_\_\_

健 康 診 断 書 (医師に記入してもらって下さい)  
CERTIFICATE OF HEALTH (this page to be completed by examining physician)

日本語又は英語により明瞭に記載すること。

Please fill out (PRINT/TYPE) in Japanese or English.

氏名  
Name: \_\_\_\_\_, \_\_\_\_\_  
Family name, First name, Middle Name

男 Male 生年月日  
 女 Female Date of Birth: 年齢  
Age:

1. 身体検査

Physical Examinations

(1) 身長 体重  
Height \_\_\_\_\_ cm Weight \_\_\_\_\_ kg

(2) 血圧 \_\_\_\_\_ ~ \_\_\_\_\_ 脈拍数 \_\_\_\_\_ /分  
Blood pressure Pulse rate /min  整 regular  
 不整 irregular

(3) 視力  
Eyesight: (R) \_\_\_\_\_ (L) \_\_\_\_\_ (R) \_\_\_\_\_ (L) \_\_\_\_\_  
裸眼 without glasses 矯正 with glasses or contact lenses  
色覚異常の有無     
color blindness (+) (±) (-)

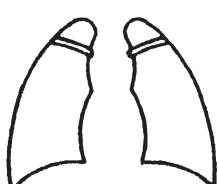
(4) 聴力 言語  
Hearing:  正常 normal  正常 normal  
 低下 impaired  異常 impaired

2. 申請者の胸部について、聴診とX線検査の結果を記入してください。X線検査の日付も記入すること (6ヶ月以上前の検査は無効)。

Please describe the results of physical and X-ray examinations of applicant's chest, also note the exact date of X-ray (X-ray taken more than 6 months prior to the certification is NOT valid) .

Lung:  正常 normal Date \_\_\_\_\_ Cardiomegaly:  正常 normal  
 異常 impaired  異常 impaired

Film No \_\_\_\_\_



3. 既往症

Past history: Please indicate with + or - and fill in the date of recovery

Tuberculosis.....  ( . . . ) Malaria.....  ( . . . ) Other communicable disease.....  ( . . . )  
Epilepsy.....  ( . . . ) Renal Disease.....  ( . . . ) Cardiac Diseases.....  ( . . . )  
Diabetes.....  ( . . . ) Drug Allergy.....  ( . . . ) Psychosis.....  ( . . . )  
Functional disorder in extremities.....  ( . . . ) Others (Name of Diseases: \_\_\_\_\_) .....  ( . . . )

4. 検査

Laboratory tests

検尿 Urinalysis: glucose ( ), protein ( ), occult blood ( )

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

5. 診断医の印象を述べて下さい。

Please describe your impression.

6. 志願者の既往症、診察・検査の結果から判断して、現在の健康の状況は充分に日本での就学に耐えうるものと思われますか？

In view of the applicant's history and the above findings, is it your observation that his/her health status is adequate to pursue studies in Japan?

yes

no

日付

Date: \_\_\_\_\_

署名

Signature: \_\_\_\_\_

医師氏名

Physician's Name in Print: \_\_\_\_\_

検査施設名

Office/Institution: \_\_\_\_\_

所在地

Address: \_\_\_\_\_

## はじめに

北海道大学は1876年に札幌農学校として創立された日本で最初の高等農業科学教育研究施設であり、我が国初めての学士授与教育機関である。

本学は12の学部・21の大学院研究科（院）・26の研究所および研究センターなどからなり、4,000名の教職員・11,500名の学部学生及び6,600名の大学院学生から成り立ち、その中には99ヶ国・2,100名の外国人留学生が含まれている。（人数は概数）

北海道大学の全ての学部・研究科において、農学部は約150年の長い歴史を持つ最古の学部であり、北海道の開拓という目的の為に創設されて以来、農学分野では常に先端を歩む大学であり多くの著名人を輩出した。

今日、北海道大学農学部は日本の国立大学法人\*の中で最も権威のある学部の1つであり、入学者のうち北海道以外の出身者が7割以上を占めている。大学院農学研究院もまた同様であり、併せて質の高い教授及び職員が在籍している。西暦2000年には大学院教育に重点を置いた「大学院重点化大学」へと移行し、21世紀に於いて日本の最も優秀な大学の1つとして、最高のレベルを維持しようとしている。

「包括的先進農業フロンティア育成のための国際教育プログラム」（以下、先進農学フロンティア特別コース）は、それまでの「生存基盤科学特別コース」を基盤として、新たに2018年4月に設立された。本プログラムは、地球上の限られた資源の保全と持続的活用によって未来における人類の生存基盤を確立する為に必要な、食物、健康科学、環境に係る教育研究の独創的なプログラムを提供する。

なお、プログラムの性格上、教育・研究に使われる言語は英語であり、我々はこのチャンスをぜひ有効に活用していただきたいと思っている。

2025年9月1日

農学院長

教授 野 口 伸

先進農学フロンティア特別コース長

教授

奥 山 正 幸

\*2004年4月1日より日本の国立大学は、全て国立大学法人へと移行した。

## 募集要項（博士後期課程）

### 博士後期課程の特徴について

- (1) すべての講義・研究・論文指導は英語で行われるが、在籍中に日本語を習得することが望ましい。
- (2) 課程在籍中に行った研究の成果に基づき学位論文を英語で執筆し、先進農学フロンティア特別コースの学位授与審議委員会の審査及び口頭諮問を受けなければならない。学術的に十分な成果が得られた場合には博士（農学）の学位が授与される。
- (3) 博士後期課程を3年で修了することが求められる。

### 1. 研究分野と募集人員について

#### 1-1 研究分野

- (1) 先進農学フロンティア特別コースに属する研究室の研究テーマに関連した研究分野（13-21ページ参照）であること。
- (2) 指導予定教員の許可がなければ、出願することができない。出願する前には指導予定教員と、受入れ手続きと研究内容について十分に打ち合わせをしておかなければならない。

#### 1-2 募集人員

数名の学生が選抜される。先進農学フロンティア特別コースは4名の学生を日本政府（文部科学省）による国費外国人留学生候補者（以下「**国費外国人留学生**」）として推薦する。

これとは別にその他の国費留学生（大使館推薦等）も選抜されることがある。これを国費の定員枠外留学生と呼ぶ。定員枠外とは、上記4名以外の国費枠留学生を表す（以下「**国費定員枠外留学生**」）。

また、他の経済的支援からなる学生（以下「**私費外国人留学生**」）を選抜する。

### 2. 出願資格

#### 2-1 国籍

「**国費外国人留学生**」：日本政府が定めた対象国に居住し、日本国以外の国籍を持つ者。

先進農学フロンティア特別コースの修士課程修了予定者も含む。

「**国費定員枠外留学生**」：それぞれの国費留学生採用枠における条件を満たす者。

「**私費外国人留学生**」：日本国以外の国籍を持つ者。

#### 2-2 年齢

「**国費外国人留学生**」：

1991年4月2日以降に出生した者

「**国費定員枠外留学生**」：それぞれの国費留学生採用枠における条件を満たす者。

「**私費外国人留学生**」：年齢制限はない。

#### 2-3 学歴

「**国費外国人留学生**」

- (1) 修士の学位又は専門職学位を有する者及び2026年9月までに授与見込みの者

- (2) 外国の大学において修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2026年9月までに授与見込みの者
  - (3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2026年9月までに授与見込みの者
  - (4) 我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2026年9月までに授与見込みの者
  - (5) 国際連合大学本部に関する国際連合と日本国との間の協定の実施に伴う特別措置法（昭和51年法律第72号）第1条第2項に規定する1972年12月11日の国際連合総会決議に基づき設立された国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者及び2026年9月までに授与見込みの者
  - (6) 外国の学校、(5)の指定を受けた教育施設又は国際連合大学の教育課程を履修し、大学院設置基準第16条の2に規定する試験及び審査に相当するものに合格し、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者及び2026年9月までに認められる見込の者（以下「外国の大学において基礎力審査に相当するものに合格した者」という。）
  - (7) 文部科学大臣の指定した者（平成元年文部省告示第118号）
    - ① 大学を卒業し、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学院において当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
    - ② 外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学院において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
  - (8) 本学院において、個別の出願資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、2026年9月30日までに24歳に達する者\*
- \*高等専門学校・短期大学の卒業者、専修学校・各種学校の卒業者、外国大学日本分校・外国人学校の卒業者など大学卒業資格を有していない者

「国費定員枠外留学生」および「私費外国人留学生」

#### 4月入学者

- (1) 修士の学位又は専門職学位を有する者及び2026年3月までに授与見込みの者
- (2) 外国の大学において修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2026年3月までに授与見込みの者
- (3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2026年3月までに授与

### 見込みの者

- (4) 我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2026年3月までに授与見込みの者
- (5) 国際連合大学本部に関する国際連合と日本国との間の協定の実施に伴う特別措置法（昭和51年法律第72号）第1条第2項に規定する1972年12月11日の国際連合総会決議に基づき設立された国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者及び2026年3月までに授与見込みの者
- (6) 外国の学校、(5)の指定を受けた教育施設又は国際連合大学の教育課程を履修し、大学院設置基準第16条の2に規定する試験及び審査に相当するものに合格し、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者及び2026年3月までに認められる見込の者（以下「外国の大学において基礎力審査に相当するものに合格した者」という。）
- (7) 文部科学大臣の指定した者（平成元年文部省告示第118号）
  - ① 大学を卒業し、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学院において当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
  - ② 外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学院において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
- (8) 本学院において、個別の出願資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、2026年3月31日までに24歳に達する者\*

\*高等専門学校・短期大学の卒業者、専修学校・各種学校の卒業者、外国大学日本分校・外国人学校の卒業者など大学卒業資格を有していない者

### 10月入学者

4月入学者と同じであるが、2026年3月31日を2026年9月30日に読み替える。

- 2-4 成績：社会人は最終学歴の学業成績、在学生は現在在籍する課程の学業成績係数（3点満点）が2.30以上の者を対象とする。詳細は指導予定教員の指示に従うこと。
- 2-5 健康状態：医師によって心身共に健康であると証明された者。
- 2-6 語学能力：英語が堪能である者。英語の能力を有する者として、以下のいずれかの条件を満たす者。
  - (1) リスニング・リーディング・スピーキング・ライティングの4技能を計測できる試験で、各技能のスコアが、ヨーロッパ言語共通参考枠（CEFR）のB2相当以上の資格・検定試験のスコアを有している者。また、募集開始から2年以内に取得したスコアであること。
  - (2) 日本の大学院修士課程又は博士後期課程への入学資格を満たす教育課程を、英語を主要言

語として修了した者。

#### 2-7 注意事項

- (1) 現役軍人または軍属の資格の者は出願することができない。
- (2) 出願資格（6）（7）（8）によって出願する者は、別途必要な書類があるので少なくとも出願提出期限の3ヶ月前までに問い合わせること。

#### 2-8 問合せ先

本プログラムに関する質問等は、農学・食資源学事務部農学院教務担当まで E-mail (kyomu@agr.hokudai.ac.jp) で連絡のこと。なお E-mail には希望する研究分野と指導予定教員名を含めること。

### 3. 個人情報の取扱いについて

- ・本学では、出願書類に記載されている氏名、住所その他の個人情報は、入学者選抜及び合格発表並びに入学手続きを行うために利用する。また、同個人情報は、合格者のみ入学後の教務関係（学籍、修学指導等）、学生支援関係（健康管理、奨学金申請等）、授業料等に関する業務を行うために利用する。
- ・個人情報のうち、氏名、住所に限って、北大フロンティア基金及び本学関連団体である北海道大学体育会からの連絡を行うために利用する場合がある。

### 4. 国費外国人留学生の出願について

#### 4-1 出願に係る注意事項

- (1) 事前に指導予定教員と連絡を取り、打ち合わせを行わなければならない。事前打ち合わせが無い出願は受け付けない。
- (2) 以下に表記している出願書類の原本を、2025年12月26日までに指導予定教員宛に提出しなければならない。（これらの出願書類は出願期間内に必着であること）。
- (3) 出願後の辞退は一切受け付けない。
- (4) 出願方法については32ページに図示している。
- (5) 他の奨学金を受給している者は国費留学生として採用されない。
- (6) 出願時提出された書類に虚偽が発見された場合には、奨学金の支給は停止され合格が取り消される。
- (7) 対象外

次に掲げる事項に一つでも該当する者については対象外とする。採用以降に判明した場合には辞退すること。

- ① 渡日時及び奨学金支給期間において、現役軍人又は軍属の資格の者。
- ② 文部科学省又は受入大学の指定する期日までに渡日できない者。
- ③ 過去に日本政府（文部科学省）奨学金留学生であった者（渡日後辞退者を含む）。ただし研究留学生については、奨学金支給最終月の翌月から奨学金支給開始月までに3年以上の学業又は職務経歴がある者、又は最後に受給した日本政府（文部科学省）奨学金が日本語・日本文化研修留学生（帰国後に在籍大学を卒業した又は卒業見込みの者に限る。）、日韓共同理工系学部留学生、ヤング・リーダーズ・プログラム留学生のいずれ

かであった者はこの限りではない。なお、文部科学省学習奨励費（MEXT Honors Scholarship）は日本政府（文部科学省）奨学生にあたらないため、過去に受給歴があっても応募可能。

- ④ 日本政府（文部科学省）奨学金制度による他の2026年度奨学金支給開始のプログラムとの重複申請をしている者。
- ⑤ 申請時に既に在留資格「留学」で日本の大学等に在籍している者及び申請時から奨学金支給期間開始前に私費外国人留学生として日本の大学等に在籍、又は在籍予定の者。ただし、現在、日本の大学等に在籍又は在籍予定の私費外国人留学生であっても、奨学金支給期間開始前に修了し帰国することが申請時において確実で、新たに在留資格「留学」を取得し渡日する者はこの限りではない。
- ⑥ 奨学金支給開始後に日本政府（文部科学省）以外の機関（自国政府機関を含む）から奨学金を受給することを予定している者。
- ⑦ 「卒業見込みの者」であって、所定の期日までに学歴の資格及び条件が満たされない者。
- ⑧ 申請時に二重国籍者で、渡日時までに日本国籍を離脱したことを証明できない者。
- ⑨ 申請時から日本以外での研究活動（インターンシップ、フィールドワーク等）や休学等を長期間予定している者。
- ⑩ 博士課程修了者については、学位取得を目的としない者。

#### 4-2 入学者選抜方法

申請書類及び面接（オンライン、Eメールインタビューを含む）によって審査される。

※指導予定教員とその他の教員による計9回以上のオンライン・メールインタビューが実施される。

#### 4-3 出願書類

以下にあるすべての書類を、航空郵便書留で送付すること。

- (1) 入学願書（本要項の用紙により、両面印刷とすること。所定の欄に写真貼付）  
※入学申請書の i) 研究の背景、ii) 研究計画は、事前協議に基づいて作成すること。
- (2) 国費外国人留学生（文部科学省）申請用紙（交付の用紙により、両面印刷とすること。所定の欄に写真貼付）。
- (3) 健康診断書（過去6ヶ月以内に発行されたもの。本要項交付の用紙によること）
- (4) 卒業証書および修士学位記のコピー、もしくは卒業および修了証明書（修士課程を修了見込みの者は修了期日が明記された修了見込証明書）。
- (5) 成績証明書（学士・修士課程のもの）  
※注：社会人は最終学歴の学業成績、在学生は現在在籍する課程の学業成績係数（3点満点）が2.30以上の者を対象とする。成績証明書には、単位取得時期（少なくとも年/学期）が明記されていること。
- (6) 最終出身大学において優秀であることを証明する学業成績。（受賞歴等あれば提出。特になければ提出不要）

(7) 英語能力証明書

「2-6 語学能力」の要件を満たす根拠となる書類（例：TOEFL、IELTS等の証明書）

(8) 市民権を証明する書類（母国の住民であることを証明できるもの）。パスポートのコピーが望ましい。

(9) 推薦書：1通（最終出身学校の学部等の長から北海道大学総長竜宮清博宛て）

(10) 卒業論文および修士論文の要旨（A4またはレターサイズ判、各1枚）

(11) 検定料 免除する。

その他

(1) 書類は、可能な限り文書作成ソフト等を用いて、全てA4またはレターサイズ判両面印刷に統一して作成すること。

(2) 書類に不備がある場合もしくは不正であると判明した場合は一切受け付けない。出願期間を経過し願書等が到着した場合も受け付けない。

(3) 提出された書類は返還しない。

(4) 見込証明書を提出している者は、正式な修了証明書等が発行され次第提出すること。

4-4 合格者発表

審査に合格した者は、先進農学フロンティア特別コース教授会にて合格判定後、入学候補者として承認される。最終的には、北海道大学大学院農学院教授会によって合格者が決定される。国費奨学生支給決定については、2026年7月上旬頃に文部科学省からの奨学生支給決定と試験結果が通知され、合格者は本学院学生として入学が許可される。

4-5 国費外国人留学生に係る補足説明

(1) 渡日時期

採用された者は9月末までに渡日すること。

(2) 入学料及び授業料

入学料及び授業料は免除される。

(3) 奨学金

標準修業年限を超える奨学生の延長は認められない。大学を長期に亘り不在とした場合、または、学業の進捗状況が悪い場合、奨学生は支給されない。

渡日後、奨学生を受給するまでに1ヶ月～1ヶ月半程度必要なため、当座の生活資金として、さしあたり必要となる費用を最低30万円相当程度用意すること。

(4) 渡日旅費

文部科学省は採用決定者の国籍の居住地に最も近い国際空港から、日本国内で最初に到着する国際空港までのエコノミークラス航空券を支給する。（注意：採用決定者は自国内での当該国際空港までの旅費、日本国内の到着国際空港からの旅費、空港税、旅行傷害保険料等を負担しなければならない。）

(5) 学生教育災害傷害保険

研究を開始する前に学生教育研究災害傷害保険に加入しなければならない。保険料は3年間で3,620円である（変更となる場合もある）。

## 5. 研究生（国費定員枠外留学生（大使館推薦等））からの出願について

### 5-1 出願書類

以下にあるすべての書類を、 農学・食資源学事務部農学院教務担当窓口まで提出すること。書類は、可能な限り文書作成ソフト等を用いて全てA4またはレターサイズ判両面印刷に統一して作成すること。

- (1) 入学願書（本要項の用紙により、両面印刷とすること。所定の欄に写真貼付）

※入学申請書の 6.i) 研究の背景、 ii) 研究計画は、事前協議に基づいて作成すること。  
なお、3名の教員により計3回以上、研究のテーマや研究計画について面談が実施される。

- (2) 健康診断書（過去6ヶ月以内に発行されたもの。本要項の用紙によること）

- (3) 検定料 免除する。

### 5-2 諸事項

各日程については32ページの第1表を参照すること。入学者選抜方法（4-2）、入学金及び授業料（4-5（2））、傷害保険（4-5（5））については国費外国人留学生と同じである。

## 6. 私費外国人留学生の出願について

### 6-1 出願に係る注意事項

- (1) 事前に受入れ予定教員と連絡を取り、打ち合わせを行わなければならない。事前打ち合わせが無い出願は受け付けない。
- (2) 以下に表記している出願書類を、第1表に示す期日までに受入れ予定教員宛に提出しなければならない。（これらの出願書類は出願期間内に必着であること）。
- (3) 出願方法については32ページに図示している。
- (4) 出願時に提出された書類に虚偽が発見された場合には合格が取り消される。

### 6-2 入学者選抜方法

申請書類及び面接（オンライン、Eメールインタビューを含む）によって審査される。

※3名の教員により、計6回以上のオンライン・メールインタビューが実施される。すでに研究生として在籍しているなど、直接面談可能な場合は、メールインタビューを面談に代えることがある。この場合は、3名の教員により計3回以上の面談が実施される。

### 6-3 出願書類

以下にあるすべての書類を、航空郵便書留で送付すること。

- (1) 入学願書（本要項の用紙により、両面印刷とすること。所定の欄に写真貼付）

※入学申請書の 6.i) 研究の背景、 ii) 研究計画は、事前協議に基づいて作成すること。

- (2) 健康診断書（過去6ヶ月以内に発行されたもの。本要項の用紙によること）

- (3) 卒業証書および修士学位記のコピー、もしくは卒業および修了証明書（修士課程を修了見込みの者は修了期日が明記された修了見込証明書）。修士の学位を有しないが博士論文研究基礎力審査に合格した者は、修士学位記（修了証明書）に代えて当該審査に合格した証明書。

◎中国の大学を卒業、または卒業見込みの者は、卒業（見込）証明書に加えて、以下の書

類を提出してください。

既卒者…a 学歴証書電子登録票（教育部学历证书电子注册备案表）

b 卒業証書（毕业证书）及び学位証書（学位证书）

卒業見込者…a オンライン在籍認証レポート（教育部学籍在线验证报告）

上記のうち、書類aは中国教育部認証システム（中国高等教育学历证书查询

<http://www.chsi.com.cn/xlcx/bgys.jsp>より取得してください。

また、提出時点でWeb認証の有効期限が15日以上残っていることを確認してください。

#### （4）成績証明書（学士・修士課程のもの）

※注：社会人は最終学歴の学業成績、在学生は現在在籍する課程の学業成績係数（3点満点）が2.30以上の者を対象とする。成績証明書には、単位取得時期（少なくとも年/学期）が明記されていること。

#### （5）英語能力証明書

「2-6 語学能力」の要件を満たす根拠となる書類（例：TOEFL、IELTS等の証明書）

#### （6）市民権を証明する書類（母国の住民であることを証明できるもの）パスポートのコピーが望ましい。

#### （7）推薦書：1通（最終出身学校の学部等の長から北海道大学総長寶金清博宛て）

#### （8）卒業論文および修士論文の要旨（A4またはレターサイズ判、各1枚）

#### （9）検定料30,000円（支払い方法は指導予定教員と相談すること）

※中国政府派遣留学生、総長奨励金留学生、私費外国人留学生特待プログラム留学生、及び本学大学院修士課程修了見込みの者は、検定料の振込を要しない。

※出願書類を受理した後は、いかなる理由があっても払込済の検定料は返還しない。

#### その他

#### （1）書類は、可能な限り文書作成ソフト等を用いて、全てA4またはレターサイズ判両面印刷に統一して作成すること。

#### （2）書類に不備がある場合、もしくは不正であると判明した場合は一切受け付けない。出願期間を経過し願書等が到着した場合も受け付けない。

#### （3）提出された書類は返還されない。

#### （4）見込証明書を提出している者は、正式な修了証明書等が発行され次第提出すること。

### 6-4 合格者発表

出願者には第1表に定められた期日に試験結果が通知され、合格者は本学院学生として入学が許可される。

### 6-5 私費外国人留学生に係る補足説明

#### （1）渡日時期

2026年4月もしくは10月のいずれかの入学時期を選択することができる。また、入学時期に伴い出願期間が定められている。応募者は第1表を参照し、入学時期等を考慮して出願すること。

#### （2）入学料：282,000円（2025年度実績）

#### （3）授業料：267,900円（年間535,800円・2025年度実績）

※入学料及び授業料は改定される場合がある。授業料は在学中にも改定される場合がある。

※本学大学院修士課程から引き続き博士後期課程に進学する者は入学料の振込を要しない。

※中国政府派遣留学生、総長奨励金留学生及び私費外国人留学生特待プログラム留学生は、入学料及び授業料の振込を要しない。

(4) 学生教育研究災害傷害保険

研究を開始する前に学生教育研究災害傷害保険に加入しなければならない。保険料は3年間で3,620円である（変更となる場合もある）。

## 7. 本学農学院修士課程から博士後期課程への進学者について

### 7-1 出願書類

以下にあるすべての書類を、農学・食資源学事務部農学院教務担当窓口まで提出すること。書類は、可能な限り文書作成ソフト等を用いて全てA4またはレターサイズ判両面印刷に統一して作成すること。

(1) 入学願書（本要項の用紙により、両面印刷とすること。所定の欄に写真貼付）

※入学申請書の i) 研究の背景、ii) 研究計画は、事前協議に基づいて作成すること。なお、奨学金支給期間延長申請書の「研究計画又は研究状況」のコピーを提出するものは入学申請書の i) 研究の背景、ii) 研究計画を省略することができる。（私費留学生を除く。）

3名の教員により計3回以上の面談が実施される。

(2) 健康診断書（北海道大学保健センター発行のもの。進学予定者は4月の定期健康診断を必ず受診すること。）

(3) 検定料 免除する。

### 7-2 諸事項

願書提出期限、合格発表の日程については第1表を参照すること。本項目7は、国費外国人留学生、国費定員枠外留学生（4月あるいは10月入学）、私費外国人留学生（4月あるいは10月入学）を含む。

### 7-3 本学農学院修士課程から博士後期課程への進学者に係る補足事項

(1) 入学料 免除する。

(2) 授業料：267,900円（年間535,800円・2025年実績）

※授業料は在学中にも改正される場合がある。

※国費外国人留学生、国費定員枠外留学生、中国政府派遣留学生、総長奨励金留学生及び私費外国人留学生特待プログラム留学生は、授業料の振込を要しない。

(3) 学生教育研究災害傷害保険

研究を開始する前に学生教育研究災害傷害保険に加入しなければならない。保険料は3年間で3,620円である（変更となる場合もある）。

第1表 国費定員枠外留学生、私費外国人留学生及び内部進学者に係る日程について

	4月入学者	10月入学者
願書提出期限	2025年10月31日	2026年5月29日
合格発表	2025年12月初旬	2026年7月中旬
渡日時期	2026年3月下旬	2026年9月下旬

### 出願の流れ図

出願者はp13-21に示した指導予定教員と連絡をとる。

教員の連絡先は本コースのウェブサイトを参照のこと。

<https://www.agr.hokudai.ac.jp/spgp/lab/>

農学研究院の教員の研究分野は以下の農学研究院・農学院

ウェブサイトでも閲覧可能。

<https://www.agr.hokudai.ac.jp/>

事前コンタクト

指導予定教員に出願書類を郵送する。

指導予定教員の許可がなければ、出願することができない。

出願する前には指導予定教員と、

研究内容について十分に打ち合わせを行うこと。

指導予定教員へ出願書類を送付

出願書類及びメールインタビュー

もしくは面談によって審査される。

審査

合否が通知される。

合否通知

資料4 出願・入学スケジュール

	国費留学生	国費（大使館推薦）・私費留学生	
	10月入学者のみ	4月入学者	10月入学者
受入教員への照会	(候補者選考段階で決定)	10月中旬まで	5月中旬まで
願書提出	12月末	10月末	5月末
書類選考	1月～2月	11月	6月
合否通知	(英語特別コース) 3月 (文部科学省奨学金) 6～7月	12月初旬	7月中旬
渡日	9月末	3月末	9月末
入学	10月	4月	10月

※大使館推薦の場合は、渡日後半年の研究生期間を経た後の入学を原則とする。

## 実行教育課程表

授業科目の内容については、ウェブのシラバス検索で確認してください。  
 URL: <https://syllabus01.academic.hokudai.ac.jp/Syllabi/Public/Syllabus/SylSearch.aspx>

## 修士課程 (Master's Course)

	授業科目 (Subject)	単位 (Credit)	開講期 (Semester)					言語 (Language)	責任担当 (Instructor)
			I	II	III	IV	1~2年 次通年		
必修科目 (Compulsory Subjects)	人口・食料・環境学総論 Economics and Ecology in Population, Food, and the Environment	1	●					E	合崎 Aizaki
	温暖化影響学総論 Mitigation of Global Warming Effect	1	●					E	平野 Hirano
	実践農学総論 Applied Agricultural Science	1	●					E	三谷 Mitani
	農学フロンティア総論 Advanced Review of Agriculture Frontiers	1	●					E	小関 Koseki
	科学研究・科学技術と倫理 Research, Technology and Ethics	1	●					E&J	東山 Higashiyama
	リーダーシップ学総論 Leadership Studies	1	●					E&J	森 Mori
	農学演習 I Seminar on Agricultural Science I	4					●		指導教員 Supervisor
	農学研究 I Study on Agricultural Science I	12					●		指導教員 Supervisor
	農業植物科学特論 Advanced General Agricultural Plant Science	1		●	●			E	金澤 Kanazawa
	農業植物科学特論演習 Advanced Seminar on Agricultural Plant Science	1		●	●			E	金澤 Kanazawa
選択科目 (Elective Subjects)	農業生物学特論 Advanced Agrobiology	1			●	●			小野寺 Onodera
	農業生物学特論演習 Advanced Seminar on Agrobiology	1			●	●			小野寺 Onodera
	作物生産生物学特論 Advanced Botany and Agronomy	1		●				E	鈴木 Suzuki
	作物生産生物学特論演習 Advanced Seminar on Botany and Agronomy	1		●				E	鈴木 Suzuki
	園芸科学特論 Advanced Horticultural Science	1				●			鈴木 Suzuki
	園芸科学特論演習 Advanced Seminar on Horticultural Science	1				●			鈴木 Suzuki
	北海道農業生産基盤学特論 Current Advances in Regional Agricultural Bioscience	2		●					花島 Hanajima
	農業環境政策学特論 Advanced Agricultural and Environmental Policy	1		●					山本(康) Y.Yamamoto
	農業経営学特論 Advanced Farm Business Management	1	●						小松 Komatsu
	開発経済学特論 Advanced Econometrics for Agricultural and Rural Development	1		●				E	合崎 Aizaki
	協同組合学特論 Advanced Cooperative	1		●					板橋 Itabashi
	食料農業市場学特論 Advanced Food and Agricultural Marketing	1			●				坂爪 Sakazume
	食品・循環農業システム工学特論 Advanced Food and Bioproduction Engineering	1	●					E	岩渕 Iwabuchi
	スマート農業特論 Advanced Smart Agriculture	1			●			E	野口 Noguchi
	食品加工工学特論 Advanced Food Process Engineering and Technology	1	●						小関 Koseki
	生物生産工学特論 Advanced Agricultural Production Engineering	1			●				岩渕 Iwabuchi
	有機資源循環学特論 Advanced Organic Material Cycles	1			●				岩渕 Iwabuchi
	データの計測と処理演習 I Seminar on Measurement and Data Processing I	1				●			石井 Ishii
	データの計測と処理演習 II Seminar on Measurement and Data Processing II	1					●		オスピナ Ospina

授業科目 (Subject)	単位 (Credit)	開講期 (Semester)					言語 (Language)	責任担当 (Instructor)
		I	II	III	IV	1~2年 次通年		
生命系 (Group of Biosciences)	畜産科学特論 Advanced Animal Science	1	●				E	小池 Koike
	畜産科学特論演習 Advanced Seminar on Animal Science	1	●				E	鈴木 (裕) Y.Suzuki
	家畜生態学特論 Advanced Livestock Ecology	1			●			上田 Ueda
	バイオテクノロジー学特論 Advanced Biotechnology	1			●		E	奥山 Okuyama
	バイオテクノロジー学特論演習 Advanced Seminar on Biotechnology	1			●		E	奥山 Okuyama
	応用分子生物学特論 Advanced Lecture on Applied Molecular Biology	1		●			E	尾之内 Onouchi
	応用分子生物学特論演習 Advanced Seminar on Applied Molecular Biology	1		●			E	尾之内 Onouchi
	天然物化学特論 Advanced Natural Product Chemistry	1			●			松浦 Matsuura
	生体分子解析学特論 Advanced Analytical Biochemistry	1	●				E	橋本 Hashimoto
	食品安全・機能性開発学特論 Advanced Safety and Function of Food	1	●				E	森 Mori
	食品安全・機能性開発学特論演習 Advanced Seminar on Safety and Function of Food	1	●				E	森 Mori
	腸内細菌微生物学特論 Advanced Gastrointestinal Microbiology	1		●			E	吹谷 Fukiya
	微生物生態学特論 Advanced Microbial Ecology	1		●			E	江澤 Ezawa
	応用微生物学特論 Advanced Molecular Microbiology	1		●			E	北川 Kitagawa
	食品科学特論 Advanced Review of Food Science	1	●				E	石塚 Ishizuka
	食品科学特論演習 Advanced Seminar on Food Science	1	●				E	石塚 Ishizuka
環境系 (Group of Environmental Sciences)	生物生態・体系学特論 I Advanced Ecology and Systematics I	1				●		吉澤 Yoshizawa
	生物生態・体系学特論 II Advanced Ecology and Systematics II	1			●			荒木 Araki
	生物生態・体系学特論 III Advanced Ecology and Systematics III	1			●			長谷川 Hasegawa
	生態進化学特論 Ecology and Evolution	1			●	●	E	荒木 Araki
	動物生態学特論演習 Advanced Seminar on Animal Ecology	1		●	●			長谷川 Hasegawa
	昆虫系統進化学特論 Advanced Systematics and Evolutionary Biology of Insects	1		●	●			吉澤 Yoshizawa
	地域環境学特論 I Advanced Regional Environment I	1	●				E	当真 Toma
	地域環境学特論 II Advanced Regional Environment II	1				●	E&J	倉持 Kuramochi
	森林資源科学特論 Advanced Forest Resources Science	1	●					佐野 Sano
	森林資源科学特論演習 Advanced Seminar on Forest Resources Science	1	●					佐野 Sano
	林産学特論 I Advanced Forest Products Science I	1		●				玉井 Tamai
	林産学特論演習 I Advanced Seminar on Forest Products I	1		●				玉井 Tamai
	林産学特論 II Advanced Forest Products Science II	1			●			佐野 Sano
	林産学特論演習 II Advanced Seminar on Forest Products II	1			●			佐々木 Sasaki
	木質構造学特論 Advanced Timber Engineering	1	●					澤田 Sawata
	森林緑地管理学特論 Advanced Integrated Landscape Management	1	●					山田 Yamada
	森林緑地調査解析学特論 I Advanced Field Research and Data Analysis on Forest-landscape Management I	1				●		桂 Katsura
	森林緑地調査解析学特論 II Advanced Field Research and Data Analysis on Forest-landscape Management II	1	●					庄子 Shoji

授業科目 (Subject)	単位 (Credit)	開講期 (Semester)				言語 (Language)	責任担当 (Instructor)
		I	II	III	IV		
選択科目 (Elective Subjects) 国際交流系及び臨時開講科目 (Group of International Exchange)	国際農学特論 I Advanced International Agricultural Science I	[1]				不定期 (Irregular)	E 教務委員長
	国際農学特論 II Advanced International Agricultural Science II	[2]				不定期 (Irregular)	E 教務委員長
	国際農学研究 I Study on International Agricultural Science I	2				不定期 (Irregular)	E 指導教員 Supervisor
	国際農学研究 II Study on International Agricultural Science II	2				不定期 (Irregular)	E 指導教員 Supervisor
	国際農学研究 III Study on International Agricultural Science III	2				不定期 (Irregular)	E 指導教員 Supervisor
	国際農学研究 IV Study on International Agricultural Science IV	2				不定期 (Irregular)	E 指導教員 Supervisor
	農学研究特別講義 I Special Lecture on Advanced Agricultural Science I	[1]				不定期 (Irregular)	非常勤講師
	農学研究特別講義 II Special Lecture on Advanced Agricultural Science II	[2]				不定期 (Irregular)	非常勤講師
	農学研究特別講義 III Special Lecture on Advanced Agricultural Science III	[3]				不定期 (Irregular)	非常勤講師
	農学研究特別講義 IV Special Lecture on Advanced Agricultural Science IV	[4]				不定期 (Irregular)	非常勤講師
	農学研究特別演習 I Special Seminar on Advanced Agricultural Science I	[1]				不定期 (Irregular)	非常勤講師
	農学研究特別演習 II Special Seminar on Advanced Agricultural Science II	[2]				不定期 (Irregular)	非常勤講師
	農学研究特別演習 III Special Seminar on Advanced Agricultural Science III	[3]				不定期 (Irregular)	非常勤講師
	農学研究特別演習 IV Special Seminar on Advanced Agricultural Science IV	[4]				不定期 (Irregular)	非常勤講師

備考 :

1. 修士課程修了に要する修得単位は、必修科目を22単位、選択科目から8単位以上修得し、合計30単位以上とする。
2. 指導教員が必要と認めたときは、他研究科及び他学院（大学院共通授業科目を含む）からも修得できる。履修登録前に指導教員に相談の上、必ず了承を得ること。  
但し、大学院共通授業科目のうち、農学院専門科目に同一名称の科目がある場合には、農学院専門科目を履修すること。  
なお、これらの科目は、選択科目の修了要件単位数に含めることができる。
3. 指導教員が必要と認めたときは、本学部、他学部及び専門横断科目（学部科目）からも修得できる。  
但し、修了要件として認定する場合は4単位以内とする。  
なお、これらの科目は、選択科目の修了要件単位数に含めることができる。
4. 「E」と付記された科目の講義は英語で実施される。
5. 単位欄中の数字に「[ ]」のつけてある授業科目は、複数の講義題目により行われ、それぞれ一の授業科目として履修することができる。

## 博士後期課程 (Doctoral Course)

授業科目 (Subject)		単位 (Credit)	開講期 (Semester)					言語 (Language)	責任担当 (Instructor)
			I	II	III	IV	1~3年 次通年		
必修科目 (Compulsory Subjects)	農学演習 II Seminar on Agricultural Science II	2					●	E	指導教員 Supervisor
	農学研究 II Study on Agricultural Science II	10					●	E	指導教員 Supervisor
選択科目 (Elective Subjects)	国際農学特論 I Advanced International Agricultural Science I	[1]	不定期 (Irregular)					E	教務委員長
	国際農学特論 II Advanced International Agricultural Science II	[2]	不定期 (Irregular)					E	教務委員長
	国際農学特別研究 I Advanced Study on International Agricultural Science I	2	不定期 (Irregular)					E	指導教員 Supervisor
	国際農学特別研究 II Advanced Study on International Agricultural Science II	2	不定期 (Irregular)					E	指導教員 Supervisor
	国際農学特別研究 III Advanced Study on International Agricultural Science III	2	不定期 (Irregular)					E	指導教員 Supervisor
	国際農学特別研究 IV Advanced Study on International Agricultural Science IV	2	不定期 (Irregular)					E	指導教員 Supervisor
	国際農学特別研究 V Advanced Study on International Agricultural Science V	2	不定期 (Irregular)					E	指導教員 Supervisor
	農学研究特別講義 I Special Lecture on Advanced Agricultural Science I	[1]	不定期 (Irregular)						非常勤講師
	農学研究特別講義 II Special Lecture on Advanced Agricultural Science II	[2]	不定期 (Irregular)						非常勤講師
	農学研究特別講義 III Special Lecture on Advanced Agricultural Science III	[3]	不定期 (Irregular)						非常勤講師
	農学研究特別講義 IV Special Lecture on Advanced Agricultural Science IV	[4]	不定期 (Irregular)						非常勤講師
	農学研究特別演習 I Special Seminar on Advanced Agricultural Science I	[1]	不定期 (Irregular)						非常勤講師
	農学研究特別演習 II Special Seminar on Advanced Agricultural Science II	[2]	不定期 (Irregular)						非常勤講師
	農学研究特別演習 III Special Seminar on Advanced Agricultural Science III	[3]	不定期 (Irregular)						非常勤講師
	農学研究特別演習 IV Special Seminar on Advanced Agricultural Science IV	[4]	不定期 (Irregular)						非常勤講師

備考 :

1. 博士後期課程修了に要する修得単位は、必修科目12単位以上とする。
2. 「E」と付記された科目の講義は英語で実施される。
3. 単位欄中の数字に「[ ]」のつけてある授業科目は、複数の講義題目により行われ、それぞれ一の授業科目として履修することができる。

## 資料6 修了者論文題目一覧

### 修士課程

氏名	国名	コース	分野	入学	修了	経費区分	修士論文題目
CHRISTIN SYLVANA	インドネシア	生産フロンティア	植物ゲノム科学	2021年4月	2023年3月	国費	Light and Chlorophyll Deficiency Effect on Soybean Tocopherol Biosynthesis
KASTAWA NI WAYAN EKA PUTRI GAYATRI	インドネシア	生命フロンティア	胃腸内圈微生物学	2021年4月	2023年3月	国費	Screening of deoxycholic acid-producing bacteria from human feces
QIN TIANYI	中国	生命フロンティア	生物化学	2021年4月	2023年3月	私費	Analysis of acceptor specificity of maltooligosaccharide 4(6)-glucosyltransferase from Tepidibacillus decaturensis in the two-acceptor reaction system
HUANG QINGYUN	中国	生命フロンティア	応用食品科学	2021年4月	2023年3月	国費	Supplementary effect of whey on the yellow pigment production of <i>Monascus</i> sp.
ZHU YAN	中国	環境フロンティア	土壤保全学	2021年4月	2023年3月	国費	Rice growth and nitrogen dynamics with frequent inter-tillage weeding in paddy field without fertilizers and agricultural chemicals from 2018 to 2022
CHUKWU ABIGAIL ONYEKAMMA	ナイジェリア	環境フロンティア	動物生態学	2021年4月	2023年3月	国費	Estimating <i>Pseudaspis hakonensis</i> interactions with migratory salmonids using environmental DNA metabarcoding
HENG SALPISAK	カンボジア	環境フロンティア	農業土木学	2021年4月	2023年3月	私費	Clarification of Water Use under the Complicated Irrigation System and its Modeling in the Boribo-Bamnak River Basin, Cambodia
YUSARA ASTRID	インドネシア	環境フロンティア	生態環境物理学	2021年4月	2023年3月	国費	Development of process-based soybean growth model MATCRO for global yield estimation
LI HANTAO	中国	環境フロンティア	陸域生態系モデリング	2021年4月	2023年3月	私費	Estimating Forest Structural Parameters in Japan Using Multisource Remote Sensing Data
GONG Pengxuan	中国	生産フロンティア	循環農業システム工学	2021年10月	2023年9月	私費	Development of biogas production management system of anaerobic co-digestion process based on response surface methodology and system identification technique
BERLINASARI Tovika	インドネシア	生産フロンティア	作物学	2021年10月	2023年9月	国費	Varietal differences in growth response and adaptation of root anatomy to waterlogging stress in maize ( <i>Zea mays</i> L.) under hydroponic conditions
LUBBA Kayyis Muayadah	インドネシア	生産フロンティア	植物育種学	2021年10月	2023年9月	国費	GDSE Esterase/Lipase genes in rice varieties possess haplotypes adapted to latitude differences and cold-stress
LEMBONO Yoan Felanny	インドネシア	生産フロンティア	食品加工工学	2021年10月	2023年9月	国費	Investigation of optimum ripening condition to inhibit fungal growth in avocado by monitoring the internal rot using X-ray
WANG Zeping	中国	生命フロンティア	生態化学生物学	2021年10月	2023年9月	国費	Study on stereochemical stability of phenylglycine in peptide synthesis
SUBEDI Bishal	ネパール	環境フロンティア	土壤学	2021年10月	2023年9月	国費	Evaluation of Nutrient dynamics affected by tillage and cover crops management in Edamame field in Hokkaido, Japan
ZHANG Zijie	中国	環境フロンティア	土壤学	2021年10月	2023年9月	私費	Effects of three nitrification inhibitors on greenhouse gas emissions and nitrification of different fertilizers
WANG Weiguo	中国	生産フロンティア	ビーグルロボティクス	2021年4月	2024年3月	私費	Grape Visual Recognition Based on YOLOv7 for Robot Harvesting
SHIH Yun-Fang	中国	環境フロンティア	動物生態学	2021年10月	2024年3月	私費	Assessing the Impact of Climate Condition on Bird Migration Patterns: A Case Study of Whooper Swan ( <i>Cygnus cygnus</i> ) Wintering Hokkaido
SANTIKA Intan Widia	インドネシア	生産フロンティア	植物育種学	2022年10月	2024年9月	私費	Genetic analysis of African rice for abiotic stress tolerance through genome-wide association study
THET HTAR SAN	ミャンマー	生産フロンティア	植物育種学	2022年10月	2024年9月	国費	Analysis of grain content related traits in Asian and African Rice Varieties
BAI Rujie	中国	生産フロンティア	循環農業システム工学	2022年10月	2024年9月	私費	Development of a fed-batch-scale anaerobic co-digestion control system based on multivariable output error state space and model predictive control

MAGANA AMAYA Jorge Andres	エルサルバドル	生産フロンティア	循環農業システム工学	2022年10月	2024年9月	国費	Digital analysis of mycelium growth and mycelium density in vitro of <i>pleurotus ostreatus</i> with submerged fermentation as substrate treatment
FASYA Nanda Nurfaizah	インドネシア	生産フロンティア	食品加工工学	2022年10月	2024年9月	国費	Application of peroxy nitric acid as a novel alternative sanitizer to control bacterial pathogen contamination on raw meat surface
ZHUANG Zihan	中国	生命フロンティア	生態化学生物学	2022年10月	2024年9月	国費	Analysis of biosynthesis pathway and culture condition in filamentous fungus <i>Trichoderma virens</i> to enhance production of viridin
PORA Kanta	タイ	生命フロンティア	食品栄養学	2022年10月	2024年9月	国費	Reduced concentrations of bile acids in the enterohepatic circulation in BALB/c mice with ovalbumin-induced allergy
NGUYEN Long Duc	ベトナム	環境フロンティア	陸域生態系モデリング	2022年10月	2024年9月	国費	Country-wide high-resolution mapping of forest above-ground biomass over Taiwan using multiple-source remote sensing data
Ezeaku Victor Ikemehuna	ナイジェリア	環境フロンティア	土壤学	2023年4月	2025年3月	私費	Characterization and Cultivation time of rice husk biochar on soil physicochemical properties and its dynamics on nutrient
ZAHIDAH Qonita Aulia	インドネシア	生産フロンティア	植物育種学	2023年10月	2025年9月	国費	Exploring the causes of meiotic abnormalities occurring polyploids and interspecific hybrids in rice: Focusing on gene expression and chromatin status
PANAPITIYAGE DONA Deshika Madhuwanthi Pananitiva	スリランカ	生産フロンティア	植物育種学	2023年10月	2025年9月	国費	Elucidating the metabolic and genetic relationship between chlorophyll degradation and tocopherol biosynthesis in soybean
AZIZ Desita Triana	インドネシア	生命フロンティア	生態化学生物学	2023年10月	2025年9月	国費	Trifluoromethanesulfonic acid-mediated reactivity aromatic biomolecule: dimerization of ethyl para methoxy cinnamate (EPMC) derived from Indonesian natural product and degradation of phenylglycine derivatives
KHUNSARANON Kunranat	タイ	生命フロンティア	応用食品科学	2023年10月	2025年9月	国費	Strain-dependent variation in lipase production associated with cheese rancidity in <i>Aspergillus oryzae</i>
NAJAH Siti Kamila	インドネシア	生命フロンティア	応用分子昆虫学	2023年10月	2025年9月	国費	Discovery and development of microbial control agents for <i>Oryctes rhinoceros</i>
MANRIQUE CENTENO Joe Rene	エクアドル	生命フロンティア	根圈制御学	2023年10月	2025年9月	国費	Impact of soil pH on the species distribution of arbuscular mycorrhizal fungi

## 博士後期課程

氏名	国名	コース	分野	入学	修了	経費区分	博士論文題目
DALKHSUREN DAVAAJAV	モンゴル	生産フロンティア	循環農業システム工学	2020年4月	2023年3月	私費	Methodology for reducing particulate matter emissions during combustion by improving fuel quality of low-grade biomass
LIU HONGXIA	中国	生命フロンティア	食品栄養学	2020年4月	2023年3月	国費	Induction of ileal permeability and alterations in metabolome in the gut–liver axis induced by 12 $\alpha$ -hydroxylated bile acids in rats
YUAN Yongheng	中国	生産フロンティア	循環農業システム工学	2020年10月	2023年9月	私費	Route exploration of valorization of buckwheat waste based on subcritical liquid treatment
LI Faqinwei	中国	生産フロンティア	循環農業システム工学	2020年10月	2023年9月	私費	Effect of digestate application replacement to chemical fertilizer on the growth, quality and salt stress resistance of vegetables
XU Menglin	中国	環境フロンティア	花卉・緑地計画学	2020年10月	2023年9月	私費	Validation of landscape planning framework based on an assessment of ecological resistance and ecological risk
Xie Ruoyun	中国	生命フロンティア	基礎環境微生物学	2020年10月	2023年12月	私費	Molecular mechanisms of rare earth element utilization by methane-oxidizing bacteria and protease-producing bacteria
Cao Tianzhi	中国	環境資源学専攻	ピークルロボティクス	2017年10月	2024年3月	私費	Estimation of root crop yield: Integration of computer vision for quantity counting, quality assessment, and geospatial data mapping in Chinese Yam harvesting
SYAIFUDIN MUHAMAD	インドネシア	生産フロンティア	作物栄養学	2021年4月	2024年3月	国費	Strontium behavior from soil to plants
BANKO PETRA ZSUZSANNA	ハンガリー	生命フロンティア	分子生物学	2020年10月	2024年3月	国費	<i>In vitro</i> co-expression chromatin assembly and remodeling platform for plant histone variants
OTA Tomoya	日本	生命フロンティア	生物化学	2021年4月	2024年3月	一般	Function and structure of 81-3-glucan-degrading enzymes from the pink snow mold fungus, <i>Microdochium nivale</i>
NAKANISHI Toshiki	日本	生命フロンティア	応用分子昆虫学	2021年4月	2024年3月	一般	Elucidation of the upstream gene regulatory network to activate the Polyhedrin promoter in <i>Bombyx mori</i> nucleopolyhedrovirus
Tetsu Yatsuyanagi	日本	環境フロンティア	動物生態学	2020年4月	2024年3月	一般	Understanding mechanisms of formation and maintenance of fish biodiversity using environmental DNA
DELA CRUZ IAN NIEL BULOR	フィリピン	環境フロンティア	昆虫体系学	2021年4月	2024年3月	国費	Taxonomic revision of the subfamily Histerinae in the Philippine Archipelago and the genus <i>Atholus</i> in Far Eastern Asia and Oriental region(Coleoptera, Histeridae)
Myint Zin Mar	ミャンマー	生産フロンティア	植物育種学	2021年10月	2024年9月	国費	Molecular genetic study on a male-specific hybrid sterility caused by <i>OICHR</i> gene found in African wild rice species, <i>Oryza longistaminata</i>
Sristi Saha	インド	生産フロンティア	ピークルロボティクス	2021年10月	2024年9月	国費	Development of machine vision-based autonomous navigation systems for agricultural vehicles
Li Xiao jue	中国	生産フロンティア	循環農業システム工学	2021年10月	2024年9月	私費	Development of extraction and concentration method for phenolics from tomato leaf residue using aqueous crude glycerol solution
Kang Hyejin	韓国	生命フロンティア	分子酵素学	2021年10月	2024年9月	国費	Structural and functional studies of novel $\alpha$ -L-glucosidase from <i>Cecembia lonarensis</i>
Chintagavongse Napaporn	タイ	生命フロンティア	応用食品科学	2021年10月	2024年9月	国費	Studies to reduce rancidity in ripened cheese caused by koji adjunct from <i>Aspergillus oryzae</i>
Anjar Cahyaningtyas	インドネシア	生命フロンティア	根圈制御学	2021年10月	2024年9月	国費	Significance of life-history strategies of arbuscular mycorrhizal fungi in a coastal dune ecosystem
Putcha Jyothi Priya	インド	生命フロンティア	基礎環境微生物学	2021年10月	2024年9月	国費	Application of microbial consortium and recombinant microorganisms in polyethylene degradation
NURROHMAN REZA KUSUMA	インドネシア	環境フロンティア	生態環境物理学	2021年10月	2024年9月	国費	Future projection on Siberian wildfire and its aerosol emissions by the improved fire module of Spatially Explicit Individual Based Dynamic Global Vegetation Model

Zhou Zhiduo	中国	環境フロンティア	土壤保全学	2021年10月	2024年9月	私費	Effect of inter-tillage weeding on rice yield and growth, and nutrient dynamics in paddy field without fertilizers and agrochemicals
Chey Vanna	カンボジア	環境フロンティア	農業土木学	2021年10月	2024年9月	国費	Study on assessment of water resources in agricultural watershed in northwestern Cambodia facing climate and land use changes
Hu Rui	中国	環境フロンティア	生態環境物理学	2021年10月	2024年9月	国費	Variations in soil fluxes of methane and carbon dioxide in an immature deciduous forest
SHIN YUNSIK	韓国	生産フロンティア	循環農業システム工学	2022年4月	2025年3月	私費	Effect of adding biochar to suppress ammonia emission during livestock manure composting process
Zhang Wen	中国	生命フロンティア	生態化学生物学	2022年4月	2025年3月	私費	Introducing stable isotopes into small molecule to elucidate functional analysis of biologically active compounds
AMANOR Ishmael Nartey	ガーナ	生産フロンティア	ビーグルロボティクス	2022年10月	2025年9月	国費	Development of a soil compaction management system: Using hyperspectral-based soil properties sensing
Md. Imdadul Hoque	バングラデシュ	生産フロンティア	植物育種学	2022年10月	2025年9月	私費	Identification of the gene for thermosensitivity associated with heading in Hokkaido rice varieties
YU Yue	中国	生産フロンティア	ビーグルロボティクス	2022年10月	2025年9月	私費	Research on a digital twin system on farm work utilizing agricultural machinery
Wang Shasha	中国	生産フロンティア	植物育種学	2021年10月	2025年9月	私費	Novel inactivation mechanisms of transposon uncovered by the <i>Old</i> and <i>New Stabiliser</i> loci in Tam3 system of <i>Antirrhinum</i>
GHOS Sozib	バングラデシュ	生産フロンティア	植物病原学	2022年10月	2025年9月	国費	Study on cucumber mosaic virus resistance conferred by an in-frame deletion in genome-edited tomato <i>eIF4E1</i>
ISLAM MD SAMIUL	バングラデシュ	生命フロンティア	基礎環境微生物学	2022年10月	2025年9月	国費	Characterization of a novel soil ultramicrobacterium from the rarely cultured <i>Verrucomicrobacteria</i> phylum
Vera Fitriya Ersalena	インドネシア	生命フロンティア	生物有機化学	2022年10月	2025年9月	国費	Confirmation of the presence of jasmonoyl-L-isoleucine in Mosses and elucidation of biotoxins upon <i>Marchantia polymorpha</i> from the infectious fungi
Nowshin Farjana	バングラデシュ	生命フロンティア	基礎環境微生物学	2022年10月	2025年9月	私費	Study on the Biosynthesis of the Luminous Substrate in the Firefly Squid <i>Watasenia scintillans</i>

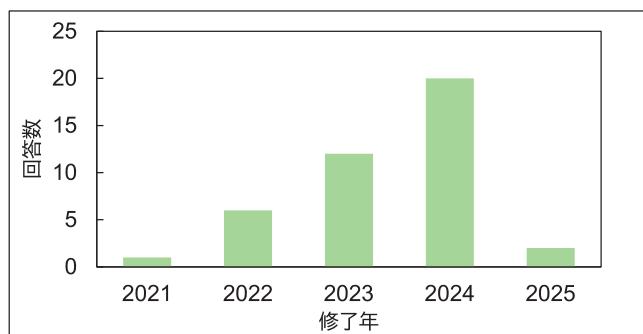
資料 7 修了者および在学生を対象としたアンケート調査結果

A. あなたの基本情報を教えてください

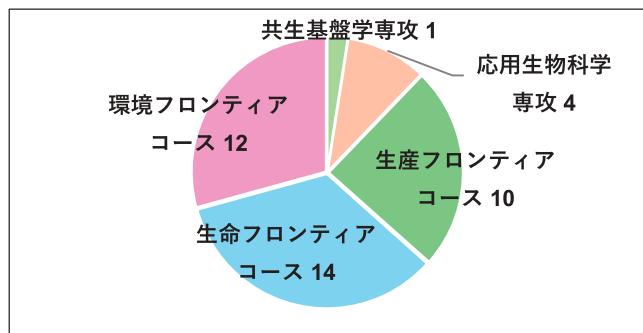
1. 氏名(省略)
2. 修了生か在学生か(回答数 41)



3. 修了年(在学生の場合は入学年)



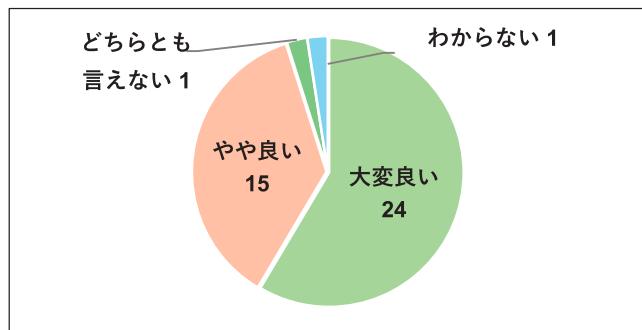
4. 専攻名(回答数 41)



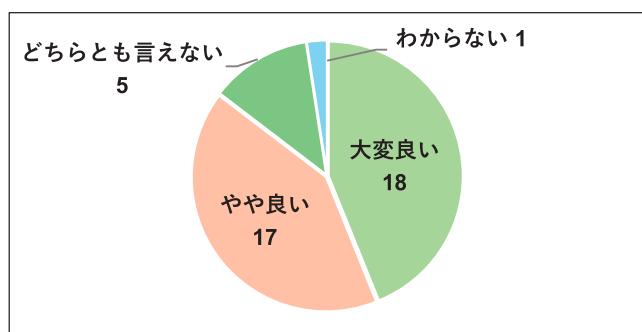
5. 指導教員名(省略)

B. 北海道大学の評価についてお聞かせください。

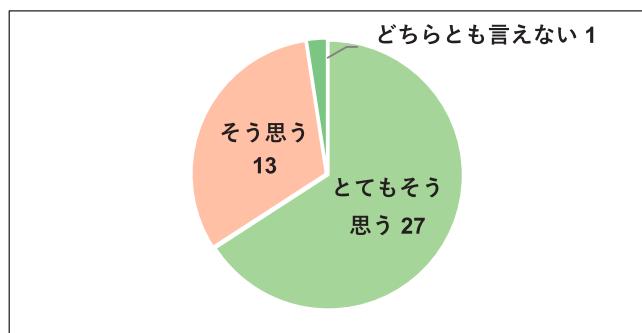
1. 現在の立場から北海道大学(以下 北大)に対して持っている印象(回答数 41)



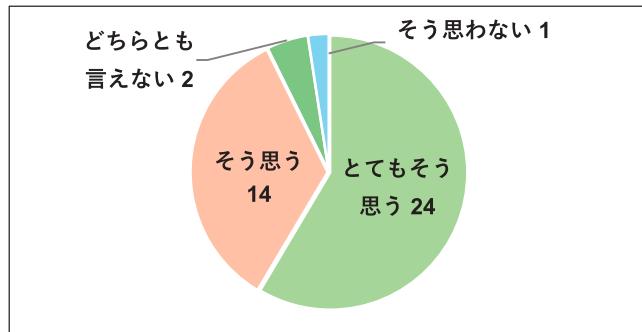
2. 現在の立場からあなたの専攻に対して持っている印象(回答数 41)



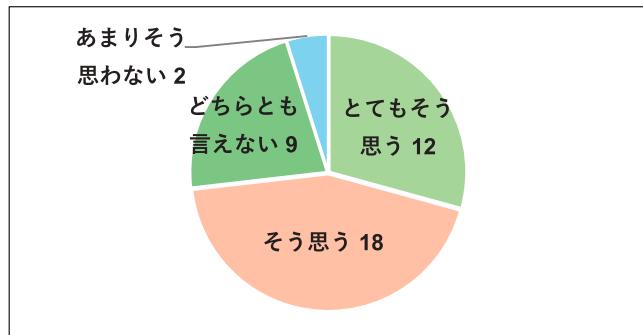
3. 指導教員の研究・論文指導は熱心だった(回答数 41)



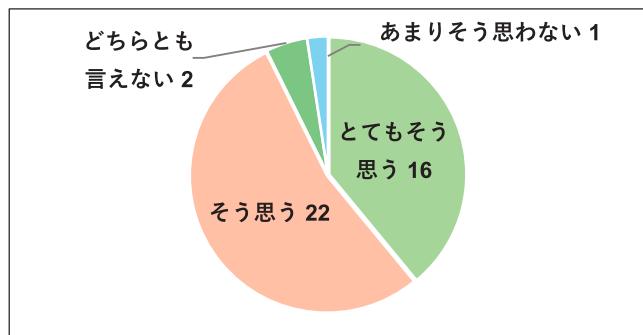
4. 大学生活における指導教員のサポートは十分だった(回答数 41)



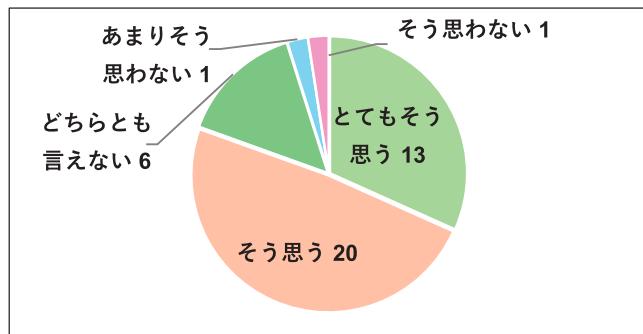
5. 大学院の授業内容は良かった(回答数 41)



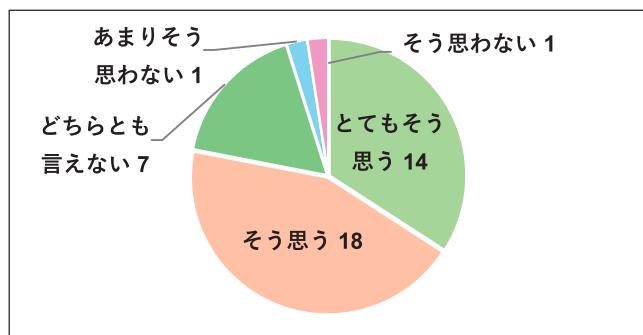
6. 実験・研究設備は良かった(回答数 41)



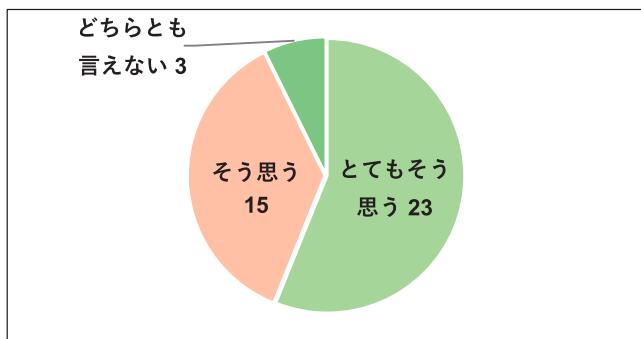
7. 生活面でのサポート(奨学金・宿舎等)は十分だった(回答数 41)



8. 日本語教育は十分だった(回答数 41)



9. 事務職員のサポートは良かった(回答数 41)



10. 入学時に期待していたことは何ですか。

- Degrees and personal growth  
(学位と個人の成長。)
- I expected to gain in-depth knowledge of my field of expertise and acquire the knowledge and skills necessary to become a fully-fledged researcher.  
(専門分野における深い知識を得るとともに、本格的な研究者となるために必要な知識と技能を習得することを期待していました。)
- Get international and publishable works to enhance IF of Hokkaido university and both myself  
(国際的かつ出版可能な成果を得て、北海道大学および自身のインパクトファクターを高める)
- Nice environment for research  
(研究に適した環境。)
- When I entered university, I expected to gain new experiences—meeting diverse people, exploring different fields of study, and growing both academically and personally.  
(大学に入学した時、私は新たな経験を得られると期待していた——多様な人々と出会い、様々な学問分野を探求し、学問的にも個人的にも成長できると。)
- A highly maintained and well established labs and research activities  
(高度に維持管理され、確立された実験施設と研究活動。)
- Good experiment environment, enthusiastic guidance  
(優れた実験環境、熱心な指導。)
- Acquired specific expertise in a particular field (Environmental science: Terrestrial Ecosystem Modeling) and published in reputable journals.  
(特定の分野 (環境科学 : 陸域生態系モデリング)において専門知識を習得し、権威ある学術誌に論文を発表する。)
- Better lab exposure  
(より良い実験室での経験)
- Good research facility, Great supervision for my research, Meet new people, Knowledge  
(優れた研究施設、研究に対する素晴らしい指導、新しい人との出会い、知識。)
- I expect good opportunities to improve my skills and visit other institutions as well.  
(スキルを向上させる良い機会が得られることと、他の機関を訪問できることにも期待した。)
- Adequate research facilities and supportive academic environment  
(十分な研究施設と支援的な学術環境。)
- I expect a good laboratory facilities, with easy access on equipment that needed for my research. I also expect good lectures, that can boost my knowledge better in the field I study for Self development, a lot of publication  
(研究に必要な機器が容易に利用可能な環境とともに優れた実験施設を期待していた。また、自己研鑽のため、専門分野における知識を深められる質の高い講義も期待していた。さらに、多くの出版物を通じて学びを深めたいと考えていた。)
- Improvement of knowledge, skills, and connection for future's career path  
(将来のキャリアパスに向けた知識・スキル・人脈の向上。)

- To learn from experts.  
(専門家から学ぶ。)
- I expected to gain not only academic knowledge but also practical skills, and to broaden my perspectives through diverse experiences.  
(学問的な知識だけでなく実践的なスキルも身につけ、多様な経験を通じて視野を広げられることを期待していた。)
- When I entered university, I expected to do real research, not just read about it. I imagined having the freedom to choose my own questions, learn by doing, and connect lectures to hands-on work. I hoped to meet a supportive supervisor and be in an environment where ideas were welcomed, curiosity was encouraged, and I could contribute something meaningful to science.  
(大学に入学した時、私は研究について読むだけでなく、実際に研究を行うことを期待していました。自分で研究課題を選び、実践を通じて学び、講義と実践を結びつける自由があることを想像していました。支援的な指導教官に出会い、アイデアが歓迎され、好奇心が奨励され、科学に何か意味のある貢献ができる環境にいることを望んでいました。)
- Learn professional knowledge, get in touch with the forefront of industry research, understand industry information and successfully enter the enterprise.  
(専門知識を学び、業界研究の最先端に触れ、業界情報を理解し、企業への就職を成功させる。)
- Expertised educations for academic activity  
(学術活動のための専門教育。)
- I expected to become more independent and confident, and to gain a new perspective on the world.  
(より自立し自信を持つようになり、世界に対する新たな視点を得られるだろうと期待していた。)
- I expected to enhance my academic knowledge, build valuable professional connections, make meaningful friendships, and experience living in an international environment.  
(学術的な知識を深め、貴重な専門的な人脈を築き、有意義な友情を育み、国際的な環境での生活を体験することを期待していた。)
- I expected to gain experience living in Hokkaido, which is famous for its snow. I want to learn about agriculture so that I can work in the food research field in the future. I also hope to build a strong network that can serve as a foundation for my career.  
(雪で有名な北海道での生活を通じて経験を積むことを期待していた。将来、食品研究分野で働くために農業について学びたいと考えていた。また、キャリアの基盤となる強固なネットワークを構築したいと考えていた。)
- When I entered the Graduate School of Agriculture at Hokkaido University, I expected to deepen my academic understanding and technical expertise in the field of water resources management. I hoped to gain not only theoretical knowledge but also practical skills that would allow me to contribute to solving real-world issues related to sustainable water use and environmental conservation. I was also looking forward to engaging with experienced professors, conducting research in a supportive academic environment, and collaborating with peers from diverse backgrounds. Additionally, I expected to broaden my global perspective and grow both professionally and personally through my time in Japan.  
(北海道大学大学院農学院に入学した際、水資源管理分野における学術的理解と技術的専門性を深めたと考えていた。理論的な知識だけでなく、持続可能な水利用と環境保全に関する現実の課題解決に貢献できる実践的なスキルも身につけたいと願っていた。経験豊富な教授陣との交流、支援的な学術環境での研究活動、多様な背景を持つ仲間との共同研究にも期待を寄せていた。さらに、日本での生活を通じてグローバルな視野を広げ、専門的・人間的に成長できることも期待していた。)
- Better Education & Knowledge, Personal growth  
(より良い教育と知識、個人の成長。)
- I was expecting to learn more about my field of interest.  
(自分の専門分野についてもっと学ぶことを期待していた。)
- I will be able to adapt with the learning process in Faculty of Agriculture especially in my laboratory.  
(農学部における学習プロセス、特に所属研究室での活動に適応できる。)
- I initially thought that the English Lectures Course would be very helpful for my research, but it turned out differently what I had expected.

(当初、英語講義コースは私の研究に非常に役立つだろうと考えていましたが、結果は予想とは異なるものとなつた。)

- Do research related to my interest  
(自分の興味に関連する研究を行う。)
- Engage in high quality research works  
(質の高い研究活動に取り組む。)
- International environment, advance facilities, and up to date lecture discussing current issues.  
(国際的な環境、先進的な施設、そして最新の課題について議論する講義。)
- Japanese environment to study, socialize, and expand networking  
(学習、交流、ネットワーク拡大のための日本環境。)
- Experience the academic research atmosphere in Japan and obtain a master's degree.  
(日本の学術研究の雰囲気を体験し、修士号を取得する。)

#### 11. その期待はかなえられましたか。

- degree, no; personal growth, yes.  
(学位はいいえ、個人の成長ははい。)
- I feel so.
- Not yet
- Yes, they were
- Yes
- Yes
- Yes it's achieved.
- Yes!
- Yes it is almost achieved
- yes
- Yes!
- Mostly achieved
- Everything is achieved perfectly
- Able to learn on time's management, still trying to achieve publication step by step  
(時間管理について学べるようになりつつあるが、まだ段階的に出版を達成しようと努力している)
- Yes, I've gained a lot of experiences here!
- Yes
- Yes
- It's still in progress. I'm starting to get more hands-on research experience and building independence, and I've met supportive people, but I'm still working toward the environment and opportunities I imagined at the beginning  
(まだ進行中である。実践的な研究経験を積み、自立性を高めつつあり、支援してくれる人々にも出会いましたが、当初思い描いていた環境や機会に向けて、今も努力を続けている。)
- Due to funding constraints, I couldn't implement cutting-edge biological or chemical technologies. However, I could try cutting-edge technologies from three to five years ago after understanding the underlying principles. I didn't have much guidance regarding industry knowledge and current status, so I had to gather information on my own, which was quite confusing. This also increased the risk of unemployment upon graduation.  
(資金面の制約により、最先端の生物学や化学技術を導入することはできなかった。ただし、基礎原理を理解した上で、3~5年前の先端技術なら試すことは可能だった。業界知識や現状に関する指導がほとんどなかったため、自ら情報を収集する必要があり、非常に混乱した。これにより卒業後の失業リスクも高まつた。)
- yes
- Yes
- yes
- Yes, I am experiencing the differences of the four seasons, discovering how beautiful each one is and what foods are best to eat in each season. I also joined a homestay program with a farming family, where I planted some fruits and vegetables and learned how challenging and tiring it can be to be a farmer. In addition, I have made many

friends—not only Japanese students but also fellow Indonesians, whom I consider as close as family, as well as international friends.

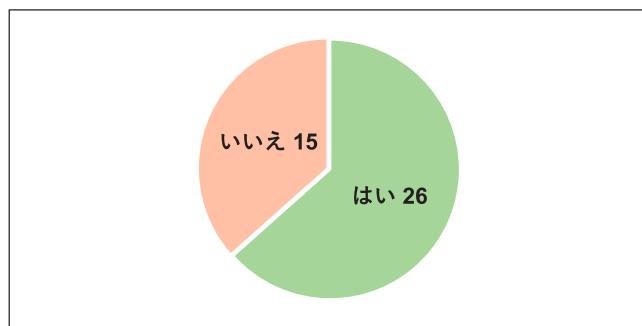
(四季の移ろいを実感し、それぞれの季節の美しさと旬の食材の素晴らしさを発見した。農家のホームステイプログラムにも参加し、果物や野菜の栽培を体験した。農家の仕事の大変さと疲労を身をもって学んだ。さらに、多くの友人にも恵まれた。日本人学生だけでなく、家族同然のインドネシア人仲間や、様々な国からの国際的な友人たちである。)

- Yes, many of my expectations were achieved. Through the program, I gained solid academic and practical knowledge in water resources management, which has been very valuable in my current work. I had the opportunity to conduct research under the guidance of supportive professors, which enriched my perspective and communication skills. Studying in Japan also allowed me to experience a new culture and professional environment, which helped me grow both personally and academically. While there were challenges, especially adapting to a new country and academic system, overall, my time at Hokkaido University was a rewarding and transformative experience.

(多くの期待が実現した。このプログラムを通じて、水資源管理に関する確かな学術的・実践的知識を習得し、現在の仕事において非常に役立っている。支援的な教授陣の指導のもと研究を行う機会を得たことで、視野とコミュニケーション能力が豊かになった。日本での留学は新たな文化と専門的環境を体験する機会でもあり、個人的にも学術的にも成長を促すものだった。新しい国や教育制度への適応など課題はあったが、北海道大学での時間は全体として実り多く、私を変容させる経験となった。)

- Yes
- So far, it is going well.  
(今のところ順調だ)
- I think so.
- Yes
- Still up to some extent  
(ある程度)
- Partially. There are not much lecture in my frontier is conducted in English so I have to take intergraduate class. The compulsory class is conducted online make us miss the chance to interact directly with the lecturers.  
(部分的に。私の専攻分野では英語で行われる講義があまりないため、大学院レベルの授業(intergraduate class)を受講する必要があった。必修科目はオンラインで行われるため、講師と直接交流する機会を逃してしまう。)
- Yes

#### 12. 在学中に教員や他の学生とのネットワークはできましたか(回答数 41)



#### 13. (12で「はい」と回答した場合)どのようなネットワークですか。

- Connections with classmates and senior students at other graduate schools  
(他の大学院のクラスメートや先輩学生とのつながり。)
- I was able to have discussions with various instructors, including my supervisor, at conferences and events.  
(学会やイベントで、指導教員を含む様々な指導者と議論することができた。)
- My network was primarily academic, built through lab work.  
(私のネットワークは主に学術的なもので、研究所の仕事を介して築かれた。)

- Research collaboration  
(研究協力。)
- Mentorship with faculty members, networking through peers with a few other doctoral fellows  
(教員との指導関係、他の数人の博士課程フェローとの仲間を通じた交流)
- Email and line  
(E メールと LINE。)
- Research and social life network  
(研究と社会生活ネットワーク。)
- supervisor-supervisee relationship  
(指導者と指導を受ける者の関係。)
- Experimental and life support from others through my supervisor suggestion.  
(指導教員の提案による、他者からの実験および生活支援。)
- I built good relationships with sensei and lab members during my time at university.  
(大学時代には、教授や研究室メンバーとの間に良好な関係を築いた。)
- academic network regardless of domestic or overseas  
(国内外を問わず学術ネットワーク。)
- Research collaboration or mentorship relationships.  
(研究協力や指導関係)
- I developed academic networks through research projects, seminars, and class
- It is a professional network, but we can also talk casually, like friends. I can talk without hesitation and share stories about our weekends, and my professor can give me valuable advice and support when I encounter problems in my research.  
(これはプロフェッショナルなネットワークですが、友達のように気軽に話すこともできました。私はためらうことなく週末の話を共有でき、研究で問題に直面した際には教授から貴重な助言とサポートを得られました。)
- Yes, I was able to establish valuable networks with both instructors and students during my time at Hokkaido University. These included academic networks through my research lab, seminars, and thesis guidance sessions, where I built strong relationships with my professors and research supervisors. I also developed peer networks with fellow international and Japanese students, especially those in the same research field or English program. These networks were both academic and personal, providing mutual support in research, daily life, and cultural exchange.  
(北海道大学在学中、教員と学生の双方との貴重なネットワークを構築することができた。これには研究室、セミナー、論文指導を通じた学術的ネットワークが含まれ、教授陣や研究指導教員との強固な関係を築いた。また、特に同じ研究分野や英語プログラムに所属する留学生や日本人学生との仲間としてのネットワークも形成し。これらのネットワークは学術的かつ個人的なものであり、研究活動、日常生活、文化交流において相互支援を提供し合った。)
- Academic networks  
(学術ネットワーク。)
- Visiting professor from other institution and alumni.  
(他機関からの客員教授および卒業生。)
- one of the examples is my instructor introduced me to HU alumna from my own country.  
(例えば、私の指導教官が私の母国出身の HU 卒業生を紹介してくれた。)
- I've got friendship, not only colleague. They kindly teach me a lot of things to adapt faster in laboratory. My supervisor also really kind and kindly teach and encourage me to always never give up. Give me appreciation even though research sometimes not goes as well as we expected. I grateful for their kindness  
(私は同僚以上の友情を得た。皆が親切に多くのことを教えてくれ、研究室に早く適応できるようサポートしてくれた。指導教員も本当に親切で、常に諦めないよう励まし、丁寧に指導してくれた。研究が思うように進まない時でも、評価してくれた。その優しさに心から感謝している。)
- I make friends with my labmates and classmate and exchange contact  
(研究室仲間やクラスメートと友達になり、連絡を取り合う。)
- Everyone is very concerned about me and helps each other.  
(皆は私をとても気にかけ、助け合っている。)

14. 在学中に形成したネットワークを現在も活用していますか(回答数 41)



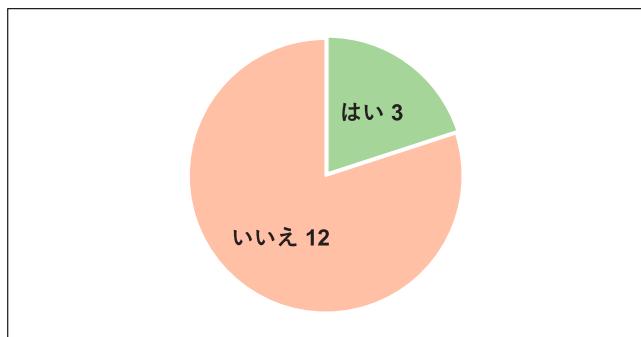
15. (14で「はい」と回答した場合)現在はどのような交流がありますか。

- I utilize the relationships I have established in my research works.  
(研究活動において築いた関係を活用している。)
- Mentor-mentee relationships  
(メンターとメンティの関係。)
- with supervisor  
(指導教員と)
- Research collaboration, and Laboratory super computer access  
(研究協力, そして研究所のスーパーコンピューターへのアクセス。)
- Mentoring from my supervisors and co-supervisor. Peer support for knowledge sharing and job opportunities  
(上司と共同指導者からの指導。知識共有と仕事の機会に関する同僚同士の支援。)
- email and line
- Discussion group and Japanese language club  
(ディスカッショングループと日本語クラブ。)
- I still had contact with not only sensei but also lab members.  
(先生だけでなく, 研究室のメンバーとも連絡を取っている。)
- co-research and discussion about academic contents  
(学術的内容に関する共同研究と議論。)
- Research collaboration or mentorship relationships.  
(研究協力や指導関係。)
- I have continued to a PhD, these networks remain important for collaboration, sharing ideas, and advancing my research  
(博士課程に進んだが, これらのネットワークは共同研究やアイデアの共有, 研究の進展において依然として重要だ。)
- My professor can give me valuable advice and support when I encounter problems in my research.  
(研究で問題に直面した時, 教授は貴重な助言と支援を与えてくれる。)
- Yes, I am still in touch with several people from the networks I built at Hokkaido University. I continue to communicate with my former professors, especially when I need academic advice. I also maintain connections with my classmates and lab mates through email or social networks.  
(北海道大学で築いたネットワークの何人かとは今も連絡を取り合っている。特に学術的な助言が必要な時には, かつての教授陣と継続的に交流している。また, 同級生や研究室仲間とはメールやソーシャルネットワークを通じてつながりを維持している。)
- Informal relationship  
(気軽な関係)
- I am in a group Indonesian HU alumni and keep in touch with the one whom my instructor introduced at that time.  
(インドネシアの北大卒業生のグループに所属しており, 当時の指導教員が紹介してくれた人物とは今も連絡を取り合っている。)
- Friend and teacher

(友達と先生。)

- Help each other  
(互いに助け合っている)

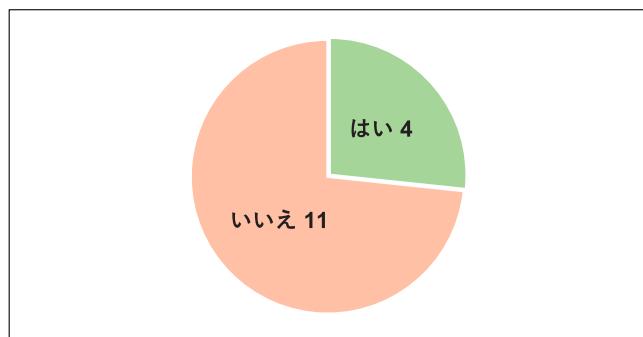
16. 修了後に北大を訪ねたことがありますか(回答数 15)



17. (16 で「はい」と回答した場合)何回訪ねたことがありますか、また、その目的はなんですか

- I am still enrolled at HU.
- 1
- 4? or something

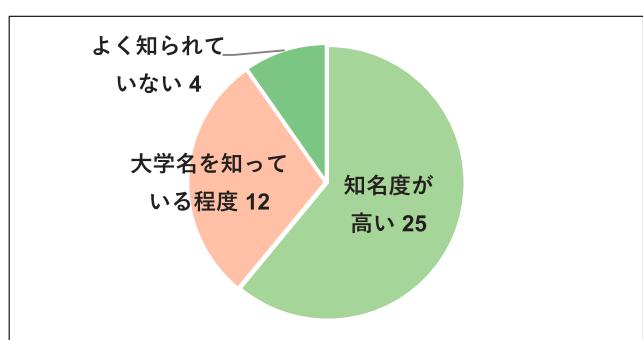
18. 修了後に北大のホームページ以外で北大に関する情報に接したことはありますか(回答数 15)



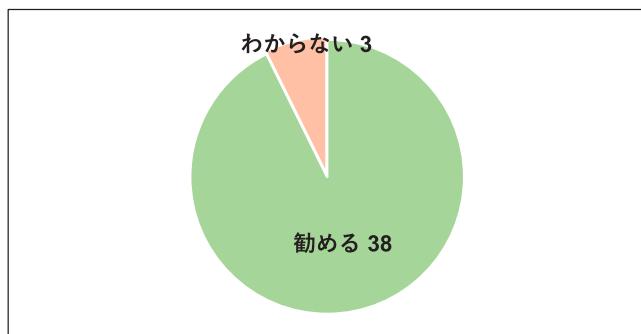
19. (18 で「はい」と回答した場合)それはどのような場でしたか。

- Facebook
- University ranking, career opportunities, events and seminars through Facebook  
(大学ランキング、就職機会、イベントやセミナーを Facebook で。)
- The lab situation

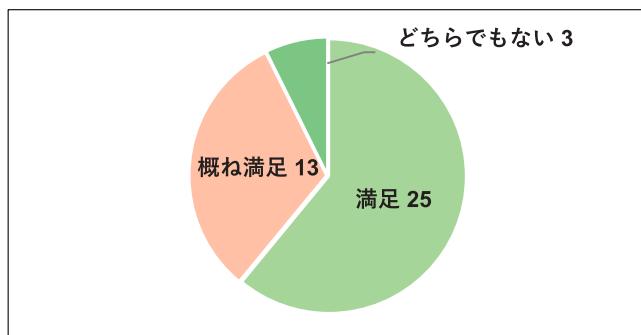
20. あなたの周辺で北大の知名度はどのようですか(回答数 41)



21. 北大への進学相談を受けた場合、あなたは北大を勧めますか(回答数 41)

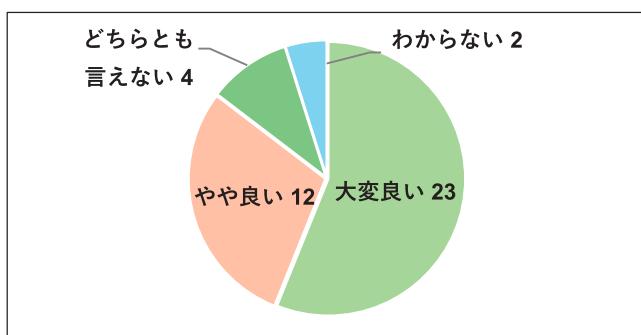


22. 大学生活の満足度はどのくらいですか(回答数 41)



C. 「生物圏に立脚した生存基盤科学のための英語による特別プログラム / 包括的先進農学フロンティア育成のための国際教育プログラム」についての評価をお聞かせください。

1. 「生物圏に立脚した生存基盤科学のための英語による特別プログラム / 包括的先進農学フロンティア育成のための国際教育プログラム」のコンセプトに対してどのような印象をお持ちですか(回答数 41)



2. 1に対する回答の理由を教えてください。

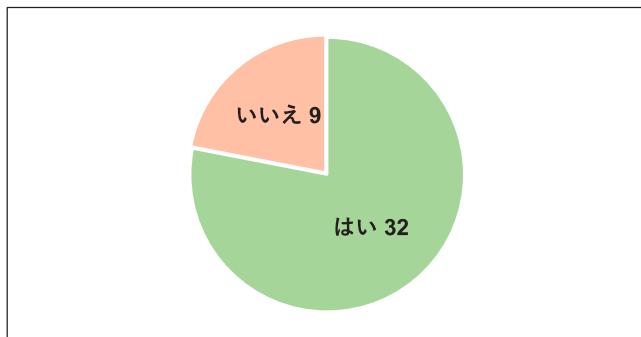
- I am satisfied. I would be happy if international students could interact more with each other.  
(満足している。留学生同士がもっと交流できれば嬉しい。)
- It seems to be a comprehensive course targeting sustainability through a wide range of research  
(幅広い研究を通じて持続可能性を目指す包括的なコースのようだ。)
- A modern program combining science and technology for sustainable agricultural development.  
(持続可能な農業開発のための科学技術と融合した現代的なプログラム。)
- We can experience a high quality of education system as well as getting a scholarship.

(高品質な教育システムを体験できるだけでなく、奨学金も受け取れる。)

- The program is international  
(プログラムは国際的である。)
- Because it has touched several subjects related to agriculture  
(農業に関連するいくつかの主題に触れているから。)
- During my master's program, I was in the Biosphere Sustainability program. I studied natural product chemistry, but I had to select courses that were not relevant to my study area. For example, soil science, atmospheric science, soil management, and mitigation. And speakers talked about their research. Some of them talked completely in Japanese.  
(修士課程では、生物圏持続可能性プログラムに所属していた。天然物化学を専攻していたが、専門分野とは関係ない科目も選択しなければならなかつた。例えば土壤科学、大気科学、土壤管理、緩和策といった科目だ。また研究発表会では、講師たちが各自の研究について話した。中には完全に日本語で話す人もいた。)
- Very confusing because my field has nothing to do with agriculture. It is more related to environment.  
(非常に混乱する。なぜなら、私の専門分野は農業とは全く関係がないからだ。むしろ環境に関連している。)
- It gives opportunity to get agricultural education in japan with english for non-japanese people  
(外国人に日本で英語による農業教育を受ける機会を与える)
- The selective subjects are limited.  
(選択科目が限られている。)
- It gives a great opportunity to learn and contribute to sustainability with a global perspective  
(グローバルな視点で持続可能性について学び、貢献する絶好の機会となる)
- This program is excellent and greatly benefits international students who wish to experience working or studying in an international environment in Japan. However, I have noticed that not all professors are open to this English-based program, which can make international students hesitant to approach them. It would be better if the English program were further developed so that both professors and students could feel more comfortable interacting with each other.  
(このプログラムは優れており、日本で国際的な環境での仕事や勉強を経験したい留学生にとって非常に有益だ。しかし、全ての教授がこの英語ベースのプログラムに前向きではないことに気づいた。そのため留学生は教授に近づきにくく感じている。英語プログラムがさらに発展すれば、教授も学生も互いに交流しやすくなるだろう。)
- No language barrier for foreigners and intensive research works  
(外国人にとって言語の壁がなく、集中的な研究作業が可能だ)
- Global phenomena affecting the global society.  
(地球社会に影響を与える世界的な現象。)
- It has diverse and perspective frontiers.  
(多様な展望を持つフロンティアだ。)
- A program taught fully in English, they combine advanced coursework with hands-on research, supported by experienced supervisors and a collaborative international environment. With strong links to global challenges, scholarship opportunities, and clear career pathways in academia, government, and industry, these programs are designed to prepare graduates to lead in sustainable science and policy.  
(英語で完全に実施されるプログラムであり、高度な授業と実践的な研究を組み合わせている。経験豊富な指導者と国際的な共同研究環境によって支えられている。地球規模の課題との強い関連性、奨学金制度、学術界・政府・産業界における明確なキャリアパスを備え、持続可能な科学と政策の分野でリーダーとなる人材を育成することを目的としている。)
- I understood it more as a choice between the Japanese program and the English program, and I did not receive any information guidance during the master's program.  
(私はそれを日本語プログラムと英語プログラムの選択として理解していた。そして修士課程では情報ガイダンスを受けなかつた。)
- English programs  
(英語プログラム)

- I have learned a lot during my time in this program. Everyone, including the staff, students, and instructors, has been very kind to me.  
(このプログラムに参加している間に、私は多くのことを学んだ。スタッフ、学生、講師を含む皆が、私にとても親切してくれた。)
- In my case, I am fortunate to be in a good laboratory with a supportive professor and lab members. Perhaps my ability to speak Japanese also helps me communicate well. However, I have heard from students in other laboratories that they sometimes face difficulties due to a lack of support, which can affect their mental well-being. I truly admire their strength in overcoming such challenges, but it must have been very hard for them. Because of this, my impression of the faculty is somewhat mixed, and I hope the university will consider taking steps to provide better support for all students.  
(私の場合、協力的な教授と研究室のメンバーがいる良い研究室に所属できて幸運だ。日本語が話せることも、円滑なコミュニケーションに役立っているかもしれない。しかし、他の研究室の学生からは、支援不足による困難に直面し、それが精神的な健康に影響を与えることがあると聞いた。そうした困難を乗り越える彼らの強さは本当に尊敬するが、さぞかし大変だったに違いない。このため、教員に対する私の印象はやや複雑であり、大学が全ての学生に対してより良い支援を提供する措置を検討することを望む。)
- The program allowed students like me, from non-Japanese-speaking countries, to engage in high-level academic work, while also promoting cross-cultural understanding and international collaboration.  
(このプログラムは、私のような日本語を話さない国からの学生が、高度な学術研究に取り組むことを可能にした。同時に異文化理解と国際的な協力を促進した。)
- The curriculum was well-structured, covering both theoretical and practical aspects, and the research environment was supportive and interdisciplinary. In addition, the program helped build global perspectives among students by bringing together people from diverse academic and cultural backgrounds. Overall, I believe the program plays a vital role in developing future researchers and professionals who can address global sustainability challenges.  
(カリキュラムは理論と実践の両面を網羅した優れた構成であり、研究環境は支援的で学際的であった。さらに、多様な学術的・文化的背景を持つ人々を集めることで、学生のグローバルな視野の育成に寄与した。全体として、このプログラムは地球規模の持続可能性課題に取り組める将来の研究者や専門家を育成する上で、極めて重要な役割を果たしていると思う。)
- Opportunities
- It lets us have the first hand experience of the ongoing research activities. This approach is very inclusive for the students from international background. Overall, its a great learning opportunity.  
(現在の研究活動を直接体験できる。この手法は国際的な背景を持つ学生にとって非常に包括的だ。全体として、これは素晴らしい学習の機会である。)
- As an international student who struggled with Japanese languages, Special Post-Graduate Program is a right choice for pursuing study in HU. Surrounded by very helpful academic and non-academic staff in faculty means huge. All that makes campus life much easier and happier.  
(日本語に苦労した留学生にとって、特別大学院プログラムはHUで学ぶのに最適な選択だ。学部内非常に親切な教職員に囲まれることは大きな意味を持つ。これら全てがキャンパスライフをずっと楽で楽しいものにしてくれる。)
- I like how it specialize the awardee as problem solver for vast issue around the world regarding agriculture  
(農業に関する世界中の広範な問題の解決者として受賞者を特化させる点が気に入っている)
- Overall my experience in my lab is good. The teachers and students really help me to adjust and in my everyday life. But, there are still limited class that use English in the environmental science frontier.  
(総合的に見て、研究室での経験は良いものだ。教員や学生たちは、私が環境に科学の分野で適応し、日常生活を送る上で本当に助けてくれる。しかし、環境科学の分野で英語を使う授業はまだ限られている。)
- An English program in agriculture which can be applied by foreigner students.  
(外国人留学生が応募できる農業分野の英語プログラム。)

3. 一般コースではなく特別コースに入学したメリットはありましたか(回答数 41)



4. (3 で「はい」と回答した場合)どのようなメリットがありましたか

- I was able to summarize my research in English.  
(自分の研究を英語でまとめることができた。)
- The English course helps with communication problems and may encourage researcher indirectly to speak both English and Japanese.  
(英語コースはコミュニケーションの問題を解決するのに役立ち、研究者が英語と日本語の両方を話すことを間接的に促すかもしれない。)
- We can improve both experiment skills and language skills at the same time.  
(実験技術と言語能力を同時に向上させることができる。)
- Administrative processes and communication are conducted in English.  
(事務手続きと連絡は英語で行われる。)
- Specific focus on a certain subjects in detail is the advantage of this program  
(特定の科目について詳細に焦点を当てるのが、このプログラムの利点である。)
- Courses are held in English  
(英語で実施されるコースである。)
- We don't have to pass Japanese test before enroll  
(入学前に日本語試験を受ける必要がない。)
- Gain skills and knowledge required for personal development and capacity building  
(個人の成長と能力開発に必要なスキルと知識を身につけられる。)
- To use English in the enrollment for those excellent students who Japanese are poor.  
(日本語が苦手な優秀な学生に対して、入学手続きで英語を使用する。)
- Enrolling in this special program offers advantages such as full English instruction, a diverse international network, smaller class sizes with closer supervision, early access to independent research, priority for scholarships like MEXT, EXEX, etc., and a curriculum designed around global issues. Providing stronger preparation for international research and career opportunities than the general course.  
(この特別プログラムへの参加には、英語による完全指導、多様な国際ネットワーク、少人数制による手厚い指導、早期の自主研究へのアクセス、文部科学省奨学金やEXEX奨学金などの優先選考、グローバル課題に焦点を当てたカリキュラムといった利点がある。一般課程よりも国際的な研究やキャリアの機会に備えるための準備が整っている。)
- The written test may be waived for the entrance examination.  
(入学試験において筆記試験が免除される場合がある。)
- We can meet students who are in the same department and can speak English.  
(同じ学科で英語が話せる学生と会うことができる。)
- This program uses English for all activities, which makes me feel really comfortable because my Japanese is not very good.  
(このプログラムでは全ての活動で英語を使う。日本語があまり得意じゃない私にとっては、これがすごく安心できた。)
- I'm glad that this program has a student committee, which organizes and celebrates many events such as welcoming

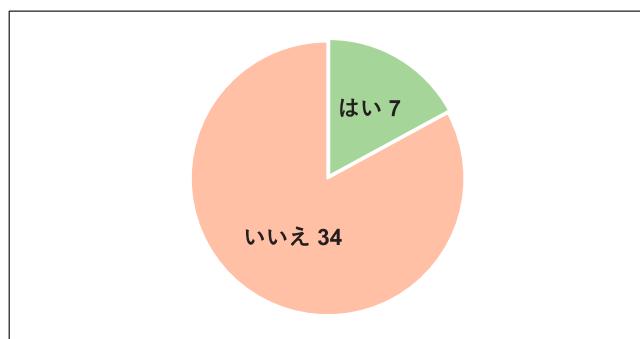
new students and celebrating graduating students. They also provide trips for international students at an affordable price. This makes some of my friends from other faculties feel a little envious, since they don't have the same opportunities in their programs

(このプログラムには学生委員会があつて、新入生歓迎会や卒業生祝賀会など、様々なイベントを企画・運営しているのが嬉しい。留学生向けの格安旅行も提供して。他の学部の友達の中には、自分のプログラムに同じ機会がないから少し羨ましがっている者もいた。)

- I think there are 3 key advantages of Special English Program, which are:
  - language accessibility
  - global perspective
  - dedicated support system for international students.

(特別英語プログラムには3つの主な利点があると思う。言語へのアクセスしやすさ、グローバルな視点、留学生向けの専任サポート制度。)
- Easy to apply  
(アプライのしやすさ。)
- It is better than the general course.  
(一般コースより良い。)
- We can get the credits by attending English Lectures.  
(英語の講義に出席すれば単位が取れる。)
- Can continue to doctoral program after master programs without have to apply for another scholarship  
(修士課程修了後、別の奨学金に申請することなく博士課程へ継続して進学できる。)
- I can use English to communicate and assignment for school work. I can interact with researchers from around the world.  
(英語でコミュニケーションを取ったり、学校の課題を行ったりできる。世界中の研究者と交流できる。)
- Courses delivered in English  
(英語で行われるコースである。)
- Using English  
(英語を使っている。)

##### 5. 特別コースに入学したデメリットはありましたか(回答数 41)



##### 6. (5で「はい」と回答した場合)どのようなデメリットがありましたか

- There might be some cultural differences to consider. However, it depends on the individual lab.  
(考慮すべき文化的な差異があるかもしれない。ただし、それは個々の研究室による。)
- The English program has fewer selection than the Japanese program  
(英語プログラムは日本語プログラムより選択肢が少ない。)
- Very confusing because my field has nothing to do with agriculture. It is more related to environment. Hence, the name of the program is not helpful in my career if I am having it outside Japan.  
(非常に混乱する。なぜなら、私の専門分野は農業とは全く関係ないからだ。むしろ環境に関連している。したがって、このプログラムの名称は、日本国外でキャリアを積む場合、全く役に立たない。)
- If students who only know English want to find a job in Japan after graduation, they will have a significant

disadvantage in daily communication and job hunting. This is also the true reflection of the people I know who are working in HU or other English programs.

(英語しか知らない学生が卒業後に日本で就職しようとしても、日常的なコミュニケーションや就職活動において大きな不利を被る。これは私が知っている、HU や他の英語プログラムで働いている人々の実態を如実に反映している。)

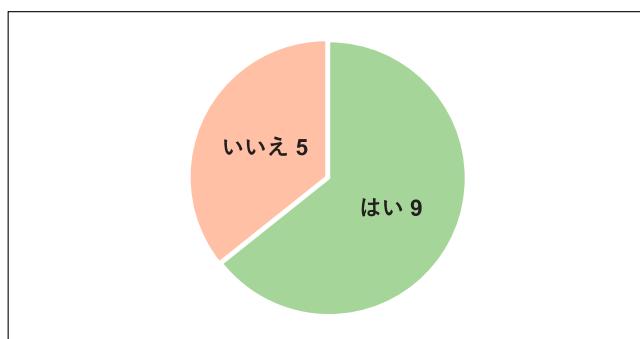
- We don't have many options to choose from lectures  
(講義から選べる選択肢は多くない)
- I feel like I can't get the same opportunities as my Japanese friends. Many of the class are in Japanese. Most of the event information is also in Japanese.  
(日本人の友達と同じ機会を得られない気がする。授業の多くは日本語で行われる。イベント情報の大半も日本語だ。)

#### D. 就職についてお聞かせください。

##### 1. 現在の職業

- Assistant professor
- Student
- Researcher
- Lecturer
- Postdoctoral Research Associate, University of Massachusetts-Amherst, USA
- Company officer
- I am still looking for a job
- Engineer
- Researcher of academic institute (National Institute of Health Sciences)
- Postdoctoral fellow
- Research and Development
- Doctoral student (D2)
- Now, I am a government official at Ministry of Water Resources and Meteorology in Cambodia (My home country).
- Governmental official

##### 2. 修了後、ずっと現在の職場で働いていますか(回答数 14)

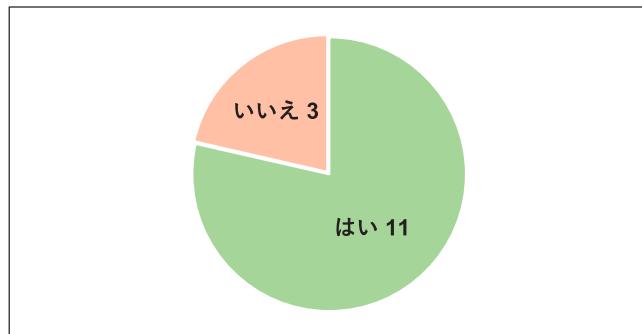


##### 3. (2 で「いいえ」と回答した場合)修了以降に従事した職業を差し支えない範囲で教えてください

- Lecturer at University of Mataram, West Nusa Tenggara, Indonesia
- Postdoctoral fellow at Kyushu University
- I am still looking for a job but yet to find one
- JSPS PD in NARO in Tsukuba

- Post Doctoral at research institute under University/Hospital
- Application engineer in an industrial gases company, project and maintenance engineer in a spices company, and new product development engineer in an automotive company

4. 北大で研究したことは現在の職業に活かされていますか(回答数 14)



5. (4 で「はい」と回答した場合)どのように活かされていますか

- I make great use of my experience in my work.  
(自分の経験を仕事で大いに活用している。)
- I'm researching the similar experiment theme in my current job.  
(現在の仕事で、同じような実験テーマについて研究している。)
- Improving research capabilities (technical use of models, applications, etc.), as well as sharpening analytical skills that are very useful for problem solving. As well as the excellent research style in the Laboratory.  
(研究能力 (モデルの技術的活用、応用など) の向上と、問題解決に非常に役立つ分析スキルの研鑽。それに加え、研究室における優れた研究スタイル。)
- I am using some of the skills I gained during my master's and PhD.  
(修士課程と博士課程で身につけたスキルの一部を活用している。)
- The research process and peer-review learning is benefit.  
(研究プロセスと相互評価による学びは有益だ。)
- Highly related contents  
(非常に関連性の高い内容。)
- Similar research direction  
(同じような研究の方向性。)
- Yes, my research at Hokkaido University has been highly effective and directly applicable to my current work. The knowledge and research skills I gained at Hokkaido University, particularly in areas such as water resource management, data analysis, and sustainable development, have helped me contribute meaningfully to national water policies and my projects. My academic training gave me a strong foundation in understanding integrated water resources management, and the use of scientific approaches for problem-solving. These have been essential in assessing water-related challenges in Cambodia, developing strategic plans, and working with both national and international partners. The ability to critically analyze data, apply technical tools, and consider sustainability in decision-making — all of which I learned during my graduate research, has proven to be especially valuable in my professional responsibilities.  
(北海道大学での研究は極めて効果的で、現在の仕事に直接活かされている。特に水資源管理、データ分析、持続可能な開発といった分野で得た知識と研究スキルは、国家の水政策や自身のプロジェクトに有意義な貢献をする上で役立っている。学術的訓練により、統合的水資源管理の理解と問題解決のための科学的アプローチの活用という強固な基盤が築かれた。これらはカンボジアにおける水関連課題の評価、戦略計画の策定、国内外のパートナーとの協働において不可欠であった。データ批判的分析、技術的ツールの適用、意思決定における持続可能性の考慮—これら全ては大学院研究で習得した能力であり、職務遂行において特に価値あるものだと証明されている。)

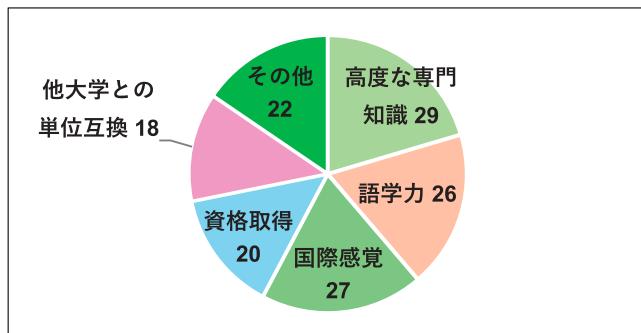
## 6. 就職の観点から北大で有効だったと感じたものは何ですか

- I was able to engage in high-quality research activities.  
(質の高い研究活動に従事することができた。)
- If I'd like to get a job in Japan, it would be effective.  
(日本で仕事を得たいなら、それは効果的である。)
- The application of supervised independent problem-solving techniques is very beneficial for early-career researchers.  
(指導付き独立問題解決技法の適用は、若手研究者にとって非常に有益である。)
- yes
- Management and inter-communication  
(管理と相互連絡)
- For now I can't answer till I find an opportunity to apply the knowledge gained.  
(今のところ、得た知識を応用する機会を見つけるまでは答えられない。)
- The attitude toward research and work, as well as the ability to handle and solve problems, and the networks with professors and peers if working still on the research fields.  
(研究や仕事に対する姿勢、問題に対処し解決する能力、そして研究分野で活動している場合、教授や同僚とのネットワークである。)
- Nothing at HU, but many at my supervisor's.  
(北大には何もないが、指導教員にはたくさんある。)
- Lab skills  
(実験技術)
- My experience from my previous job has helped me solve problems I encountered during my research, analyze my results, manage my schedule, and reach out to others for help when needed.  
(以前勤めていた職場での経験が、研究中に直面した問題の解決、結果の分析、スケジュールの管理、そして必要な時に他者に助けを求めるために役立った。)
- I think there are 3 key points which my education at Hokkaido University were highly effective and relevant to my current job.
  - technical knowledge and research skills
  - training in academic writing, data analysis, and presentation skills
  - exposure to international research standards and multidisciplinary collaboration.

(北海道大学での教育が現在の仕事に非常に効果的で関連性が高いと思う点は、主に3つある。技術的知識と研究スキル。学術的執筆、データ分析、プレゼンテーションスキルの訓練。国際的な研究基準と学際的共同研究への接触。)

## E. 北大に対して期待することについてお聞かせください。

1. 修了生あるいは在学生の立場から、これから北大の教育に期待することは何ですか(回答数 142、複数選択可)



## 2. (1で「その他」と回答した場合)それは何ですか

- Good lab exposure  
(研究室での経験。)
- Collaboration with other international universities, and funds for joining international conferences  
(他の国際的な大学との共同研究, および国際会議への参加資金。)
- Provide AI + basic computer science + data science program + entrepreneurship in english for a few times in a year so that we can join whenever possible. Currently most of these programs are available in Japanese only, and the AI program was just an one-time class.  
(年に数回, AI+基礎的なコンピュータサイエンス+データサイエンスプログラム+起業家精神を英語で提供してほしい。そうすれば都合の良い時に参加できるからだ。現在, これらのプログラムのほとんどは日本語のみであり, AIプログラムは単発の授業に過ぎなかった。)
- No options. Prefer not to answer  
(選択肢なし, 回答したくない。)
- I'm not sure how program leaders think about PhD students' future prospects, but whether they stay on campus as teachers or work in industry, international students often feel lost about their future and what industries to pursue. First, non-large Japanese companies may not be interested in PhDs or foreigners. Second, based on my experience, most master's degree career options are quite informal.- options like IT and civil service don't offer a meaningful example for PhD students. Third, may internationalization focus more on collaboration between industry and universities, so that PhD students can understand the social roles their technical expertise can be applied to? Honestly, starting from scratch during English programs, especially international students, and searching for all career information without any guidance is quite challenging in Japanese society. Of course, I understand that contemporary Japanese society may expect international students to choose their own paths after completing their PhDs, perhaps even returning to their home countries as soon as possible. I say this because, beyond the academic work, my doctoral studies let me feel alienated from Japanese society --- it means you can do your best academic life, but for career or society relationships is your own issue. While the academic affairs department, advisors, and career-guidance-center may each do their own job each other, but overall to see PhD lifestyle, I'm deeply concerned about whether a comprehensive training plan is provided for PhD students during HU.  
(プログラム責任者が博士課程学生の将来をどう考えているかは分からぬが, 学内で教職に就くにせよ産業界で働くにせよ, 留学生は往々にして将来や進路に迷いを感じる。第一に, 中小の日本企業は博士号保持者や外国人に関心を示さない場合が多い。第二に, 私の経験では修士課程修了者の進路選択肢は概して非公式だ。IT や公務員といった選択肢は博士課程学生にとって参考例とならない。第三に, 国際化は产学連携に重点を置くべきではないか。そうすれば博士課程学生は, 自身の技術的専門性が社会でどのような役割を果たせるかを理解できるだろう。率直に言って, 英語プログラムでゼロから始める事, 特に留学生が指導なしに全てのキャリア情報を模索することは, 日本社会では非常に困難だ。もちろん, 現代の日本社会が留学生に博士号取得後の進路選択を期待していること, あるいは早期の帰国さえ望んでいることは理解している。こう言うのは, 学術的な仕事を超えて, 博士課程での経験が私を日本社会から疎外感を感じさせたからだ。つまり, 学術的には最善を尽くせるが, キャリアや社会関係は自己責任だという意味だ。学務部, 指導教官, キャリアセンターはそれぞれ役割を果たしているかもしれないが, 博士課程の生活全体を見ると, 北大が博士課程学生に対して包括的な育成計画を提供しているのか, 私は深く懸念している。)
- Elimination of poor-quality teachers (teachers who do not write papers, teachers who engage in power harassment, teachers who take huge amounts of research funding but do not allow students to graduate with a PhD)  
(質の低い教師の排除 (論文を書かない教師, パワーハラスメントを行う教師, 研究資金を大量に受け取りながら学生に博士号取得を認めない教師。))

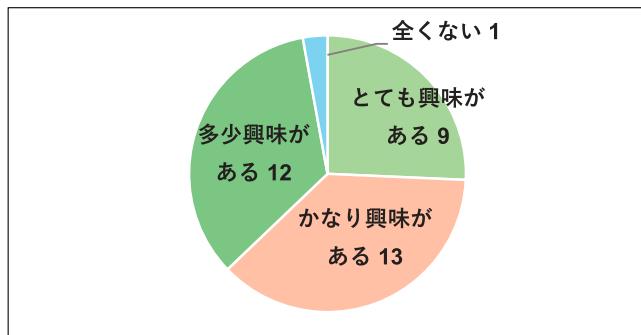
## 3. 北大(または大学院農学院)に対するご意見ご要望があればお聞かせください。

- You should hire faculty members from various universities with different areas of expertise to broaden the scope of our research. (Graduate School of Agriculture)  
(研究の幅を広げるため, 様々な大学の異なる専門分野を持つ教員を採用すべきだ。 (農学院))

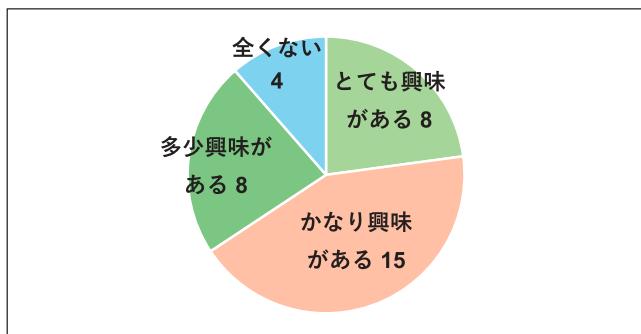
- I hope that we can establish a good cooperative relationship in research (currently, I still maintain good communication and research collaboration with my supervisor on a personal level), and I hope that in other areas such as student affairs and community service, a similar relationship can also be established between Hokkaido University and Mataram University in the near future.  
(研究面では良好な協力関係を築けることを願っている（現在も指導教官とは個人的なレベルで良好なコミュニケーションと研究協力を維持している）。また、学生支援や地域貢献といった他の分野においても、近い将来に北海道大学と Mataram 大学の間で同様の関係が構築されることを期待している。)
- I have one suggestion . May be university can add some more subjects on english medium . Sometimes for international students ;there are very less options when choosing english sources during course registration . So students have to choose any remaining courses even not related to our study field; just to fulfill the credit hours for gradation. If there are more options; then we can choose only the course we prefer to take and more beneficial for our current studies.  
(一つ提案がある。大学は英語で授業を行う科目を増やしたらどうか。留学生にとって、履修登録時に英語の科目を選ぶ選択肢が非常に少ないことがある。そのため、卒業に必要な単位を満たすためだけに、自分の専攻分野とは関係ない残りの科目を選ばざるを得ない。選択肢が増えれば、自分が取りたい科目や現在の研究に有益な科目だけを選べるようになる。)
- My request to Graduate School of Agriculture is to create an environment where violation of privacy, human rights and dignity should be adequately protected and respected by colleagues and laboratory members. Thank you.  
(農学院への要望は、プライバシーや人権、尊厳の侵害が適切に保護され、同僚や研究室メンバーによって尊重される環境を整えることである。)
- As mentioned above
- A system should be established to evaluate faculty teachers using external reviewers, assessing both their research and educational performance (the latter being most important), and dismissing those with poor performance. The decline in HU's research performance is undoubtedly due to a decline in the quality of its faculty members. (I believe my supervisor was the best in this regard.)  
(教員の評価システムを確立すべきだ。外部審査員を用いて、研究実績と教育実績（後者が最も重要）の両方を評価し、不適格な教員は解雇する。本学の研究実績の低下は、教員の質の低下に起因しているのは間違いない。（この点では、私の指導教官が最高だったと思う。）)
- More international students
- There are cases where a professor may have a toxic reputation, which can negatively affect students. I hope the university can provide opportunities for psychological evaluations or support for such professors, to prevent students from experiencing negative outcomes and to protect the reputation of HU.  
(教授が有害な評判を持つ場合があり、それが学生に悪影響を及ぼすことがある。大学がそのような教授に対して心理評価や支援の機会を提供し、学生が不利益を被るのを防ぎ、北大の評判を守ることを望む。)
- HU is not only a school to learn, it is also a home where I found so many kindhearted people, especially my supervisor who always supportive during my study. Thank you HU :)  
(北大は学ぶだけの学校じゃない。たくさんの心優しい人々に出会えた我が家でもある。特に指導教員は、研究中ずっと支えてくれた。ありがとう北大 :))
- I hope there are more face-to-face class that is conducted in English, especially in the environmental science frontier.  
(英語で行われる対面授業がもっと増えることを願っている。特に環境科学の分野ではそうだ。)
- It will be nice to open more courses/classes in English every semester.  
(学期ごとに英語の授業をもっと増やせると良いだろう。)

F. 以下の事項にどの程度興味を持てるか、お聞かせください。

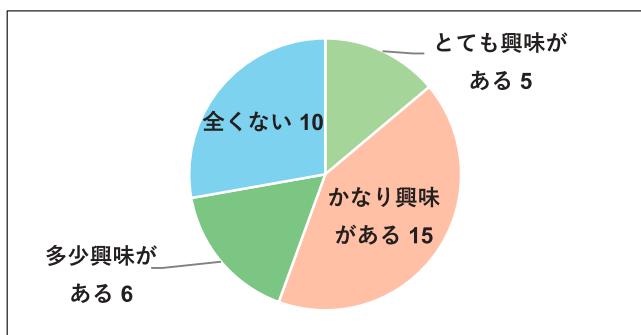
1. 本プログラムへの候補者として適当な学生・研究者を探すこと(回答数 35)



2. 自国で留学生候補者の予備審査をすること(回答数 35)



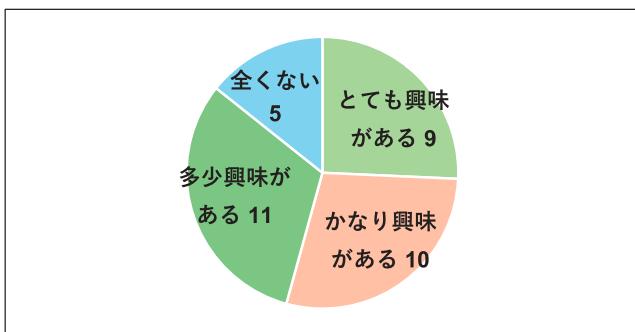
3. 学生のロールモデルとしてあなたのキャリア形成について北大で講演すること(回答数 36)



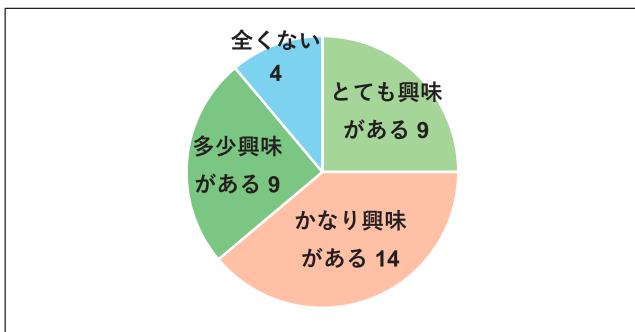
4. 本プログラムの学生に対して就職情報を提供すること(回答数 36)



5. 本プログラムの学生に対して自国での就職の手助けをすること(回答数 36)



6. 上記の事項を意欲的に遂行する“プログラムフェロー”を引き受けること(回答数 36)



7. ご自身の言葉でもっと伝えたいがあれば、ご記入ください。

- As a Japanese graduate of the English course, I apologize for not being able to answer the last questions in the affirmative. I would like to express my sincere gratitude to everyone in the English course for their tremendous support during my time at university.  
(英語コースの日本人卒業生として、最後の質問に肯定的に答えられなかつたことをお詫びする。大学在学中、英語コースの皆様から多大な支援をいただいたことに対し、心から感謝の意を表したい。)
- If there is anything I can do for Hokkaido University, I would be happy to do so.  
(北海道大学のために何かできることがあれば、喜んでお手伝いする。)
- I have not thought about all statements listed above except for the first one, because there aren't such activities provided by my other universities.  
(上記の項目は最初のものを除いて、他の大学ではそのような活動を提供していないので、考えたことはない。)
- As my current work is in a different field, my ability to provide job information or connections maybe limited. However, I am happy to help within my capacity whenever possible.  
(現在の仕事は別の分野なので、仕事の情報を提供したり人脈を紹介したりする能力には限界があるかもしれない。しかし、可能な限り、自分の能力の範囲内で喜んでお手伝いする。)

**2021年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」  
審査結果**

整理番号	D1010032
大学名	北海道大学
プログラム名	包括的先進農学フロンティア育成のための国際教育プログラム
審査結果	採択

今回の申請内容は、特別プログラムの趣旨を踏まえた内容となっており、採択となりました。なお、審査委員から下記の所見がありましたのでお知らせします。

＜審査所見＞

- 私費留学生を国費留学生の2倍獲得するという意欲的なプログラムである。既設プログラムの実績からも、その可能性は高いと考えられる。
- これまでの既設プログラムの実績及び問題点の改善に基づくプログラムであり、国際課題の解決に資する人材の育成を目標としている点と北海道大学の特色と強みを活かした取り組みであることから高く評価できる。
- 北海道が生物生産基地として重要であることは当然と考えるが、その環境を生かした教育を行うのであれば、亜熱帯や熱帯地域と言った北海道とは全く異なる自然環境の ASEAN からの留学生を教育することで、彼らの母国での貢献に繋がるのか不明。
- 農学全体に関する教育が主となっているが、研究分野がより細分化されエキスパートを育てるようなことも重要となってきていることを考えると学生同士の研究分野をまたいだ交流もあると良い。日本人学生との共修について、これまでのプログラム参加者数が少なく、その実態が見えない。

本採択プログラムの優先配置枠数等は下記のとおりです。

優先配置枠数 (各年度当り)	A. 修士課程、博士前期課程、又は専門職学位課程：	4人
	B. 博士課程又は博士後期課程：	4人
	C. 博士課程（一貫制）：	人
	計	8人
受入開始時期	2022年9月又は10月	
プログラム番号	21002	

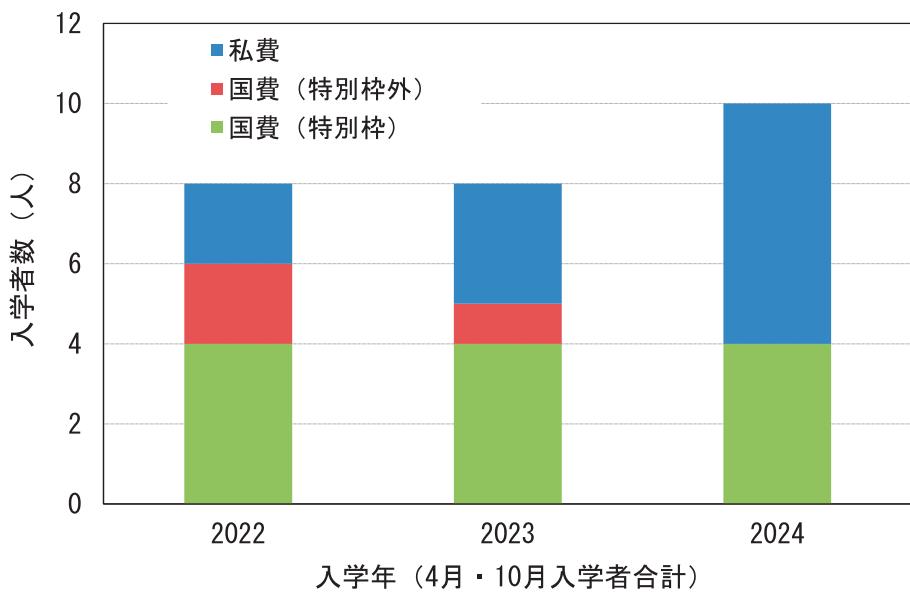


図1 英語特別プログラム入学者数の推移（修士課程・経費別）

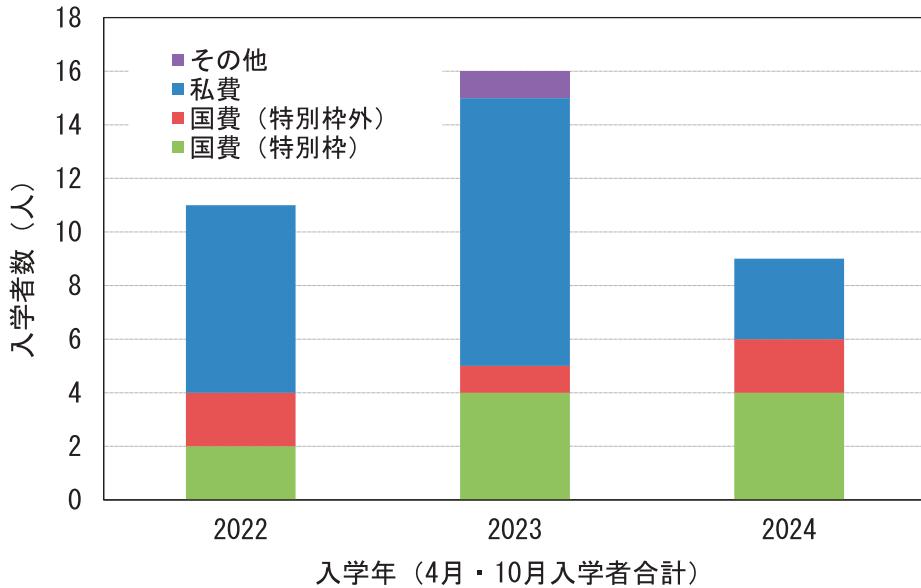


図2 英語特別プログラム入学者数の推移（博士後期課程・経費別）

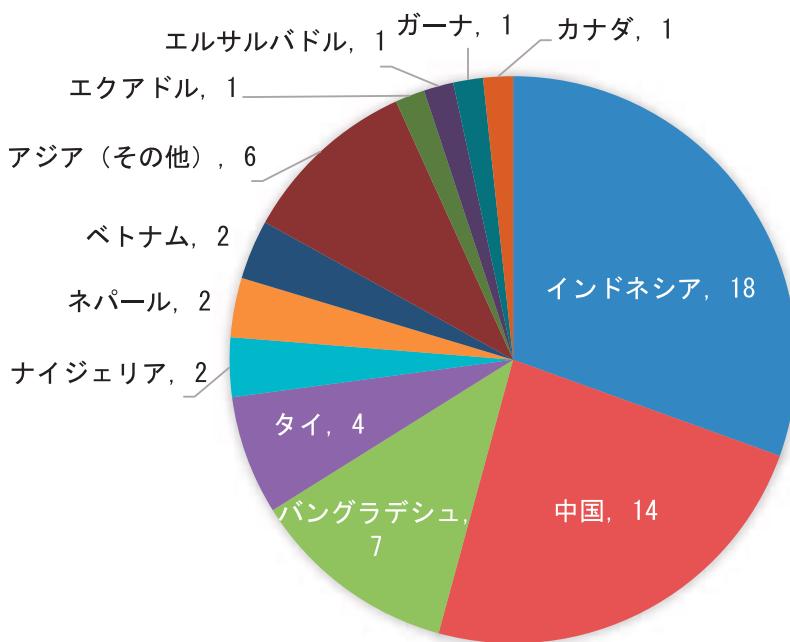


図3 英語特別プログラム入学者数（出身地域別）

2022年4月～2024年10月修士・博士後期課程入学者の合計。日本  
人学生を除く。

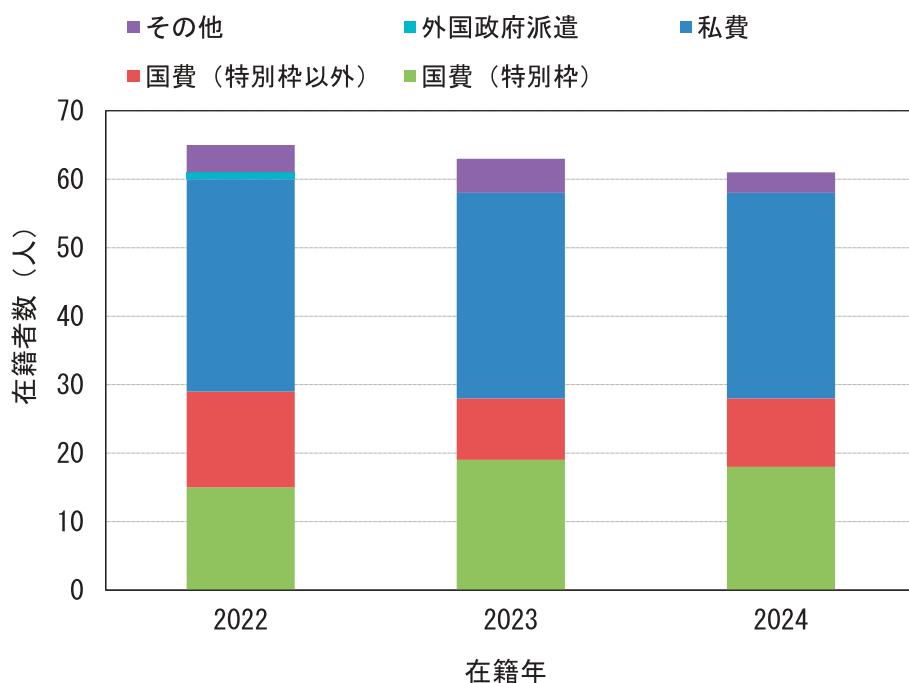


図4 英語特別プログラム在籍者数の推移（経費別）

各年5月1日付けの人数

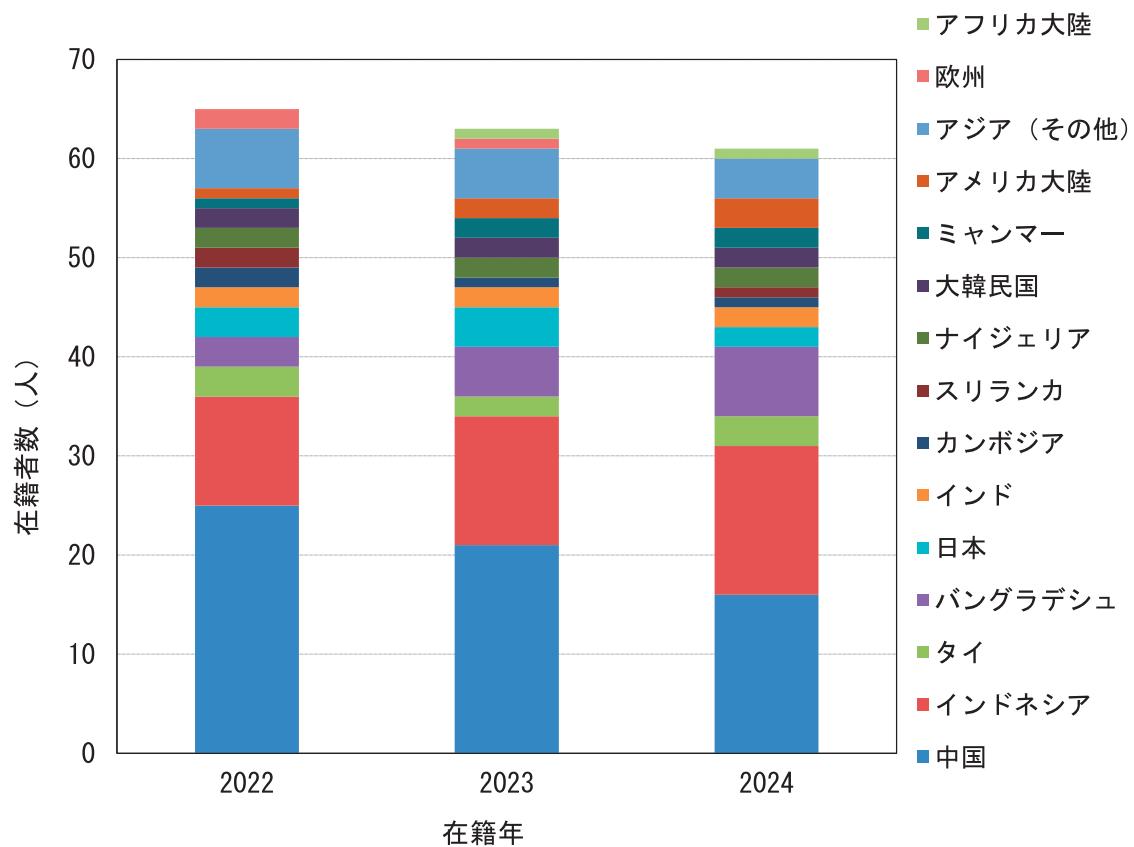


図5 英語特別プログラム在籍者数の推移（出身地域別）

各年5月1日付けの人数

表1 英語特別プログラム修了状況（2020～2023年度入学者）

## 修士課程

入学年度	入学者数	標準修業年限内修了者数	標準修業年限外修了者数	退学者数	在籍中学生数	休学者数	留年	標準修業年限内修了率
2020	5	4	0	1	0	0	0	80.0%
2021	19	17	1	1	0	2	2	89.5%
2022	8	8	0	0	0	0	1	100.0%
2023	8	7	0	0	1	1	0	87.5%

## 修士後期課程

入学年度	入学者数	標準修業年限内修了者数	標準就業年限外修了者数	単位修得退学者数	退学者数	在籍中学生数	休学者数	留年	標準就業年限内修了率
2020	8	5	2	1*	0	0	0	3	62.5%
2021	16	14	1	1*	0	0	0	2	87.5%
2022	11	9	0	0	0	2	0	2	81.8%
2023	17	—	—	—	1	—	0	0	—

\*単位修得退学後1年以内に学位取得

表2 英語特別プログラム留学生の研究業績数（2022年4月～2025年9月）

年度	原著論文数	総説数	著書数	特許数	国内学会発表	国際学会発表	受賞数
2022	32	0	0	1	20	20	0
2023	51	0	0	1	27	12	4
2024	21	1	2	0	28	13	4
2025	22	0	0	0	16	5	1

表3 英語特別プログラム修了者の進路（2022年～2024年度修了者）

			修士課程	博士後期課程
日本国内	大学等	教員	0	2
		研究員	0	5
		大学院生	20	0
	国立研究所等	研究員	0	1
	民間企業等	社員	2	4
日本国外	大学等	教員	0	5
		研究員	0	3
	国立研究所等	研究員	0	1
	民間企業等	社員	4	2
その他・未定等			4	1

## 英語特別プログラム留学生の研究業績一覧（研究室別）

### 動物機能栄養学

#### 1. 原著論文

1. Kodithuwakku, H., Maruyama, D., Owada, H., Watabe, Y., Miura, H., Suzuki, Y., Hieano, K., Kobayashi, Y., and Koike, S. Alterations in rumen microbiota via oral fiber administration during early life in dairy cows. *Sci. Rep.*, 12, 10789 (2022).

### ビーグルロボティクス

#### 1. 原著論文

1. Yu, Y., Liu, L., Wang, J., Noguchi, N., He, Y. Obstacle avoidance method based on double DQN for agricultural robots. *Comput. Electron. Agric.*, 204:107546-107546 (2023).
2. Saha, S., Morita, T., Noguchi, N. A vision-based road detection system for the navigation of an agricultural autonomous tractor. *Eng. Agric. Environ. Food*, 16(2), 43-52 (2023).
3. Amanor, I. N., Ricardo, O. A., Noguchi, N. Assessment of remote sensing in measuring soil parameters for precision tillage. *J. Terramech.*, 113-114, 100973 (2024).
4. Saha, S., Noguchi, N. Smart vineyard row navigation - A machine vision approach leveraging YOLOv8. *Comput. Electron. Agric.*, 229, 0168-1699 (2025).
5. Yu, Y., Kim, Y., Noguchi, N. A non-linear dynamic model for agricultural vehicles constructed in digital space. *Smart Agric. Technol.*, 11, 100891 (2025).
6. Yu, Y., Noguchi, N. A simulation platform for the design and development of new agricultural vehicles. *Eng. Agric. Environ. Food*, 18(2), 105-111 (2025).
7. Amanor, I. N., Ricardo, O. A., Noguchi, N. Assessing wheat yield response to soil compaction using machine learning: A cross-validated study of soil and nutrient dynamics for precision agriculture. *Eng. Agric. Environ. Food*, (in press).

#### 2. 学会発表（○：国内: 0, ●：国際: 3）

1. ● Amanor, I. N., Ospina, R., Noguchi, N. Precision tillage related soil properties measurement using non-contact application of hyperspectral imaging. 6th CIGR International Conference 2024, May 19-23, 2024. Jeju, Korea (Oral presentation).
2. ● Amanor, I. N., Ospina, R., Noguchi, N. Soil compaction management using hyperspectral imaging and machine learning technology on a harvested field. 6th CIGR International Conference 2024, May 19-23, 2024. Jeju, Korea (Oral presentation).
3. ● Saha, S., Noguchi, N. Real-time tree row end detection: A machine vision-based approach to improve navigation of electric vehicles in vineyards. IEEE 6th International Conference on Robotics and Computer Vision (ICRCV), September 20-22, 2024. Wuxi, China. P104-108. (Oral presentation)

### 循環農業システム工学

#### 1. 原著論文

1. Rajapaksha, D.S.W., Shimizu, N. Pilot-scale extraction of polyphenols from spent black tea by semi-continuous subcritical solvent extraction. *Food Chem.* X 13, 100200 (2022).
2. Mohammed, I.S., Na, R., Kushima, K., Shimizu, N. Modeling anaerobic co-digestion of corn stover hydrochar and food waste for sustainable biogas production. *Fermentation*, 8, 110 (2022).
3. Piash, M.I., Iwabuchi, K., and Itoh, T. Synthesizing biochar-based fertilizer with sustained phosphorus and potassium release: Co-pyrolysis of nutrient-rich chicken manure and Ca-bentonite. *Sci. Total Environ.*, 822, 153509 (2022).
4. Yuan, Y., Li F., Han, N., Zeng, B., Imaizumi, Y., Na, R., Shimizu, N. Exploring the valorization of buckwheat waste: A two-stage thermo-chemical process for the production of saccharides and biochar. *Fermentation*, 8, 573 (2022).
5. Aliyu, M., Iwabuchi, K., and Itoh, T. Improvement of the fuel properties of dairy manure by increasing the biomass-to-water ratio in hydrothermal carbonization. *PLoS ONE*, 17, e0269935 (2022).
6. Dalkhsuren, D., Iwabuchi, K., Itoh, T., Narita, T., Piash, M.I., Nachin, B., Sukhbaatar, G. Effects of ash composition and combustion temperature on reduced particulate matter emission by biomass carbonization. *BioEnergy Research*, 16, 1629-1638 (2022).
7. Piash, M.I., Uemura, K., Iwabuchi, K., and Itoh, T. Meat and bone meal biochar can effectively reduce chemical fertilizer requirements for crop production and impart competitive advantages to soil. *J. Environ. Manage.*, 336, 117612 (2023).
8. Li, F., Yuan, Y., Gong, P., Imaizumi, Y., Na, R., Shimizu, N. Comparative effects of mineral fertilizer and digestate on growth, antioxidant system, and physiology of lettuce under salt stress. *Hortic., Environ. Biotechnol.*, 64, 379-391 (2023).
9. Li, X., Shimizu, N. Biochar-promoted methane production and mitigation of acidification during thermophilic anaerobic co-digestion of food waste with crude glycerol: comparison with re-inoculation. *Sustain. Environ. Res.*, 33. 4 (2023).

10. Yuan, Y., Shimizu, N., Li, F., Magaña, J., Li, X. Buckwheat waste depolymerization using a subcritical ethanol solution for extraction of bioactive components: from the laboratory to pilot scale. *J. Environ. Chem. Eng.*, 11, 109807 (2023).
11. Xue, X., Li, X., Shimizu, N. Synthesis evaluation on thermophilic anaerobic co-digestion of tomato plant residue with cattle manure and food waste. *Resour., Environ. Sustain.*, 13, 100119 (2023).
12. Li, F., Yuan, Y., Han, N., Li, X., Bai, R., Magaña, J., Shimizu, N. By-product from livestock waste recovery system used as fertilizer: bioactive compounds and antioxidant activity of tomato fruit as affected by fertilization under field and greenhouse conditions. *Fermentation*, 9, 714 (2023).
13. Shin, Y., Iwabuchi, K., Itoh, T. Low-temperature biochars are more effective in reducing ammonia emissions through various mechanisms during manure composting. *J. Mater. Cycles Waste Manage.*, 26, 138–148 (2023).
14. Li, F., Yuan, Y., Shimizu, N., Jorge, M., Gong, P., Na, R. Impact of organic fertilization by the digestate from by-product on growth, yield and fruit quality of tomato (*Solanum lycopersicum*) and soil properties under greenhouse and field conditions. *Chem. Biol. Technol. Agric.*, 10, 70 (2023).
15. Li, X., Yuan, Y., Li, F., Shimizu, N., Early-stage life cycle assessment and optimization of aqueous crude glycerol extraction and nanofiltration concentration of tomato leaf residue. *ACS Sustain. Chem. Eng.*, 12, 2646–2655 (2024).
16. Bai, R., Li, X., Shimizu, N. Development of a fed-batch-scale anaerobic co-digestion control system based on multivariable output error state space and model predictive control. *Results Eng.*, 22, 102284 (2024).
17. Sultana, Mst. S., Azad, Md. A. K., Shimizu, N., Rana, G. M., M., Yeasmin, Mst. S. Efficacy of aqueous extracts from three plants in controlling cabbage aphid [*Brevicoryne brassicae* L. (Hemiptera: Aphididae)] on field-grown cabbage (*Brassica oleracea* L.). *Technol. Hortic.*, 4, e025 (2024).
18. Piash, M.I., Itoh, T., Abe, K., Iwabuchi, K. Superior nutrient recovery and release by chicken manure-derived biochar over hydrochar and compost for soil fertilization. *Geoderm Reg.*, 40, e00906 (2025).
19. Yuan, Y., Li, F., Shimizu, N. Effect of hydrolysate derived from subcritical seawater treatment of buckwheat waste on the growth of lettuce (*Lactuca sativa* L.). *Plants*, 14(2), 149 (2025).
20. Magaña, A.J.A., Shimizu, N. Digital analysis of mycelium growth and mycelium density *in vitro* of *Pleurotus ostreatus* with submerged fermentation as substrate treatment. *Mycobiology*, 53(2), 214-224 (2025).
21. Sultana, Mst. S., Shimizu, N., Itoh, T., Iwabuchi, K. Efficacy of bottle gourd (*Lagenaria siceraria*) leaf extract in protecting against cabbagelooper (*Trichoplusia ni*) (Lepidoptera: Noctuidae) infestation. *Crop health*, 3, 11 (2025).
22. Mohammed, I.S., Shimizu, N. Design and optimization of a smart IoT-integrated bioreactor for enhanced biogas production using multi-algorithm modelling approaches. *NiJASIT*, 1(3) (2025).

## 2. 学会発表 (○; 国内 1, ●; 国際 13)

1. ●Yuan, Y., Shimizu, N. Enhanced antioxidants and saccharides extraction of buckwheat waste by high temperature ethanol solution: From lab to pilot scale. The XX CIGR World Congress 2022, December 5-10, 2022. Kyoto International Conference Center, Japan (Oral presentation).
2. ●Li, F., Yuan, Y., Li, X., Han, N., Shimizu, N. Variation in growth, physiological traits and soil physicochemical properties of tomato under different nutrition system: In greenhouse and field. The XX CIGR World Congress 2022, December 5-10, 2022. Kyoto International Conference Center, Japan (Oral presentation).
3. ●Li, X., Yuan, Y., Li, F., Shimizu, N. Extraction optimization and concentration through nanofiltration of aqueous crude glycerol extract from tomato leaf residue (TLR). The XX CIGR World Congress 2022, December 5-10, 2022. Kyoto International Conference Center, Japan (Oral presentation).
4. ●Na, R., Yuan, Y., Li, F., Mohammed I. S., Shimizu, N. CO<sub>2</sub> assisted hydrothermal pretreatment of corn stover for enhanced biomethane production. The XX CIGR World Congress 2022, December 5-10, 2022. Kyoto International Conference Center, Japan (Oral presentation).
5. ●Xue, X., Li, X., Shimizu, N. Impact of mixture ratio, feedstock-to-inoculum ratio, and total solid content on reactor performance in anaerobic co-digestion of pyrolyzed tomato plant residue with cattle manure and food waste. The XX CIGR World Congress 2022, December 5-10, 2022. Kyoto International Conference Center, Japan (Oral presentation).
6. ●Shimizu, N., Gong, P., Bai, R. Exploring of optimal experimental factors and system identification and model reference adaptive control of anaerobic co-digestion of food wastes. The XX CIGR World Congress 2022, December 5-10, 2022. Kyoto International Conference Center, Japan (Oral presentation).
7. ●Magaña, J., Shimizu, N. Submerged pasteurization of substrate for *Pleurotus ostreatus* cultivation *in vitro*. The XX CIGR World Congress 2022, December 5-10, 2022. Kyoto International Conference Center, Japan (Oral presentation).
8. ●Mohammed, I. S., Na, R., Shimizu, N. Mathematical modeling of anaerobic co-digestion of corn stover hydrochar and food waste for control design application. The XX CIGR World Congress 2022, December 5-10, 2022. Kyoto International Conference Center, Japan (Oral presentation).
9. ●Shin, Y., Iwabuchi, K., Itoh, T. Effect of different feedstocks and pyrolysis temperatures of biochar on ammonia emissions during dairy manure composting. The XX CIGR World Congress 2022, Dec. 7, 2022. Kyoto, Japan (Oral presentation).
10. ○Dalkhsuren, D., Iwabuchi, K., Itoh, T., Narita, T., Piash, M.I., Nachin, B., Sukhbaatar, G. Reducing the emission of particulate matter during the combustion of various biomass. Hokkaido Branch Meeting of Japan Material Cycle and Waste Management (2022), Nov. 28, 2022. Sapporo, Japan (Poster presentation).
11. ●Piash, M.I., Abe, K., Itoh, T., Iwabuchi, K. Stability of composted and carbonized chicken manure in soil used as

- organic fertilizer. ASA, CSSA, SSSA International Annual Meeting, Nov. 1, 2023. St. Louis, US (Poster presentation).
12. ● Sultana, Mst. S., Shimizu, N. LC-MS based phytochemical profiling towards the identification of biopesticide compound in *Lagenaria siceraria* leaf extracts from Hokkaido. The 17<sup>th</sup> Japan-China-Korea International Postgraduate Academic Forum, September 18–19, 2025. Tsukuba, Japan (online) (Oral presentation, Bronze Prize).
  13. ● Antara, S., Shimizu, N. Enhancing nitrogen efficiency and tuber growth in organic potatoes with biochar–digestate integration. The 17<sup>th</sup> Japan-China-Korea International Postgraduate Academic Forum, September 18–19, 2025. Tsukuba, Japan (online) (Oral presentation, Silver Prize).
  14. ● Jin, Z., Shimizu, N. Polyphenol extraction and microencapsulation from spent green tea: Toward sustainable functional applications. The 17<sup>th</sup> Japan-China-Korea International Postgraduate Academic Forum, September 18–19, 2025. Tsukuba, Japan (online) (Oral presentation, Silver Prize).

### 3. その他

#### 著書

1. Rajapaksha, S., Shimizu, N.: Uses and profile of spent black tea. "Tea in Health and Disease Prevention (ed. by Preedy, V.R., Patel, V.)" Elsevier Academic Press, pp. 879–885, Dec. 2024.

### 作物栄養学

#### 1. 原著論文

1. Zhang, C., Tanaka, N., Dwiyanti, M.S., Shenton, M., Maruyama, H., Shinano, T., Chu, Q., Xie, J., Watanabe, T. Ionomeric Profiling of rice genotypes and identification of varieties with elemental covariation effects. *Rice Sci.*, 29, 76–88 (2022).
2. Suzuki, M., Eguchi, T., Azuma, K., Nakao, A., Kubo, K., Fujimura, S., Syaifudin, M., Maruyama, H., Watanabe, T., Shinano, T. The ratio of plant <sup>137</sup>Cs to exchangeable <sup>137</sup>Cs in soil is a crucial factor in explaining the variation in <sup>137</sup>Cs transferability from soil to plant. *Sci. Total Environ.*, 857, 159208 (2022)
3. Syaifudin, M., Suzuki, M., Maruyama, H., Kubo, K., Watanabe, T., Shinano, T. Potassium applications reduced cesium uptake and altered strontium translocation in soybean plants *Soil Sci. Plant Nutr.* 69, 88–98 (2023)

#### 2. 学会発表 (○; 国内: 1, ●; 国際: 0)

1. ○ Syaifudin, M., Suzuki, M., Maruyama, H., Kubo, K., Watanabe, T., Shinano, T. A study on potassium application's effect on cesium and strontium uptake in soybean. 日本国土壤肥料学会 2022 年度東京大会, 2022 年 9 月 13 日–15 日, 東京 (東京農業大学) (Poster presentation).

### 植物育種学

#### 1. 原著論文

1. am, N. T., Dwiyanti, M. S., Sakaguchi, S., Koide, Y., Dung, L. V., Watanabe, T., Kishima, Y. Identification of a Saltolerant-independent salinity tolerance polymorphism in rice Mekong Delta landraces and characterization of a promising line, Doc Phung. *Rice* 15, 65 (2022).
2. Myint, Z. M., Koide, Y., Takanishi, W., Ikegaya, T., Kwan, C., Hikichi, K., Tokuyama, Y., Okada, S., Onishi, K., Ishikawa, R., Fujita, D., Yamagata, Y., Matsumura, H., Kishima, Y., Kanazawa, A., *Ol/CHR*, encoding a chromatin remodeling factor, is a killer causing hybrid sterility between rice species *Oryza sativa* and *O. longistaminata*. *iScience* 27, 109761 (2024).

#### 2. 学会発表 (○; 国内: 9, ●; 国際: 0)

1. ○ Zin Mar, M., The hybrid sterility locus, S2, is located on rice chromosome 4. NIG-Joint workshop イネ属近縁野生種研究会 生態・遺伝・進化, March 8–9, 2022. Mishima (National Institute of Genetics), Japan (Oral presentation).
2. ○ Christin, S., Kanazawa, A., Dwiyanti, M.S. イオンビーム照射で得られた低クロロフィル・低トコフェロール含有ダイズ突然変異体の解析. 日本国育種学会第 143 回講演会, 2023 年 3 月 18 日. 静岡(静岡大学), (Oral presentation).
3. ○ Dwiyanti, M.S., Aurelia, F., Christin, S.. 北海道で栽培された大豆ミニコレクション (一部) のトコフェロール組成の評価. 日本国育種学会第 144 回講演会, 2023 年 9 月 17 日. 神戸(神戸大学), (Oral presentation).
4. ○ Nishimura-Carmo, E.Y., Dwiyanti, M.S.. ダイズのリファレンスゲノム Williams82 とツルマメのリファレンスゲノム W05 にマッピングした日本ツルマメ系統全ゲノム配列の比較. 日本国育種学会第 144 回講演会, 2023 年 9 月 17 日. 神戸(神戸大学), (Poster presentation).
5. ○ Panapitiya, P.D.D.M., Nakashima, T., Dwiyanti, M.S.. 遮光による大豆のクロロフィル分解とトコフェロール生合成の関係の解明. 日本国育種学会・日本作物学会北海道談話会, 2024 年 12 月 7 日. 札幌(北海道大学), (Oral presentation).
6. ○ Lubba, K., Yamamori, M., Kishima, Y. Disruption of lipid-related gene alters pollen fertility, lipid accumulation, and cold tolerance in rice. 日本国育種学会第 147 回講演会, 2025 年 3 月 20 日. 仙台(東北大学), (Oral presentation).
7. ○ Hoque, M., Sakaguchi, S., Takatori, M., Kinoshita, M., Shinada, H., Yamaguchi, N., Nishimura, T., Kishima, Y. Variation of thermo-sensitivity of heading date found in Hokkaido rice varieties affect heading synchrony and

- premature heading. 日本育種学会第 147 回講演会, 2025 年 3 月 20 日. 仙台(東北大大学), (Oral presentation).
8. ○Zahidah, Q. A., Ishihara, M., Minouchi, Y., Kuniyoshi, D., Yamamoto, T., Nagaki, K., Kishima, Y. A population of diploid interspecific hybrids between Asian and African rice reveals variations of pollen fertility associated with meiotic abnormalities. 日本育種学会第 147 回講演会, 2025 年 3 月 20 日. 仙台(東北大大学), (Oral presentation).
  9. ○Bassalamah, R.F., Dwiyanti, M.S. Elucidation of genetic basis controlling total tocopherol content in soybean seeds. The Food, Water, and Soil Global Center International Symposium, September 22, 2025. Sapporo (Hokkaido University), (Poster presentation).

## 土壤学

### 1. 原著論文

1. Imran Y., Melling L., XhuanWong G., Hatano R., Inoue T., Aeries TB., Goh KJ., Mah DYS. Long term dynamics of surface fluctuation in a peat swamp forest in Sarawak, Malaysia. *Environ. Res. Commun.*, 4, 041001 (2022).
2. Peng S., Wang C., Li Z., Mihara K., Kuramochi K., Toma Y., Hatano R. Climate change multi-model projections in CMIP6 scenarios in Central Hokkaido, Japan. *Sci. Rep.*, 13 (1), 230 (2023).
3. Peng S., Mihara K., Xu X., Kuramochi K., Toma Y., Hatano R. Modeling hydrological processes under Multi-Model projections of climate change in a cold region of Hokkaido, Japan. *Catena*, 234, 107605 (2023).
4. Peng S., Wang C., Li Z., Mihara K., Kuramochi K., Toma Y., Hatano R. Climate change multi-model projections in CMIP6 scenarios in Central Hokkaido, Japan. *Sci. Rep.*, 13, 230 (2023).
5. Peng S., Xu X., Liao R., He B., Mihara K., Kuramochi K., Toma Y., Hatano R. Hydro-climatic extremes shift the hydrologic sensitivity regime in a cold basin. *Sci. Total Environ.*, 949, 174744 (2024).
6. Zhou L., Peng S., Liao R., Mihara K., Kuramochi K., Toma Y., Hatano R. Extremes of temperature and precipitation under CMIP6 scenarios projections over central Hokkaido, Japan. *Int. J. Climatol.*, 44 (16), 6014-6028 (2024).
7. Yang Y., Kosaka G., Uchibayashi H., Zhu Y., Kuramochi K., Shinano T., Watanabe T., Maruyama H., Hamamoto S., Nakao A., Toma Y. Enhanced CO<sub>2</sub> removal and improved carbon budget by enhanced rock weathering: A field experiment in Hokkaido, Japan. *Nutr. Cycl. Agroecosys.*, 131, 47-64 (2025).

### 2. 学会発表 (○; 国内: 8, ●; 国際: 7)

1. ●Imran Y., Melling L., Wong GX., Hatano R., Inoue T., Aeries EB., Goh KJ., Mah DYS. Dynamics of peat surface fluctuation in a Bornean peat swamp forest. 22<sup>nd</sup> World Congress of Soil Science, July 29 –August 5, 2022. Glasgow, UK (Poster presentation).
2. ●Melling L., Wong GX., Busman NA., Inoue T., Goh KJ., Hatano R. Mechanical soil compaction: An important agro-environmental management practice on tropical peatland. 22<sup>nd</sup> World Congress of Soil Science, July 29 –August 5, 2022. Glasgow, UK (Poster presentation).
3. ●Namie H., Shimada K., Zhao SS., Toma Y., Ishiguro M., Hatano R. Influence of tillage practice during the flooding period on major pathways of methane (CH<sub>4</sub>) emission in rice paddy field. 22<sup>nd</sup> World Congress of Soil Science, July 29 –August 5, 2022. Glasgow, UK (Poster presentation).
4. ●Shimada K., Namie H., Zhao SS., Toma Y., Ishiguro M., Hatano R. The effect of multiple inter-tillage weeding on greenhouse gas emissions in paddy field without application of chemical fertilizers and pesticides. 22<sup>nd</sup> World Congress of Soil Science, July 29 –August 5, 2022. Glasgow, UK (Poster presentation).
5. ●Busman NA., Melling L., Imran Y., Hatano R., Watanabe A. Long-term monitoring of carbon dioxide and methane fluxes from different types of tropical peat swamp forests. 22<sup>nd</sup> World Congress of Soil Science, July 29 –August 5, 2022. Glasgow, UK (Oral presentation).
6. ○浪江日和, 島田かさね, Zhao SS., 当真要, 石黒宗秀, 波多野隆介. 中耕除草作業が水田土壤中に封入されたメタン (CH<sub>4</sub>) 動態に与える影響. 日本土壤肥料学会 2022 年度東京大会, 2022 年 9 月 13 日～15 日, 東京, 日本 (Poster presentation).
7. ○島田かさね, 浪江日和, Zhao SS., 当真要, 石黒宗秀, 波多野隆介. 無肥料無農薬水田における多数回中耕除草が温室効果ガス排出に与える影響—連続した 2 年間の結果—. 日本土壤肥料学会 2022 年度東京大会, 2022 年 9 月 13 日～15 日, 東京, 日本 (Poster presentation, 若手ポスター発表優秀賞).
8. ○楊倚麟, 杉山知穂, 城野沙織, 八巻憲和, 平克郎, 河合正人, 当真要, 波多野隆介. 有機質肥料施用が草地生態系の炭素収支および土壤炭素変動へ及ぼす影響. 日本土壤肥料学会北海道支部会, 2022 年 12 月 1 日, 北海道, 日本. (Oral presentation)
9. ○浪江日和, 島田かさね, 趙双双, 当真要, 石黒宗秀, 波多野隆介. 中耕除草による土壤攪乱の頻度が気泡・拡散経路で排出されるメタンおよび亜酸化窒素に与える影響. 日本土壤物理学会大会, 2023 年 10 月 21 日, 神奈川, 日本 (Poster presentation).
10. ○浪江日和, 島田かさね, 趙双双, 当真要, 石黒宗秀, 波多野隆介. 無肥料・無農薬水田における中耕除草がメタン排出に及ぼす影響の調査. 日本土壤肥料学会 2024 福岡大会, 2024 年 9 月 3 日～5 日, 福岡, 日本 (Oral presentation, 若手口頭発表優秀賞).
11. ●Namie H., Shimada K., Zhao SS., Toma Y., Ishiguro M., Ryusuke H. The effects of multiple inter-tillage weeding on

- greenhouse gas emissions in no fertilizer and pesticide rice paddy field - Results from four consecutive years -. 16th International Conference of the East and Southeast Asia Federation of Soil Science Societies, March 26-29, 2024. Thai Nguyen, Vietnam (Oral presentation).
12. ● Yang Y., Yamaki N., Taira K., Kawai M., Toma Y. Effect of different organic fertilizer on soil organic carbon transformation and soil CO<sub>2</sub> emission. 16th International Conference of the East and Southeast Asia Federation of Soil Science Societies, March 26-29, 2024. Thai Nguyen, Vietnam (Oral presentation).
  13. ○ Subedi B., Kishikawa D., Hirata T., Kuramochi K., Toma Y. Effect of tillage intensities and cover crop management practices on nitrogen budget and edamame yield in upland soybean field in Hokkaido, Japan. Hokkaido branch conference of Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition, December 5, 2024. Hokkaido, Japan (Poster presentation).
  14. ○ Tseng WY., Lai HY., Toma Y. Practices and Assessment of Soil Education Framework for Compulsory Schools — A five-session weekly program for elementary and junior high school students in Taiwan in 2020. Hokkaido branch conference of Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition, December 5, 2024. Hokkaido, Japan (Poster presentation).
  15. ○ Ezeaku V., Piash MI., Itoh T., Iwabuchi K., Ueno H., Toma Y. Change of the characteristics of rice husk biochar properties during cultivation time. Hokkaido branch conference of Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition, December 5, 2024. Hokkaido, Japan (Poster presentation).

## 農業土木学

### 1. 原著論文

1. H. Salpisak, Yamamoto T., Inoue T. Clarification of Water Use under the Complicated Irrigation System and its Modeling in the Boribo-Bamnak River Basin, Cambodia. *Int. J. Environ. Rural Dev.*, 14(1), 17-24 (2023).
2. V. Chey, Yamamoto T., Inoue T. Prediction of Land Use Change through the Cellular Automata-Markov Model: A Case Study of the Upper Sangkae River Basin in Cambodia. *Int. J. Environ. Rural Dev.*, 14(1), 82-90 (2023).

### 2. 学会発表 (○; 国内: 1, ●; 国際: 2)

1. ○ V. Chey, Tadao Yamamoto and Takashi Inoue. Prediction of Land Use Change using the CA-Markov Model: A Case Study of the Upper Sangkae River Basin in Cambodia. 第 71 回農業農村工学会北海道支部研究発表会, 2022 年 11 月 14 日, 札幌 (Oral presentation)
2. ● H. Salpisak, Tadao Yamamoto and Takashi Inoue. Clarification of Water Use under the Complicated Irrigation System and its Modeling in the Boribo-Bamnak River Basin, Cambodia. 14th International Conference on Environmental and Rural Development, March 4, 2023, Siem Reap, Cambodia, Book of Abstracts 5 (Oral presentation)
3. ● V. Chey, Tadao Yamamoto and Takashi Inoue. Prediction of Land Use Change through the Cellular Automata-Markov Model: A Case Study of the Upper Sangkae River Basin in Cambodia. 14th International Conference on Environmental and Rural Development, March 4, 2023, Siem Reap, Cambodia, Book of Abstracts 45 (Oral presentation) [Award of Excellent Paper を受賞]

## 生態環境物理学

### 1. 原著論文

1. Nurrohman R.K., Kato, T., Ninomiya, H., Végh, L., Delbart, N., Miyauchi, T., Sato, H., Shiraishi, T., Hirata, R. Future prediction of Siberian wildfire and aerosol emissions via the improved fire module of the spatially explicit individual-based dynamic global vegetation model, *Biogeosciences*, 21, 4195–4227 (2024)

### 2. 学会発表 (○; 国内 4, ●; 国際 ; 7)

1. ● Hu, R., Yamashita, S., Sakaguchi, K., Cui, R., Hirano, H., Sun, L. and Liang, N. Spatiotemporal variation in soil methane uptake in a regrowing deciduous forest in northern Japan. International Symposium on Agricultural Meteorology 2022, March 18, 2022, Online (Oral).
2. ○ Nurrohman, R.K., Kato, T., Siberian wildfires estimation with improved fire module on Spatially Explicit Individual Based (SEIB) DGVM. JpGU Meeting 2022, Aug 2022 (Poster).
3. ● Yusara, A., Kato, T., Ainsworth, E.A., Battisti, R., Kumagai, E., Nakano, S., Wu, Y., and Masutomi, Y. Global estimation for soybean yield using a process-based crop growth model MATCRO. Land Model Development Meeting, December 4-5, 2023, Sapporo, Japan (Poster).
4. ○ Nguyen, L.D., Kato, T., Hayashi, M., Chen, Y-Y., Chu, H-J. Forest above-ground biomass estimation using national forest inventory with airborne LIDAR, SAR data and optical satellite data in Taiwan. JpGU Meeting 2023 (Poster).
5. ○ Nguyen, L.D., Kato, T., Hayashi, M., Chen, Y-Y., Chu, H-J. Forest above-ground biomass estimation using national forest inventory with airborne LIDAR, SAR data and optical satellite data in Taiwan. iLEAPS-JAPAN 2023 (Oral).

6. ○Li, A., Kato, T., Hayashi, M., Nakaji, T. 18-year variation of forest aboveground biomass estimated by multiple periods of airborne lidar in a cool-temperate forest in Northern Japan. JpGU Meeting 2024, 2024, Chiba, Japan (Oral).
7. ●Yusara, A., Kato, T., Ainsworth, E.A., Battisti, R., Kumagai, E., Nakano, S., Wu, Y., and Masutomi, Y. Development of MATCRO-Soy, a process-based model, for global soy yield estimation. The 10th APN (Asia-Pacific Network for Global Change Research) Early Career Professional (ECP) Poster and Networking Session, June 13, 2024, Jakarta, Indonesia (Poster).
8. ●Nguyen, L.D., Kato, T., Hayashi, M. Detection of tree height by spaceborne full-waveform altimetry during 2000s over Hokkaido, AsiaFlux 2024, Japan (Oral).
9. ●Yusara, A., Kato, T., Ainsworth, E.A., Battisti, R., Kumagai, E., Nakano, S., Wu, Y., and Masutomi, Y. Development of process-based soybean growth model MATCRO for global yield estimation. International Symposium on Agricultural Meteorology 2024, March 13-15, 2024, Sendai, Japan (Oral).
10. ●Yusara, A., Kato, T., Ainsworth, E.A., Battisti, R., Kumagai, E., Nakano, S., Wu, Y., Tsusumi-Morita, Y., Kobayashi, K. and Masutomi, Y. Global Soybean Yield Projections Under Future Climate Change Scenarios using an Eco-physiological process-based MATCRO. AGU24 Meeting by American Geophysical Union, December 9-13, 2024, Washington DC, USA (Oral).
11. ●Yusara, A., Kato, T., and Masutomi, Y. Global Soybean Yield Estimations Under Future Climate Change Scenarios using an Eco-physiological process-based MATCRO. International Symposium on Agricultural Meteorology 2025, March 13-16, 2025, Kumamoto, Japan (Oral).

## 土壤保全学

### 1. 原著論文

1. Hossain, M. I., Ishiguro, M. Influence of high pH state of dodecylbenzenesulfonate and dissolved organic matter complex solution on the ultraviolet spectrometry of dodecylbenzenesulfonate. *J. Surfact Deterg.*, 26(1), 1-10 (2022).
2. Hossain, M. I., Ishiguro, M. Precise estimation of dodecylbenzenesulfonate in aqueous solution containing dissolved organic matter extracted from soil using UV-spectrometry. *Eur. J. Soil Sci.*, 73(1), e13150 (2022).
3. Zhou, Z., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., Zhou, P., and Soltutanavong, V. Effect of inter-tillage weeding on rice yield, rice growth, and nutrient dynamics without agrochemical and fertilizer application: Results of a three-year study. *Soil Till. Res.*, 232, 105766 (2023).
4. Zhou, Z., Hamamoto, S., Ishiguro, M., and Kashiwagi, J. Inter-tillage weeding in organic rice farming. *J. Integrated Field Sci.*, 21, 27-29 (2024).
5. Zhou, Z., Hamamoto, S., Kashiwagi, J., Zhu, Y., Ishiguro, M., and Araki, H. Rice yield and nutrient dynamics in a fertilizer-free and agrochemical-free paddy field with inter-tillage weeding. *Soil Till. Res.*, 251, 106531 (2025).

### 2. 学会発表 (○: 国内: 7, ●: 国際: 5)

1. ●Zhu, Y., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., Zhou, Z. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemical and fertilizer: 2. Nitrogen dynamics. 22nd World Congress of Soil Science, 31st July-August 5th, 2022, Glasgow, United Kingdom (Poster presentation).
2. ●Zhiduo, Z., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., and Zhu, Y. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemical and fertilizer: 1. Rice growth and yield. 22nd World Congress of Soil Science. 31st July-August 5th, 2022. Glasgow, United Kingdom, (Poster presentation)
3. ○Zhiduo, Z., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., and Zhu, Y. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemical and fertilizer: 1. Rice growth and yield. 2022 Annual Meeting of Japanese Society of Soil Physics. October 29, 2022. Tsu (Poster presentation)
4. ○Zhu, Y., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., Zhou, Z. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemical and fertilizer: 2. Nitrogen dynamics. Japanese Society of Soil Physics (SP64), October 29, 2022. Mie, Japan (Poster presentation).
5. ○Zhiduo, Z., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., and Zhu, Y. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemicals and fertilizers: 1. Rice yield, growth, phosphorus, and potassium dynamics. 2022 Annual meeting of Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition (Hokkaido Branch). December 1, 2022. Sapporo (Oral presentation)
6. ○Zhu, Y., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., Zhou, Z. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemical and fertilizer: 2. Nitrogen dynamics. Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition (Hokkaido Branch), December 2022, Hokkaido (Oral presentation).
7. ●Zhiduo, Z., Zhu, Y., T., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., and Araki, H. The effect of inter-tillage weeding on rice yield and nutrient dynamics without agricultural chemicals and fertilizers. Hybrid International Symposium on Organic Rice Farming in East and Southeast Asian Countries: Techniques and Effects. March 2-4, 2023, Tsuruoka (Poster presentation)
8. ●Zhiduo, Z., Zhu, Y., Hamamoto, S., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., and Araki, H. The effect of inter-tillage weeding on rice yield, growth and nutrient dynamics without agricultural chemicals and fertilizers. 4th International Conference

- Organic Rice Farming and Production Systems, September 4th-7th, 2023, Sendai, Japan (Oral presentation)
9. ○Zhiduo, Z., Hamamoto, S., Ishiguro, M., and Kashiwagi, J. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemicals and fertilizers. 2023 Annual Meeting of Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition, September 12-14, 2023, Matsuyama (Poster presentation)
  10. ○Zhiduo, Z., Hamamoto, S., Ishiguro, M., and Kashiwagi, J. The effect of inter-tillage weeding on rice straw decomposition and nitrogen release. 2023 Annual meeting of Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition (Hokkaido Branch), December 8, 2023, Sapporo (Poster presentation)
  11. ○Zhu, Y., Uchibayashi, H., Kashiwagi, J., Shinano, T., Maruyama, H., Yamasaki, T., Nishimura, T., Hamamoto, S. Enhanced rock weathering impact on soil CO<sub>2</sub> dynamics: a soybean field monitoring study in Hokkaido. Japan Geoscience Union Meeting (JpGU), May 26-31, 2024, Chiba (Oral presentation).
  12. ●Uchibayashi, H., Wakao, A., Yang, Y., Kosaka, G., Zhu, Y., Hironaka, M., Toma, Y., Hamamoto, S., Sato, T., Nakao, A., Maruyama, H., Watanabe, T., Shinano, T. The impact of one-year basalt powder application on soybean growth and soil carbon on a field scale in Hokkaido, Japan. 61st Clay Minerals Society Meeting, June 3-6, 2024, Hawaii, USA (Poster presentation).

## 生態系管理学

### 1. 原著論文

1. Furukawa, F., Morimoto, J., Yoshimura, N., Koi, T., Shibata, H., Kaneko, K. UAV Video-Based Approach to Identify Damaged Trees in Windthrow Areas. *Remote Sens.*, 14(13), 3170-3170 (2022).
2. Laneng, L. A., Tachiki, Y., Akamatsu, R., Kobayashi, K., Takahata, C. and Nakamura, F. Seasonal home range and habitat selection patterns of sika deer *Cervus nippon* in southern Hokkaido, Japan. *Wildl. Biol.*, 1, e01060 (2023)

## 花卉・緑地計画学

### 1. 原著論文

1. Xu, M., Matsushima, H. Establishing Landscape Networks Based on Visual Quality and Ecological Resistance: A Case Study in Tianmeng Scenic Spot, China. *Forests*, 14(3), 516-516 (2023).
2. Xu, M., Matsushima, H. Multi-dimensional landscape ecological risk assessment and its drivers in coastal areas. *Sci. Total Environ.*, 908, 168183-168183 (2024).
3. Xu, M., Matsushima, H., Zhong, X., Hirabuki, Y., Oka, K., Okoshi, H., Ueno, H. Prediction of the impact of sea level rise in coastal areas where the tide embankments have been constructed. *Landsc. Urban Plan.*, 252, 105193-105193 (2024).

### 2. 学会発表 (○: 国内: 4, ●: 国際: 1)

1. ○植野晴子, 松島肇, 大越陽, 徐夢林, 上杉鮎香, 海水浴場における飛砂防止対策が生物群集に与える影響. 日本生態学会第 70 回全国大会, 3 月 17 日, 2023, オンライン, 日本 (Oral Presentation).
2. ○松島肇, 徐夢林, 吉野航大, 佐藤舜紀, 愛甲哲也, 中山隆治, 井上貴央, 北海道における草原景観の保全状況について. 日本景観生態学会 第 34 回 仙台大会, 6 月 1 日, 2024, 東北学院大学, 日本 (Poster presentation).
3. ●Matsushima, H. and Xu, M. Sand covered seawalls as Hybrid Grey/Green Infrastructure. International Symposium on Landscape Architecture 2024, Jun 15, 2024, The College of Horticulture and Forestry Sciences, Huazhong Agricultural University, China (Oral Presentation).
4. ○松島肇, 徐夢林, 佐藤舜紀, 井上貴央, 中山隆治, 愛甲哲也, 上田裕文, 小林国之, 石黒侑介. 北海道東部における自然草原の保全に向けた課題の整理. 日本造園学会全国大会, 5 月 17 日, 2025, 東京大学, 日本 (Poster presentation).
5. ○Xu, M. and Matsushima, H. Spatial differentiation of urban thermal environments in climate vulnerable zones and equity in the distribution of summer shelter resources—the case of Sapporo, a coastal region in the sub-frigid zone. 日本造園学会全国大会, 5 月 17 日, 2025, 東京大学, 日本 (Poster presentation).

## 食品栄養学

### 1. 原著論文

1. Lee, Y., Tanaka, Y., Iwasaki, W., Yokoyama, F., Joe, G.H., Tsuji, M., Nose, T., Tada, K., Hanai, T., Hori, S., Shimizu, H., Minamida, K., Miwa, K., Ishizuka, S. Dietary supplementation with okara and *Bacillus coagulans* lilac-01 improves hepatic lipid accumulation induced by cholic acids in rats. *J. Funct. Foods*, 90, 104991 (2022).
2. Liu, H., Kohmoto, O., Sakaguchi, A., Hori, S., Tochigi, M., Tada, K., Lee, Y., Kikuchi, K., Ishizuka, S. Taurocholic acid, a primary 12 $\alpha$ -hydroxylated bile acid, induces leakiness in the distal small intestine in rats. *Food Chem. Toxicol.*, 165, 113136 (2022).
3. Iwasaki, W., Yoshida, R., Liu, H., Hori, S., Otsubo, Y., Tanaka, Y., Sato, M., Ishizuka, S. The ratio of 12 $\alpha$  to non-12-hydroxylated bile acids reflects hepatic triacylglycerol accumulation in a high-fat diet-fed C57BL/6J mice. *Sci. Rep.*, 12(1) 16707 (2022).

4. Shimoda, T., Shimizu, H., Iwasaki, W., Liu, H., Kamo, Y., Tada, K., Hanai, T., Hori, S., Joe, G.H., Tanaka, Y., Sato, M., Miyazaki, H., Ishizuka, S. A diet supplemented with cholic acid elevates blood pressure accompanied by albuminuria in rats. *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, 87(4) 434-441 (2023).
  5. Lee, D.G., Iwasaki, W., Hori, S., Kubota, N., Ishizuka, S. Ingesting a fermented milk product reduces liver triacylglycerol accumulation and normalizes gut permeability in rats even under a cholic acid-supplemented condition. *J. Funct. Foods*, 104, 105523 (2023).
  6. Liu, H., Yokoyama, F., Ishizuka, S. Metabolic alterations of the gut–liver axis induced by cholic acid contribute to hepatic steatosis in rats. *Biochim. Biophys. Acta Mol. Cell Biol. Lipids*, 1868(7) 159319 (2023).
  7. Joe, G.H., Hori, S., Takeuchi, A., Ishikawa, S., Pora, K., Yokoyama, F., Iizuka, T., Fujimoto, Y., Lang, W., Kimura, A., Hara, H., Ishizuka, S. Dietary isomaltomegalosaccharides ameliorate lipopolysaccharide-induced endotoxemia in rats. *Food Sci. Technol. Res.*, 31(3) 279-285 (2025).
2. 学会発表 (○; 国内: 1, ●; 国際: 2)
1. ●Liu, H., Kohmoto, O., Sakaguchi, A., Hori, S., Tochigi, M., Tada, K., Lee, Y., Kikuchi, K., Ishizuka, S. Taurocholic acid, a primary 12 $\alpha$ -hydroxylated bile acid, induces leakiness in the distal small intestine in rats. 22nd International Congress of Nutrition, December 6-11, 2022. Tokyo (Poster presentation).
  2. ●Liu, H., Ishizuka, S. Taurocholic acid induces leakiness in the distal small intestine in rats. The 10th Academic Exchange and Cooperative Research Symposium between Swiss Federal Institute of Technology (ETH) and Hokkaido University. March 7-8, 2023.3. Online (Oral presentation).
  3. ○Pora, K., Yoshitsugu, R., Ishizuka, S. Reduced concentrations of bile acids in the enterohepatic circulation in BALB/c mice with ovalbumin-induced allergy. Annual Meeting of the Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry March 4-8, 2025. Sapporo (Poster presentation).

## 食品加工工学

### 1. 原著論文

1. Iweka, P., Kawamura, S., Mitani, T., Kawaguchi, T., Koseki, S. Cow milk progesterone concentration assessment during milking using near-infrared spectroscopy. *Eng. Agric. Environ. Food*, 14, 30-36 (2022).
2. Lembono, Y. F., Matsui, T., Koseki, S., Koyama, K. Impact of Low Humidity on suppressing stem-end rot in avocado during ripening. *Food Bioprocess Technol.*, 18, 5407-5418 (2025).

2. 学会発表 (○; 国内: 0, ●; 国際: 1)

1. ●Lembono, Y. F., Koseki, S., Koyama, K. Investigation of optimum postharvest fungal control condition in ripening of avocado through X-ray inspection. 37th EFFoST International Conference 2023. November 6-8, 2023. Valencia, Spain (Poster presentation).

## 分子酵素学

### 1. 原著論文

1. Shishiuchi, R.<sup>‡</sup>, Kang, H.J.<sup>‡</sup>, Tagami, T., Ueda, Y., Lang, W., Kimura, A., Okuyama, M. Discovery of  $\alpha$ -L-glucosidase raises the possibility of  $\alpha$ -L-glucosides in Nature. *ACS Omega*, 7(50), 47411-47423 (2022). <sup>‡</sup>equally contributed
2. Lang, W., Sirisansaneeyakul, S., Tagami, T., Kang, H.J., Okuyama, M., Sakairi, N., Kimura, A. Nonreducing terminal chimeric isomaltomegalosaccharide and its integration with azoreductase for the remediation of soil-contaminated lipophilic azo dyes. *Carbohydr. Polym.*, 305, 120565 (2023).
3. Lang, W., Tagami, T., Kang, H.J., Okuyama, M., Sakairi, N., Kimura, A. Partial depolymerization of tamarind seed xyloglucan and its functionality toward enhancing the solubility of curcumin. *Carbohydr. Polym.*, 307, 120629 (2023).
4. Kang, H.J., Tagami, T., Okuyama, M. Substrate specificity of GH29  $\alpha$ -L-glucosidases from *Cecembia lonarensis*. *J. Appl. Glycosci.*, 71(3), 91-94 (2024).

2. 学会発表 (○; 国内 0, ●; 国際 2)

1. ●Kang, H.J., Shishiuchi, R., Tagami, T., Ueda, Y., Kimura, A., Okuyama, M. The discovery of the existence of  $\alpha$ -L-glucosidase in nature. The 10th Academic Exchange and Cooperative Research Symposium between ETHZ and Hokkaido University (AECoR-X), March 7-8, 2022. Sapporo (Hokkaido University) (Oral presentation).
2. ●Okuyama, M., Kang, H.J., Shishiuchi, R., Tagami, T. Discovery of the existence of  $\alpha$ -L-glucosidase in nature. 3rd Japan-Switzerland-Germany Workshop on Biocatalysis and Bioprocess Development, Sep 10-12, 2023. Inuyama, Aichi (oral presentation).

## 生物化学

### 1. 原著論文

1. Saburi, W., Ota, T., Kato, K. Tagami, T., Yamashita, K., Yao, M., Mori H., Function and structure of *Lacticaseibacillus casei* GH35  $\beta$ -galactosidase LBCZ\_0230 with high hydrolytic activity to lacto-N-biose I and galacto-N-biose. *J. Appl. Glycosci.*, 70, 43-52 (2023).
2. Auiewiriyankul, W., Saburi, W., Ota, T., Yu, J., Kato, K., Yao, M., Mori, H., Alteration of substrate specificity and

- transglucosylation activity of GH13\_31  $\alpha$ -glucosidase from *Bacillus* sp. AHU2216 through site-directed mutagenesis of Asn258 on  $\beta \rightarrow \alpha$  loop 5. *Molecules*, 28, 3109 (2023).
3. Ota, T., Saburi, W., Jewell, L.E., Hsiang, T., Imai, R., Mori H., Identification and characterization of extracellular GH3  $\beta$ -glucosidase from the pink snow mold fungus, *Microdochium nivale*. *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, 87, 707-716 (2023).
  4. Ota, T., Saburi, W., Komba, S., Mori H., Chemical synthesis of oligosaccharide derivatives with partial structure of  $\beta$ 1-3/1-6 glucan, using monomeric units for the formation of  $\beta$ 1-3 and  $\beta$ 1-6 glucosidic linkages. *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, 87, 1111-1121 (2023).
  5. 5. Ota, T., Saburi, W., Tagami, T., Yu, J., Komba, S., Jewell, L.E., Hsiang, T., Imai, R., Yao, M., Mori H., Molecular mechanism for endo-type action of glycoside hydrolase family 55 endo- $\beta$ -1,3-glucanase on  $\beta$ 1-3/1-6-glucan. *J. Biol. Chem.*, 299, 105294 (2023).
2. 学会発表 (○; 国内: 16, ●; 国際: 0)
1. ○太田 智也, 佐分利 亘, 今場 司朗, 森 春英, 多様な主鎖構造を有する  $\beta$ 1-3/1-6 グルカンの部分構造の有機化学的な合成経路の開発. 令和4年度日本応用糖質科学会北海道支部講演会, 2023年2月3日, 札幌(北海道大学), 要旨4 (Poster presentation)
  2. ○太田 智也, 佐分利 亘, 今場 司朗, 森 春英,  $\beta$ 1-3/1-6 グルカンの部分構造を持つオリゴ糖の化学合成, 日本農芸化学会2023年度大会, 2023年3月15日, 広島(オンライン), 要旨2F09-01 (web Poster presentation).
  3. ○Tianyi Qin, Haruhide Mori, Wataru Saburi, Haruki Oshita, Acceptor preference and acceptor-specific 1,4/1,6-transglucosylation of maltooligosaccharide 4(6)-glucosyltransferase, 日本農芸化学会2023年度大会, 2023年3月15日, 広島(オンライン), 要旨3E05-05 (web Poster presentation).
  4. ○太田 智也, 佐分利 亘, Linda Jewell, Tom Hsiang, 今井 亮三, 森 春英, GH3 $\beta$ -グルコシダーゼ MnBG3A の反応速度と基質阻害に対する单糖の影響, 2023年度日本農芸化学会北海道支部 第53回日本栄養・食糧学会北海道支部 合同学術講演会, 2023年8月5日, 帯広(とかちプラザ), 要旨P4 (Poster presentation). [優秀発表賞受賞]
  5. ○太田 智也, 佐分利 亘, Linda Jewell, Tom Hsiang, 今井 亮三, 森 春英, 雪腐病菌由来 GH3 $\beta$ -グルコシダーゼ MnBG3A の pNP-Glc 加水分解速度への各種配糖体および单糖の影響, 日本応用糖質科学会2023年度大会, 2023年9月13日, 沖縄(沖縄コンベンションセンター), 要旨B1a-6 (Oral & Poster presentation).
  6. ○Tianyi Qin, Momo Sawada, Haruki Oshita, Wataru Saburi, Haruhide Mori, Functions of Phe418 and Tyr612 in acceptor-binding sites of maltooligosaccharide 4(6)-glucosyltransferase from *Tepidibacillus decaturensis*, 日本応用糖質科学会2023年度大会, 2023年9月14日, 沖縄(沖縄コンベンションセンター), 要旨B2a-2 (Oral & Poster presentation).
  7. ○北見 さわ子, 奥野 剛基, 太田 智也, 佐分利 亘, 森 春英, *Bifidobacterium longum* 105A 株由来 GH2 $\beta$ -ガラクトシダーゼの糖転移産物の解析, 2024年度日本農芸化学会北海道支部第1回学術講演会, 2024年7月13日, 帯広(とかちプラザ), 要旨P17 (Poster presentation).
  8. ○服部 駿太, 太田 智也, 佐分利 亘, 森 春英, GH130 $\beta$ -マンノシルグルコースホスホリラーゼの反応における基質非還元末端マンノシル基2位水産基の寄与, 2024年度日本農芸化学会北海道支部第1回学術講演会, 2024年7月13日, 帯広(とかちプラザ), 要旨P18 (Poster presentation).
  9. ○Masanori Uchiyama, Wataru Saburi, Shiho Takei, Toyoyuki Ose, Haruhide Mori, Structural analysis of galactose 2-epimerase complexed with D-galactitol, 2024年度日本農芸化学会北海道支部第1回学術講演会, 2024年7月13日, 帯広(とかちプラザ), 要旨P19 (Poster presentation). [優秀発表賞受賞]
  10. ○内山 昌典, 佐分利 亘, 武井 梢穂, 尾瀬 農之, 森 春英, ガラクトース 2-エピメラーゼの基質特異性の構造基盤, 日本応用糖質科学会2024年度大会, 2024年9月25日, 京都(京都大学), 要旨C1a-6 (Oral & Poster presentation).
  11. ○Tianyi Qin, Tomoya Ota, Wataru Saburi, Haruhide Mori, Effects of mutation of nucleophile catalyst-neighboring residues in GH15 transglucosidase. 2024年度日本農芸化学会北海道支部第2回学術講演会, 2024年12月1日, 札幌(北海道大学), 要旨A8 (Oral presentation).
  12. ○Masanori Uchiyama, Wataru Saburi, Shiho Takei, Toyoyuki Ose, Haruhide Mori, Reaction mechanism of galactose 2-epimerase. 2024年度日本農芸化学会北海道支部第2回学術講演会, 2024年12月1日, 札幌(北海道大学), 要旨A9 (Oral presentation).
  13. ○温湯 蓮実, 内山 昌典, 太田 智也, 佐分利 亘, 森 春英, 触媒中心から遠位のアミノ酸残基変異によるマノース 2-エピメラーゼの高活性化, 令和6年度日本応用糖質科学会北海道支部講演会, 2025年2月3日, 札幌(北海道大学), 要旨6 (Poster presentation).
  14. ○山川 佳乃, 泉 しづく, 太田 智也, 佐分利 亘, 森 春英, ショ糖を利用した ATP 再生反応の Man $\beta$ 1-4Glc 合成への応用, 令和6年度日本応用糖質科学会北海道支部講演会, 2025年2月3日, 札幌(北海道大学), 要旨7 (Poster presentation). [優秀発表賞受賞]

15. ○北見 さわ子, 佐分利 亘, 太田 智也, 尾高 伶, 堀口 博文, 森 春英, *Bifidobacterium longum* 由来 GH2  $\beta$ -ガラクトシダーゼのラクトース分解性における基質結合アミノ酸残基の寄与, 令和 6 年度日本応用糖質科学会北海道支部講演会, 2025 年 2 月 3 日, 札幌 (北海道大学), 要旨 8 (Poster presentation).
16. ○Teni Qin, Tomoya Ota, Wataru Saburi, Haruhide Mori, Conversion of a GH15 transglucosidase into an anomer-retaining hydrolase by site-directed mutagenesis, 日本農芸化学会 2025 年度大会, 2025 年 3 月 6 日, 札幌 (札幌コンベンションセンター), 要旨 3C018 (Poster presentation).

### 3. その他

#### 受賞 :

1. 太田 智也 : 日本農芸化学会北海道支部 奨励賞 (学生会員) 受賞, 受賞題名 : 雪腐病菌由来  $\beta$ -グルカン分解酵素の機能と構造に関する研究, 2023 年 12 月 9 日

#### 総説 :

1. 太田 智也, 佐分利 亘, 森 春英,  $\beta$ 1-3 グルカン分解酵素群の多様な切断様式とその分子基盤. *化学と生物*, 62, 362–364 (2024).

## 微生物生理学

### 1. 原著論文

1. Hisatomi, A., Kastawa N.W.E.P.G., Song, I., Ohkuma, M., Fukiya, S., Sakamoto, M. *Claveliimonas bilis* gen. nov., sp. nov., deoxycholic acid-producing bacteria isolated from human faeces, and reclassification of *Sellimonas monocensis* Zenner et al. 2021 as *Claveliimonas monocensis* comb. nov. *Int. J. Syst. Evol. Microbiol.*, 73, 006030 (2023).
2. 学会発表 (○; 国内: 2, ●; 国際: 0)
  1. ○Kastawa, N.W.E.P.G., Maeda, T., Fukiya, S. Screening of deoxycholic acid-producing bacteria from human faces. The 9<sup>th</sup> Hokkaido University Cross-Departmental Symposium, 2023, October 11, 2023. Hokkaido (Hokkaido University) (Poster Presentation).
  2. ○Kastawa, N.W.E.P.G., Maeda, T., Fukiya, S. Screening of deoxycholic acid-producing bacteria from human faces. Annual Meeting of Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry, 2024, March 24-27, 2024. Tokyo (Tokyo University of Agriculture), Abstract Book 4E6a02 (Oral Presentation).

## 応用食品科学

### 1. 原著論文

1. Chintagavongse, N., Hayakawa, T., Ming-Hsuan, C., Tamano, K., Wakamatsu, J., Mitani, T., Kumura, H. A study of lipolysis induced by adjuncts from edible *Aspergillus* sp. solid culture products on ripened semi-hard cheese. *J. Sci. Food Agric.*, 102 4355–4362 (2022).
2. Huang, Q., Miyaki, N., Li, Z., Takahashi, Y., Ishizuka, S., Hayakawa, T., Wakamatsu, J., Kumura, H. Supplementary effect of whey components on the monascin productivity of *Monascus* sp. *J. Sci. Food Agric.*, 103 4234–4241 (2023).
3. Chintagavongse, N., Kumura, H., Hayakawa, T., Wakamatsu, J., Tamano, K. Identification of cheese rancidity-related lipases in *Aspergillus oryzae* AHU 7139. *J. Biosci. Bioeng.*, 137 381–387 (2024).
4. Chintagavongse, N., Mitani, T., Tamano, K., Hayakawa, T., Wakamatsu, J., Kumura, H. Application of glucose to prepare *Aspergillus oryzae* koji as an adjunct to prevent rancidity in cheese products. *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, 89 275–283 (2025).

### 2. 学会発表 (○; 国内: 6, ●; 国際: 0)

1. ○Huang, Q., Miyaki, N., Li, Z., Hayakawa, T., Wakamatsu, J., Kumura, H. Supplementary effect of whey components on the monascin productivity of *Monascus* sp. Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry Hokkaido Branch Second Academic Meeting December 11, 2022. (Sapporo) Abstract Book A8 (Oral presentation).
2. ○Chintagavongse, N., Takiguchi, H., Hayakawa, T., Wakamatsu, J., Tamano, K., Kumura, H. Investigation of cell-binding fungal lipase releasable by rennet-treated casein. The 2023 Annual Meeting of the Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry, March 15, 2023. Abstract Book 2C03-06 (Online presentation)
3. ○川上 倖奈, Chintagavongse, N., 原 聰美, 玉野 孝一, 早川 徹, 若松 純一, 玖村 朗人, 三谷 朋弘 チーズの風味強化剤としての麹調製～酵素活性と香気特性を指標とした検討～ 酪農科学シンポジウム 9 月 1 日 2023. (福島) ポスター発表番号 23
4. ○Chintagavongse, N., Kawakami, Y., Tamano, K., Hayakawa, T., Wakamatsu, J., Kumura, H. Comparative study of triacylglycerol lipase in *Aspergillus oryzae* associated with adjunct use for dairy application. The 2024 Annual Meeting of the Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry, March 26, 2024. (Tokyo) Abstract Book 3E1p10 (Oral presentation)
5. ○Chintagavongse, N., Tamano, K., Hayakawa, T., Wakamatsu, J. & Kumura, H. Studies to reduce rancidity in ripened cheese caused by koji adjunct from *Aspergillus oryzae* AHU 7139. Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry Hokkaido Branch Second Academic Meeting July 13, 2024. (Obihiro) Abstract Book P13 (Poster presentation).

6. ○Khunsaranon, K., Chintagavongse, N., Oda, K., Mitani, T., Tamano, K., Hayakawa, T. & Kumura, H. Comparative study of rancid related gene expression from *Aspergillus oryzae*. The 2025 Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry March 5, 2025. (Sapporo) Abstract Book 2D091 (Poster presentation)

### 3. その他

受賞 :

1. Chintagavongse, N., 農芸化学会北海道支部学生優秀発表賞、受賞題名 : Studies to reduce rancidity in ripened cheese caused by koji adjunct from *Aspergillus oryzae* AHU 7139. Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry Hokkaido Branch Second Academic Meeting July 13, 2024. (Obihiro) Abstract Book P13 (Excellent Poster Presentation Award)
2. Chintagavongse, N., 農芸化学会北海道支部学生会員奨励賞(2024)、受賞題名 : Studies to reduce rancidity in ripened cheese caused by koji adjunct from *Aspergillus oryzae*.

## 生物有機化学

### 1. 原著論文

1. N. Masui, S. Inoue, E. Agathokleous, H. Matsuura, T. Koike, Elevated Ozone Alters Long-chain Fatty Acids in Leaves of Japanese White Birch Saplings. *Environ. Sci. Pollut. Res. Int.* 30, 79161-79170 (2023).
2. H. Tsuzuki, N. Kitaoka, S. Inoue, K. Takahashi, H. Matsuura, Airborne Methyl Jasmonate is Metabolized to Jasmonic Acid and 12-Hydroxyjasmonic Acid, and Induces Jasmonate Biosynthesis in *Marchantia polymorpha*. *ChemistrySelect*, 5, e202300117 (2023).
3. S. Inoue, H. Tsuzuki, K. Matsuda, N. Kitaoka, H. Matsuura, Investigation of the Biosynthesis Pathway that Generates *cis*-Jasmone. *ChemBioChem* 25, e202300593, (2024).
4. S. Hirota, Y. Ito, S. Inoue, N. Kitaoka, T. Taniguchi, K. Monde, K. Takahashi, H. Matsuura, Isolation and Structure Determination of *cis*-OPDA- $\alpha$ -Monoglyceride from *Arabidopsis thaliana*. *J. Nat. Prod.* 87, 1358-1367, (2024).
5. V. F. Ersalena, N. Kitaoka, H. Matsuura. Unveiling the presence of jasmonoyl-L-isoleucine in three species of moss belonging to Bryophytes. *Biosci. Biotechnol. Biochem.* 89, 1177-1181 (2025).

### 2. 学会発表 (○: 国内: 4, ●: 国際: 1)

1. ●S. Inoue, H. Tsuzuki, K. Matsuda, N. Kitaoka, H. Matsuura, Elucidation of the biosynthetic pathway to give *cis*-jasmone in *Mentha suaveolens*. 59th Meeting of The 24<sup>th</sup> International Conference on Plant Growth Substances, July 4-8, 2023, Gyeongju, Korea, Abstract Book P12 (Poster presentations).
2. ○S. Inoue, K. Takiguchi, N. Kitaoka, K. Matsuda, H. Matsuura, Exploration of plant hormones that increase pyrethrin content in *Tanacetum cinerariifolium*. 59th Meeting of The Japanese Society for Chemical Regulation of Plants, October 31-November 2, 2024, Shizuoka, Abstract Book 020 (Oral and poster presentations). [企業推薦賞受賞]
3. ○V. F. Ersalena, N. Kitaoka, H. Matsuura. Inhibition activities of Tremutin E from endophytic fungus *Irpea lacteus* on *Marchantia polymorpha*. 1st Meeting of Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry Hokkaido Branch, July 13, 2024. Obihiro, Abstract book P1 (Poster presentation).
4. ○V. F. Ersalena, A. Tada, S. Inoue, N. Kitaoka, H. Matsuura. Investigating biologically active compounds from filamentous fungi *Bjerkandera adusta* and *Irpea lacteus* that inhibit the growth of *Marchantia polymorpha*, Annual Meeting of Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry, March 7, 2025. Sapporo, Abstract 4B030 (Poster presentation).
5. ○V. F. Ersalena, N. Kitaoka, H. Matsuura. Unveiling the presence of jasmonoyl-L-isoleucine in three species of moss belonging to Bryophyte. 1st Meeting of Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry Hokkaido Branch, August 9, 2025. Sapporo, Abstract 5 (Oral presentation). [優秀発表賞受賞]

### 3. その他

受賞 :

1. 井上史朗: 2024 年度日本農芸化学会北海道支部学生会員奨励賞受賞、受賞題名 : OPDA 異性化経路に関する研究、令和 6 (2024) 年 11 月 30 日

## 生態化学生物学

### 1. 原著論文

1. Yuta Murai, Takuma Yoshida, Zetryana Puteri Tachrim, and Makoto Hashimoto, Design and synthesis of 1,3-bis(3-(trifluoromethyl)diazirin-3-yl)phenylalanine for efficient photocross-linking, *Heterocycles*, 104, 167-177 (2022)
2. Zeping Wang, Shoko Ishikawa, Fumina Ohashi, Reo Sagisaka, Yuta Murai, Zetryana Puteri Tachrim, Takeyuki Suzuki, and Makoto Hashimoto, Novel synthesis and properties of optically pure *N*-trifluoroacetyl phenylglycine hydroxysuccinimide ester, *Heterocycles*, 105, 406 - 416 (2022)
3. Wen Zhang, Zetryana Puteri Tachrim, Yurika Tokoro, Zeping Wang, Shoko Ishikawa, Yuta Muraia, Takeyuki Suzuki, and Makoto Hashimoto, Hydrogen-deuterium exchange of indole-3-propionic acid with deuterated trifluoromethanesulfonic acid, *Arkivoc*, 2022 (ix), 33-39 (2022)

4. Yu Lin, Hao Wu, Ziang Liu, Jin Li, Rui Cai, Makoto Hashimoto, and Lei Wang, Additive-free aerobic oxidation of hydroazobenzenes: Access to azobenzenes and epoxidation of enones, *Tetrahedron Lett.*, 108, 154132 (2022)
  5. Zetryana Puteri Tachrim, Manami Hashinoki, Zeping Wang, Zhang Wen, Zhuang Zihan, and Makoto Hashimoto, Mild and selective hydrogen–deuterium exchange for aromatic hydrogen of amines, *J. Label. Compd. Radiopharm.*, 66 (10), 321-331 (2023)
  6. Wen Zhang, Kazu Sunami, Shuo Liu, Zihan Zhuang, Yasuko Sakihama, Da-Yang Zhou, Takeyuki Suzuki, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, and Yasuyuki Hashidoko, Accumulation of squalene in filamentous fungi *Trichoderma virens* PS1-7 in the presence of butenafine hydrochloride, squalene epoxidase inhibitor. -Biosynthesis of <sup>13</sup>C-enriched squalene *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, 87 (10) 1129-1138 (2023)
  7. Zetryana Puteri Tachrim, and Makoto Hashimoto, The Intra- and intermolecular Friedel-Crafts acylation of amino acid derivatives in stereo-retarded manner, *Curr. Org. Chem.*, 28 (16), 1225-1228 (2024);
  8. Wen Zhang, Kazu Sunami, Shuo Liu, Desita Triana, Zetryana Puteri Tachrim, Rikuto Kikuchi, Tohru Taniguchi, Kenji Monde, Tsunayoshi Takehara, Da-Yang Zhou, Takeyuki Suzuki, Yasuyuki Hashidoko, Makoto Hashimoto, and Yuta Murai, Scalable preparation of furanosteroiodal viridin,  $\beta$ -viridin and viridiol from *Trichoderma virens*, *Sci. Rep.*, 15, 3110 (2025)
2. 学会発表 (○: 国内: 16, ●: 国際: 0)
1. ○Wang Zeping、石川祥子、大橋史奈、橋本 誠、N-末アシル系保護基によるフェニルグリシン活性エステルの合成とそのペプチド合成への利用、新アミノ酸分析研究会第 12 回学術講演会、2022.12.9、蒲田、東京
  2. ○須波和, Wen Zhang, 劉碩, 崎浜靖子, 橋本 誠, 橋床泰之, 糸状菌 *Trichoderma virens* PS1-7 株の有用代謝産物の増産に向けた培養条件の検討、日本農芸化学会 2022 年度 北海道支部学術講演会、2022.12.11、札幌
  3. ○Wen Zhang, 須波 和, 劉 碩, 庄 梓函, 仲 安琪, 崎浜靖子, 橋本 誠, 橋床泰之, 糸状菌を利用したスクワレン増産の検討、日本農薬学会第 48 回大会、2023.3.8-10、東京
  4. ○Wen Zhang, Zetryana Puteri Tachrim, 橋本 誠、複素芳香環化合物の水素一重水素交換反応の検討、日本農芸化学会 2023 年度大会 2023.3.14~17、広島
  5. ○Wen Zhang, Kazu Sunami, Shuo Liu, Zihan Zhuang, Yasuko Sakihama, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, Yasuyuki Hashidoko, Accumulation of squalene in filamentous fungi *Trichoderma virens* PS1-7 in the presence of butenafine hydrochloride, squalene epoxidase inhibitor -Biosynthesis of <sup>13</sup>C-enriched squalene, 2023 年度 日本農芸化学会北海道支部 第 53 回 日本栄養・食糧学会北海道支部 合同学術講演会、2023.8.5、帯広 (日本農芸化学会北海道支部 学生優秀発表賞 受賞)
  6. ○Zetryana Puteri Tachrim, Natsumi Kurokawa, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, アミノ酸の立体を利用して  $\alpha$ -aminoacetophenone 誘導体の合成、新アミノ酸分析研究会第 13 回学術講演会、2023.12.8、東京
  7. ○Wen Zhang, 生理活性物質の機能解明を目指した低分子安定同位体標識法の検討, 2023 年度日本農芸化学会北海道支部学生会員奨励賞受賞講演, 2023 年度日本農芸化学会北海道支部第 2 回学術講演会, 2023.12.9-10, 札幌
  8. ○Zetryana Puteri Tachrim, Desita Triana Aziz, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, All-in benefits of deuterated triflic acid for hydrogen/deuterium exchange of phenylethylamine and cinnamic acid derivatives, 2023 年度日本農芸化学会北海道支部第 2 回学術講演会, 2023.12.9-10, 札幌
  9. ○Wen Zhang, Kazu Sunami, Yasuko Sakihama, Yasuyuki Hashidoko, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, スクワレン代謝阻害剤を利用した糸状菌におけるスクワレン蓄積ならびに安定同位体標識スクワレンの产生、日本農薬学会 第 49 回大会、2024.3.14-16、奈良
  10. ○Wen Zhang, Akinori Soga, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, Accumulation and bioactivities of CAF 603 in filamentous fungus, 日本農芸化学会 2024 年度大会, 2024.3.23-27, 東京
  11. ○Zetryana Puteri Tachrim, Desita Triana, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, 芳香族アミン誘導体の水素一重水素交換反応, 日本農芸化学会 2024 年度大会, 2024.3.23-27, 東京
  12. ○Desita Triana Aziz, Zetryana Puteri Tachrim, Sayaka Yamada, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, Study on the chemical properties of cinnamic acid derivatives isolated from Indonesian derived plants, 2024 年度 日本農芸化学会北海道支部 第一回学術講演会, 2024.7.13, 帯広
  13. ○Wen Zhang, Kazu Sunami, Shuo Liu, Yasuko Sakihama, Yasuyuki Hashidoko, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, The research on the elucidation, production improvement and bioactivities of metabolites in filamentous fungus, *Trichoderma virens*, 2024 年度 日本農芸化学会北海道支部 第一回学術講演会, 2024.7.13, 帯広
  14. ○Zeping Wang, Shoko Ishikawa, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, Study on stereo static stability and applicability of phenylglycine in peptide synthesis, 2024 年度日本農芸化学会北海道支部第 2 回学術講演会, 2024.11.30-12.1, 札幌
  15. ○Wen Zhang, Kazu Sunami, Shuo Liu, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, Scalable preparation of furanosterooidal viridin,  $\beta$ -viridin and viridiol from *Trichoderma virens*, 2024 年度日本農芸化学会北海道支部第 2 回学術講演会, 2024.11.30-12.1, 札幌

16. ○Wen Zhang, Kazu Sunami, Yasuyuki Hashidoko, Yuta Murai, Makoto Hashimoto, *Trichoderma virens* からの Furanosteroid-viridin, viridiol-類產生最適化検討, 日本農薬学会第 50 回大会、2025.3.11-13 東京.

### 3. その他

#### 受賞 :

1. Wen Zhang, 2023 年度 日本農芸化学会北海道支部 学生優秀発表賞, 2023.8.5, 帯広
2. Wen Zhang, 2023 年度日本農芸化学会北海道支部学生会員奨励賞、生理活性物質の機能解明を目指した低分子安定同位体標識法の検討

#### 著書 :

1. Rose Malina Annuur, Desita Triana, Teni Ernawati, Yuta Murai, Muhammad Aswad, Makoto Hashimoto, and Zetryana Puteri Tachrim, A Review of cinnamic acid's skeleton modification: Features for antibacterial-agent-guided derivatives, *Molecules*, 29 (16), 3929 (2024)

## 木材化学

### 1. 原著論文

1. Manish Kumar, Shogo Taira, Nutthira Pakkang, Kengo Shigetomi and Yasumitsu Uraki: Stretched lignin/polyacrylonitrile blended carbon nanofiber as high conductive electrode in electric double layer capacitor. *Adv. Nat. Sci.-Nanosci. Nanotechnol.*, 13 (2), 025007 (2022).
2. Yan Lyu, Shiori Suzuki, Hiroki Nagano, Kengo Shigetomi, Yutaka Tamai, Yuji Tsutsumi, Yasumitsu Uraki, Effects of hemicelluloses on dehydrogenative polymerization of monolignols with cationic cell wall-bound peroxidase. *Carbohydr. Polym.*, 301, 120305 (2023).
3. Nutthira Pakkang, Shiori Suzuki, Kengo Shigetomi and Yasumitsu Uraki: Assembly of electric double-layer capacitors with hardwood kraft lignin-based electrodes and separator together with ionic liquid electrolyte. *Holzforschung*, 77(2), 119-126, (2023).

## 分子生物学

### 1. 原著論文

1. Banko, P., Okimune, K-I., Nagy, S.K., Hamasaki, A., Morishita, R., Onouchi, H., Takasuka, T.E. In vitro co-expression chromatin assembly and remodeling platform for plant histone variants. *Sci. Rep.*, DOI:10.1038/s41598-024-51460-6. (2024)

### 2. 学会発表 (○; 国内: 3, ●; 国際: 0)

1. ○Banko, P., Okimune, K., Takasuka, T., Co-expression assembly of plant chromatin. Annual Hokkaido Branch Meeting, The Japanese Biochemical Society, July 7, 2022 (Oral).
2. ○Banko, P., Okimune, K., Nagy, S., Takasuka, T. In vitro chromatin assembly platform for *Arabidopsis thaliana*. Annual Meeting, The Molecular Biology Society of Japan, November 29- December 2, 2022, Makuhari (Poster).
3. ○Banko, P., Okimune, K., Nagy, S.K., Takasuka, T. In vitro co-expression chromatin assembly and remodeling platform for plant histone variants. Annual Meeting, The Molecular Biology Society of Japan, December 7, 2023, Makuhari (Poster)

### 3. その他

#### 特許 :

1. 高須賀太一, 沖宗慶一, バンコペトラ, 植物クロマチンの試験管内再構築法, 特願 2022-071114
2. 高須賀太一, 沖宗慶一, バンコペトラ, 東泰暉, 芳賀洵子, ヒストン H3-H4 オクタソームの試験管内再構築法, 特願 2023-188455

## 植物病原学

### 1. 原著論文

1. Ghos, S., Kawakubo, A., Akhter, Md.S., Yoshimura, A., Suto, M., Murakami, K., Konishi, C., Atarashi, H., Nakahara, K.S. In-frame deletion mutant of eIF4E1 attenuates cucumber mosaic virus virulence by interfering with 2b function in tomato. *Physiol. Plant.*, 177, e70369 (2025).

### 2. 学会発表 (○; 国内: 0, ●; 国際: 1)

1. ●Sozib Ghos, S., Kawakubo, A., Suto, M., Atarashi, H., Kuroiwa, K., Gallois, J.L., Nakahara, K.S. The in-frame-deletion allele-encoded eIF4E protein confers resistance to cucumber mosaic virus by inhibiting 2b in tomato. 12<sup>th</sup> International Congress of Plant Pathology (ICPP), August 20-25, 2023, Lyon, France (Poster)

## 根圈制御学

### 1. 原著論文

1. Ezawa, T., Silvestri, A., Maruyama, H., Tawaraya, K., Suzuki, M., Duan, Y., Turina, M., Lanfranco, L. Structurally

- distinct mitoviruses: are they an ancestral lineage of the Mitoviridae exclusive to arbuscular mycorrhizal fungi (Glomeromycotina)? *mBio*, 14, e00240–00223 (2023).
2. Cahyaningtyas, A. and Ezawa, T. Disturbance tolerance of arbuscular mycorrhizal fungi: characterization of life-history strategies along a disturbance gradient in a coastal dune ecosystem. *Plant and Soil*, 495, 535–549 (2023).
2. 学会発表 (○; 国内: 0, ●; 国際: 4)
1. ● Cahyaningtyas, A. and Ezawa, T. Selection of the arbuscular mycorrhizal fungi that regenerate rapidly via soil propagules and intraradical mycelia in a sand-dune ecosystem. 11th International Conference on Mycorrhiza, August 1–5, 2022, Beijing, China, Abstract p. 98 (Oral presentation)
  2. ● Cahyaningtyas, A. and Ezawa, T. Preferential association of juvenile C<sub>4</sub> grass with soil-propagule-mediated colonizers of arbuscular mycorrhizal fungi under low-light conditions. Japanese Society for Soil Science and Plant Nutrition, September 12–14, 2023, Matsuyama, Ehime, p. 35 (Poster presentation)
  3. ● Cahyaningtyas, A. and Ezawa, T. Selection of arbuscular mycorrhizal fungal partners by juvenile C<sub>4</sub> grass under low-light conditions in a frequently disturbed coastal dune ecosystem. Japanese Conference on Mycorrhiza, November 1, 2023, Tsuruoka, Yamagata, p. 6 (Oral presentation)
  4. ● Cahyaningtyas, A. and Ezawa, T. Light intensity alters selection strategy of juvenile C<sub>4</sub> grass for arbuscular mycorrhizal fungal partners. 12th International Conference on Mycorrhiza, August 4–9, 2024, Manchester, UK, p. 140 (Poster presentation)

## 基礎環境微生物学

### 1. 原著論文

1. Tu Z., Lopes H.F.S., Yumoto I. *Fundicoccus fermenti* sp. nov., an indigo-reducing facultative anaerobic alkaliphile isolated from indigo fermentation liquor used for dyeing. *J. Syst. Evol. Microbiol.* 72, 005239 (2022).
2. Farjana N., Furukawa H., Sumi H., Yumoto I. Effect of fermentation scale on microbiota dynamics and metabolic functions for indigo reduction. *Int. J. Mol. Sci.*, 24 (19), 14696 (2023).
3. Farjana N., Tu Z., Furukawa H., Yumoto I. Environmental factors contributing to the convergence of bacterial community structure during indigo reduction. *Front. Microbiol.*, 9:1097595 (2023).
4. Putcha J.P., Kitagawa W. Polyethylene biodegradation by an artificial bacterial consortium: *Rhodococcus* as a competitive plastisphere species. *Microbes Environ.*, 39(3), ME24031 (2024).
5. Islam, MS., Yamamoto, K., Morita, N., Yumoto, I., Kato, S., Nakai, R., Igarashi, K. Complete genome sequence of *Opitutales* bacterium strain ASA1, isolated from soil. *Microbiol. Resour. Announc.*, 13(3), e01032-23 (2024).
6. Islam, MS., Yamamoto, K., Morita, N., Kitagawa W., Yumoto, I., Kato, S., Nakai, R., Igarashi, K. Characterization of *Congregicoccus parvus* gen. nov., sp. nov., a novel slow-growing ultramicrobacterium of the phylum *Verrucomicrobiota*. *PLoS One*, 20(6): e0326734 (2025).
7. Farjana N., Furukawa H., Igarashi K., Kato S., Yumoto I. Importance rapid initial decline in oxidation-reduction potential, followed by an increase in extracellular electron transport activities, for the rapid onset of indigo reduction. *J. Biosci. Bioeng.*, 29:S1389–1723(25)00222-1 (2025).
8. Farjana N., Mitani Y., Kato S., Kanie S. Coelenterazine sulfotransferase from the luminous squid *Watasenia scintillans*. *Biochem. Biophys. Res. Commun.*, 1:777:152215 (2025).
9. Lurette A.O., Ishigami K., Ohbayashi T., Kikuchi Y. Complete genome sequence of *Caballeronia* sp. strain HLA56-a bacterial symbiont isolated from midgut crypts of the leaf-footed bug. *Microbiol. Resour. Announc.* 14:e00603-25, (2025).

### 2. 学会発表 (○; 国内: 3, ●; 国際: 1)

1. ○ Putcha J.P., Kitagawa W. Extracellular expression of *Streptomyces* spp. laccases in *Rhodococcus erythropolis*, 37th Annual Meeting of the Society for Actinomycetes Japan, Hiroshima, Japan, September 7–8, 2023 (Oral and Poster presentation).
2. ○ Islam, MS. Isolation of a novel soil ultramicrobacterium from the rarely cultured *Verrucomicrobiota* phylum". The 37<sup>th</sup> Japan Society of Microbial Ecology (JSME) Conference, Hiroshima, Japan, held on October 27–31, 2024 (Oral).
3. ● Islam, MS. Genomic characterization and potential distribution of a novel *Verrucomicrobiota* ultramicrobacterium. The 15<sup>th</sup> Asian Symposium on Microbial Ecology (ASME), Cheongju, Korea, held on May 28 – 30, 2025 (Poster).
4. ○ Lurette A.O. Investigating the role of gut symbiont *Caballeronia insecticola* on host *R. pedestris* brain development and behavior. The 38th Japan Society of Microbial Ecology (JSME) Conference, Tokyo, Japan, held on September 8–10, 2025 (Oral).

### 3. その他

#### 受賞 :

1. Putcha J.P. Plastic-Eating Bacteria: The Solution to Our Pollution, Research Presentations to Contribute to the SDGs, Science Festa 2023, Hokkaido University, Sapporo, Hokkaido, Japan, December 16–17, 2023. (Poster presentation (SDGs Award winner))
2. Islam, MS. Isolation of a novel soil ultramicrobacterium from the rarely cultured *Verrucomicrobiota* phylum". The 37<sup>th</sup> Japan Society of Microbial Ecology (JSME) Conference, Hiroshima, Japan, held on October 27–31, 2024 (Best Oral

- Presenter winner).
3. Lurette A.O. Investigating the role of gut symbiont *Caballeronia insecticola* on host *R. pedestris* brain development and behavior. The 38th Japan Society of Microbial Ecology (JSME) Conference, Tokyo, Japan, held on September 8-10, 2025 (Best Oral Presenter winner).

## 動物生態学

### 1. 原著論文

1. T. Yatsuyanagi, T. Kanbe, K. Fujii, S. Inoue, H. Araki. Environmental DNA unveils deep phylogeographic structure of a freshwater fish *Mol. Ecol.* 33: e17337 (2024)
2. 学会発表 (○; 国内:1, ●; 国際:0)
  1. ○Yatsuyanagi, T., Kanbe, T., Mizumoto, H., Inoue, S., Araki, H. Understanding biogeography of rockfishes (genus *Sebastes*) in northern Japan using an eDNA metabarcoding approach. 第 69 回日本生態学会大会、オンライン開催、2022 年 3 月 14-19 日 (Poster)

## 昆虫体系学

### 1. 原著論文

1. Cheng, Z. & Yoshizawa, K. Exploration of the homology among the muscles associated with the female genitalia of the three suborders of Psocodea (Insecta). *Arthropod Struct. Dev.* 66: 101141 (2022).
2. Suzumura A.L., Kawauchi R., Ôhara M., Inari N., Kobayashi N. Records of the Supralittoral Species of the Genus *Cercyon* Leach (Coleoptera, Hydrophilidae) from Hokkaido, Japan. *Elytra*, 12(1): 79–113. (2022).
3. Suzumura A.L., Yamamoto S. First record of *Aleochara (Emplenota) segregata* Yamamoto et Maruyama, 2012 (Coleoptera, Staphylinidae, Aleocharinae) from North Korea. *Elytra*, 12(1):72–74 (2022).
4. Suzumura A.L., Tsuji Y. Records of the Introduced Australian Genus *Microchaetes* Hope, 1834 (Coleoptera: Byrrhidae) in Japan with a New Prefectural Record from Miyazaki. *Coleopt. Bull.*, 76(1): 85–94. (2022).
5. Suzumura A.L., van Berge Henegouwen A., Budi A. A New Species of *Sphaeridium* Fabricius, 1775 (Coleoptera: Hydrophilidae) from Indonesia. *Coleopt. Bull.*, 76(1): 19–24. (2022).
6. I.N. dela Cruz, Ôhara M. New records and redescription of *Atholus bifrons* (Marseul, 1854) (Coleoptera, Histeridae) from the Ryukyus, Japan and Borneo island, Indonesia. *Elytra*, 12(2): 237–245. (2022)
7. Cheng, Z., Kamimura, Y., Ferreira, R. L., Lienhard, C. & Yoshizawa, K. Are males just passive? Coupling mechanism of the Brazilian cave insects with inverted genitalia. *Sci. Nat.* 110: 26 (2023).
8. Cheng, Z., Kamimura, Y., Ferreira, R. L., Lienhard, C. & Yoshizawa, K. Acquisition of novel muscles enabled protruding and retracting mechanisms of female penis in sex-role reversed cave insects. *R. Soc. Open Sci.*, 10: 220471. (2023).
9. I.N. dela Cruz, Ôhara M. Revision of the genus *Atholus* Thomson, 1859 (Coleoptera, Histeridae, Histerinae) from the Philippines with additional records. *ZooKeys* 1158: 1–26. (2023)
10. I.N. dela Cruz, Ôhara M. Additional records of the Japanese species of the genus *Atholus* Thomson, 1859 (Coleoptera, Histeridae), with SEM photos of external characters and illustrations of mouthparts and female genitalia. *Elytra*, 13(1): 13–38. (2023)
11. Ôhara, M., Kobayashi, N., I.N. dela Cruz. Japanese supralittoral hydrophilid beetles (Coleoptera, Hydrophilidae) in the Ehime University Museum Insect Collection, Matsuyama, Japan. *Elytra*, 13(1): 58–60. (2023)
12. I.N. dela Cruz, Ho, Y.H., Ôhara M. Taxonomic notes of the endemic hister beetle *Atholus nitidissimus* Desbordes, 1925 (Coleoptera, Histerinae, Histerini) from the Philippines. *Elytra*, 13(2): 239–244. (2023)
13. I.N. dela Cruz, Murakami, M. and Ôhara, M., New habitat record and possible ant-association of two species of Histeroidea (Coleoptera) in Japan. *Elytra*, 13(2): 245–246. (2023).
14. Ôhara, M., Kobayashi, N., I.N. dela Cruz, Ando, K., Japanese supra-littoral tenebrionid beetles (Coleoptera, Tenebrionidae) in the Ehime University Museum Insect Collection. *Elytra*, 13(2): 315–320. (2023).
15. Ho, Y.H., I.N. dela Cruz, Ôhara M. Additional records of the species of the Genus *Atholus* Thomson (Coleoptera, Histeridae) from Taiwan, with an updated key to the Taiwanese species. *Tai. J. Ent. Stud.* 8(2): 40–50. (2023).
16. I.N. dela Cruz, Hartini, S., Dwibadra, D., Ôhara M. Contribution to the knowledge of the Genus *Atholus* (Coleoptera, Histeridae, Histerinae, Histerini) from the Indonesian archipelago. *Spec. Divers.* 29: 119–139. (2023).
17. I.N. dela Cruz, Li, X.F. and Ôhara, M. Some of the Histerini beetles collected from cow dung in Liaoning Province, China with new record of *Atholus duodecimstriatus quatuordecimstriatus* (Coleoptera, Histeridae). *Elytra*, 14(2): 247–248. (2024).
18. Tong, X., Kobayashi Y., Ikeda M., Wen H., Akimoto S., Shigenobu S., Draft Genome Sequences of *Buchnera aphidicola* from Three Aphid Species (Hemiptera: Aphididae: Eriosomatinae) Associated with Gall Formation on Elm Trees, *Microbiol. Resour. Announc.* 14:e00336-25 (2025).
2. 学会発表 (○; 国内: 2, ●; 国際: 2)
  1. ○Cheng, Z., Kamimura, Y., Ferreira, R. L., Lienhard, C. & Yoshizawa, K. Acquisition of novel muscles enabled protruding and retracting mechanisms of female penis in sex-role reversed cave insects. 日本昆虫学会第 82 回大会 2022.

(優秀ポスター賞)

2. ●dela Cruz, I.N. and M. Ôhara. The histerid beetle *Atholus* Thomson, 1859 (Coleoptera, Histeridae) in the Oriental Region and their distribution in the Indo-Australian Archipelago (IAA). International Congress of Entomology, August 2024, Kyoto (poster presentation)
3. ○dela Cruz, I.N. Review of the genus *Platylistes* Lewis, 1892 from the Philippine archipelago and its possible life strategies in the Oriental tropics (Coleoptera, Histeridae, Histerinae). Congress on the Hokkaido Society for Applied Animal and Insect Research, January 2024, Sapporo (oral presentation)
4. ●Suzumura A.L. Review of the northern Pacific genus, *Phaleromela* Reitter, 1916 (Coleoptera: Tenebrionidae). ESA, ESC, ESBC Joint Annual Meeting, Vancouver, Canada, 13-16 November 2022, Poster presentation

## 北海道大学 大学院農学研究院

〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目

電話番号 : 011-706-2422 (事務部)

電子メール : [kyomu@agr.hokudai.ac.jp](mailto:kyomu@agr.hokudai.ac.jp)

公式サイト : <https://www.agr.hokudai.ac.jp/spgp/>

### 自己点検評価報告書タスクフォース

リーダー : 奥山 正幸

副リーダー : 崎浜 靖子

アドバイザー : 園山 慶

環境保全領域 : 小池 聰 三浦 広卓

食品科学領域 : 石山 信雄 山本 忠男

食料生産領域 : 若松 純一 比良 徹

生命科学領域 : 大原 昌宏 浅野 真一郎

発行 : 2026年1月

印刷 : 株式会社アイワード



